

# 観世流・金剛流 宗家本發行元 檜書店

〒101-0052 東京都千代田区神田小川町2-1  
電話 03(3291)2488 振替00130-7-3552  
〒604-0935 京都市中京区二条通越屋町東入  
電話 075(231)1990 振替01010-0-113

# 能 楽 の 友

## 発行能楽の友社

名古屋市中区千種区千種2丁目18-18  
(郵便番号 464-0858)  
電話 (052) 731-7984  
FAX (052) 733-2837  
振替口座 00800-6-36393

購読料 1年 1100円  
郵送の場合 1年 1800円  
— 部 100円

## 三日本能楽会主催三

# 国家指定「能楽」鑑賞会

### 2月27日 名古屋公演

社団法人日本能楽会の主催による「国家指定芸術「能楽」鑑賞会

名古屋公演」がきたる二月二十七日(日)名古屋能楽堂で開催される。この国家指定芸術「能楽」鑑賞会は重要無形文化財総合指定の認定を受けた能楽師で組織される社団法人日本能楽会が主催する公演で、今年も名古屋、北陸地区が担当、名古屋では十二年ぶりの開催である。後援は文化庁、社団法人能楽協会。開演は十二時三十分。番組は、宝生流能「春日龍神」小書白頭(シテ衣裳正意)観世流能「草子洗小町」小書替装束(シテ梅田邦久)和泉流狂言「棒縛」(野村英臣)観世流舞踊「高砂」(中川雅章)「卒都婆小町」(泉嘉夫)「熊坂」(久田勘助)喜多流舞踊「実盛」(長田豊、宝生流舞「采女」(渡辺谷之助)の上演。(番組⑤面掲載)

## 謡初式と新年総会

### 能楽協会名古屋支部

能楽協会名古屋支部(泉嘉夫支部長)は平成十一年の新春を迎え一月三日午前十時三十分から熱田神宮能楽殿で恒例の新年謡初式を挙行、「四海波」を謡い新しい年の幕開けを祝賀した。続いて楽屋で総会を開催、熱田神宮能楽殿運営委員会・二橋一彦委員長・熱田神宮権宮司から新年のあいさつとともに「熱田神宮能楽殿が昭和三十年から地域の文化振興のために果たしてきた役割りをあらためて認識し、今後とも文化の殿堂としての役割りがつとめられるよう尽力して頂きたい」と熱田神宮能楽殿の利用について希望を述べ、泉嘉夫支部長から「昨年一年間の協会名古屋支部の演能活動についてご協力にご尽力を感謝する。本年もさらなるご支援をお願いしたい」と年頭のあいさつを述べるとともに二橋能楽殿運営委員長挨拶をうけ、冷房設備の改良も必要であり、財政上期間の能など行事の増加が求められている。

名古屋公演」がきたる二月二十七日(日)名古屋能楽堂で開催される。この国家指定芸術「能楽」鑑賞会は重要無形文化財総合指定の認定を受けた能楽師で組織される社団法人日本能楽会が主催する公演で、今年も名古屋、北陸地区が担当、名古屋では十二年ぶりの開催である。後援は文化庁、社団法人能楽協会。開演は十二時三十分。番組は、宝生流能「春日龍神」小書白頭(シテ衣裳正意)観世流能「草子洗小町」小書替装束(シテ梅田邦久)和泉流狂言「棒縛」(野村英臣)観世流舞踊「高砂」(中川雅章)「卒都婆小町」(泉嘉夫)「熊坂」(久田勘助)喜多流舞踊「実盛」(長田豊、宝生流舞「采女」(渡辺谷之助)の上演。(番組⑤面掲載)

## 年 新 賀 謹

### 熱田神宮能楽殿運営委員会

委員長	熱田神宮権宮司	二橋 一彦
委員	熱田神宮権長	大山 剛
委員	熱田神宮権部長	宮田 理博
委員	熱田神宮権部長	水田 順造
委員	熱田神宮権部長	木村 清次
委員	熱田神宮権部長	小林 允
委員	熱田神宮権部長	野村又三郎
委員	熱田神宮権部長	梅田 邦久
委員	熱田神宮権部長	衣斐 正直
委員	熱田神宮権部長	飯富 雅介
委員	熱田神宮権部長	井上 祐一
委員	熱田神宮権部長	鬼頭喜太郎
委員	熱田神宮権部長	福井啓次郎
委員	熱田神宮権部長	藤田六郎兵衛
顧問	熱田神宮権部長	長谷 晴男
顧問	熱田神宮権部長	鈴木 忠一

### 能楽協会名古屋支部 平成11年度 事業予定

- ◎熱田奉納能  
六月五日(日) 喜多流能「放下僧」(長田豊)  
宝生流能「半 節」(衣裳愛)  
観世流能 未定  
ほか和泉流狂言、金春流舞踊
- ◎名古屋新能  
八月七日(日) 宝生流能「高砂」(佐藤耕司)  
観世流能「班女」(久田勘助)  
||半能  
観世流能「国植」(泉 嘉夫)
- ◎初秋能  
九月五日(日) 「第一部」喜多流能「松風」(長田豊)  
「第二部」宝生流能「熊野」(竹内澄子)  
観世流能「殺生石」(八神孝充)  
ほか狂言、仕舞
- ◎歳末助け合い能  
十二月五日(日) 観世流能「巴」(松山幸親)  
宝生流能「籠太鼓」(玉井博祐)  
観世流能「恋重荷」(梅田邦久)  
ほか狂言、金春流、金剛流舞踊

### 謹 賀 新 年

## 名古屋能楽堂

名古屋市中区三の九一丁目一番一  
電話 〇五二(二三三)〇〇八八番

## 年 新 賀 謹

名古屋観世会	大槻清韻会	名古屋観世九阜会	片山慶次郎	片山九郎右衛門	梅若万紀夫	梅若盛義
名古屋正花会	大槻文蔵	観世喜喜正之	片山慶次郎	片山九郎右衛門	梅若万佐晴	梅若盛義
山本勝一	武田志房	加藤保彦	片山慶次郎	片山九郎右衛門	梅若万佐晴	梅若盛義
山本博通	武田志房	高木美智子	片山慶次郎	片山九郎右衛門	梅若万佐晴	梅若盛義
山本博通	武田志房	高橋瞭一	片山慶次郎	片山九郎右衛門	梅若万佐晴	梅若盛義
山本博通	武田志房	野村四郎	片山慶次郎	片山九郎右衛門	梅若万佐晴	梅若盛義

演能カレンダー

名古屋能楽堂

- 〔平成11年1月〕
16日(土) 能で観る平家物語(有料)(番組②面)
24日(日) 名古屋宝生会定式能(有料)(番組②面)
30日(土) 青陽会定式能(有料)(番組③面)
31日(日) 柳原富司忠職分30周年記念能(有料)(番組③面)
〔2月〕
12日(金) 名古屋能楽堂定例公演(有料)(番組④面)
13日(土) 狂言鑑賞会(鳳の会)(有料)(番組④面)
14日(日) 名古屋観世会定式能(有料)(番組④面)
20日(土) 能で観る平家物語(有料)(番組④面)
21日(日) 名古屋観世九章会(有料)(番組⑤面)
27日(土) 日本能楽会名古屋公演(有料)(番組⑤面)

熱田神宮能楽殿

- 〔1月〕
17日(日) 和泉元彌を観る会(有料)
〔3月〕
20日(土) 梅 猶 会(有料)
〔4月〕
4日(日) 猶 謡 会(無料)
18日(日) 幸 謡 会(無料)

名古屋能楽堂 企画展案内

名古屋能楽堂では、能・狂言など伝統芸能活動の拠点施設として展示室があり、「名古屋の能楽」や「能楽の世界」をパネルや映像でわかりやすく紹介しているが、同時にこの施設による企画展を毎月テーマを設定して開催している。新春一月二十一日から二月七日までは企画展「鶴亀展」を開催。能「鶴亀」を装束、能面、謡曲、本などで紹介している。また、二月十三日から三月十四日まで一カ月間、「愛知の能楽展」として郷土の能楽を紹介する。

能で観る平家物語(第十回)

平成十一年一月十六日(土)午後二時始
名古屋能楽堂

お話 井沢 元彦

茶摘女 武田 志房
前里の女 観世 清和
後、静御前の登

二人静

福王茂十郎 山本 孝
立出之一声 大倉源次郎 藤田六郎兵衛

後見 上田 公威
大江 梓葉
赤松 植英

武富 康之 上田 拓司
吉井 基晴 上野 朝義
山本 博通 大槻 文蔵
上野 雄三 上田 貴弘

主催 花伝の会
藤田 六郎兵衛
大槻 文蔵

〔入場料〕一回券五千円(自由席)
※問い合わせ・申込みは花伝の会(052・571・3464)
六郎兵衛事務所(052・571・3464) 藤田

第四十三期・第一回

名古屋宝生会定式能

一月二十四日(日)午後一時始
名古屋能楽堂

番組 素謡

鬼頭 嘉男
稲川 寿一
地謡

和久莊太郎
馬場富四夫
辰巳 克孝
佐藤 耕司

東北

辰巳 満次郎 杉江 正樹
相元 寛一 藤田六郎兵衛
西村 信広 後藤孝一郎

後見 辰巳 孝
稲川 寿一
地謡

柑子

狂言 野村又三郎
後見 松田 高義

嵐山 佐藤 耕司
雲林院 佐藤 正宜
安宅 衣斐 正宜

小鍛冶

竹内 澄子 飯富 雅介
橋本 幸 福井啓次郎
間 松田 高義

後見 玉井 博祐
衣斐 愛 地謡

附祝言

〔要員券〕
年四回綴り一万八千円
事務所 名古屋宝生会
名古屋市天白区島田二一三〇一
(当日の販売もあります)

電話FAX 〇五二一八〇三三七七二
携帯TEL 〇三〇一五六九一四三三五



井上嘉久

観世芳宏門人会

観世芳宏

観世芳伸

大西智久
礼久

山中能舞台

山中義滋

邦謡会

梅田邦久

清沢一政
須部甫
本島良一
高島美和
今沢美和

壺泉会

嘉夫

名古屋昭和区山手通3・8・2・306
電話(〇五二)八三三二一三二八五
西宮市甲陽園目神山町二二二二五
電話(〇七九八)二二四五八

名古屋橋岡会

名古屋昭和区丸屋町五ノ三五
山田紀子方

武田謳楽会

武田欣司
武田邦弘

大垣浦声会

積古場 大垣市伝馬町大垣別院
電話(〇五八四)七三三三六二

浦田保利
浦田保浩
浦田保親

久田観正会

久田徹二
馬場信至
玉木孝男
星野路子
久田野郎

大倉流小鼓
松月会
松山会
松山幸親

名古屋修諷会

梅若修一

名古屋淡交会

橋岡慈観
三交會
久田三津子

千451-003 名古屋市名東区一社3-182
電話(〇五二)七〇五一一五八五

松音会
泰孝

佳泉会
雅一郎

山本眞義
山本章弘

初陽会

武田宗和

上田観正会 TEL〇七八一
社団法人観正会 TEL〇七九一
上田 田 貴弘
大公拓司

財団法人鎌倉能舞台

中森晶三
中森貫太

賀水会

桑名賀水会
名鉄百貨店友の会
花農の会
加賀敏彦

千451-003 名古屋山守区森孝二丁目七〇九
電話(〇五二)七七一八八九四五番



演 能 案 内

青陽会定式能 (第143期)

一月三十日(土) 十二時半開演

名古屋能楽堂

神 歌

高砂 近藤幸江

東北 瀬戸洋子

星野路子

鶴 亀

高安勝久

河崎 鬼頭好信

素 抱 落

井上祐一

井上祐一

采 女

河村真之介

河村真之介

老 松

中川雅章

中川雅章

花 月

古橋正邦

古橋正邦

鉄 輪

飯沼雅介

飯沼雅介

附 祝 言

大野弘之

大野弘之

当日券三千円

主催 青陽会

柳原富司忠 職分三十周年 記念能

一月三十一日(日) 正午始め

名古屋能楽堂

能 組

菊 慈 童

飯沼雅介

能 組

難 波

藤井 徳三

一 調

雲 林 院

山本 勝一

梅 若 六郎

福王 和幸

附 祝 言

井上祐一

主催 柳原富司忠会

入場料(全席指定) S席 一五、〇〇〇円 A席 一三、〇〇〇円

お申込み・お問合せ 名古屋市昭和区滝川町四七一―四七

TEL・FAX (052) 832-1103



下 田 雄 三

豊中市曾根東町四―一―二

雄 諷 会 中 部 地 区 連 合 会

名古屋 和 諷 会

一 宮 竹 石 会

岐 阜 花 諷 会

下 呂 雄 諷 会

倭 文 之 屋 社 中 会

笙 月 会 中 川 雅 章

洗 心 会 奥 村 富 久 子

中 日 文 化 セ ン タ ー

翠 話 会

生 駒 里 翠

觀 修 会 祖 父 江 修 一

猶 患 会 熊 沢 惠 美 子

芳 韻 会 稲 生 芳 雄

幸 誦 会 近 藤 幸 江

重 陽 会 菊 池 重 郷

惠 誦 会 三 村 惠 子

光 盛 会 熊 沢 光 俱

千 早 会 八 神 孝 充

臘 月 会 加 藤 春 枝

松 盛 会

小 松 勝 憲

名 古 屋 巽 会

辰 巳 孝

惠 美 寿 会

衣 斐 正 宜

衣 斐 正 宜 後 援 会

佐 野 由 於

倉 本 雅

宝 生 流

嘉 宝 会

司 宝 会

廣 田 後 援 会

廣 田 隆 一

廣 田 幸 稔

菊 扇 会

後 援 会

廣 田 泰 三

廣 田 泰 三

豐 嶋 三 千 春

金 剛 流 景 雲 会

能 を 樂 し む 会

宇 高 通 成 後 援 会

宇 高 通 成 面 乃 会

宇 高 通 成 研 究 会

宇 高 通 成

德 電 通 成 成

京 都 市 左 京 区 高 野 泉 町 四 〇

京 都 市 左 京 区 上 高 野 藤 田 町 二

京 都 市 左 京 区 上 高 野 藤 田 町 二

京 都 市 左 京 区 上 高 野 藤 田 町 二

京 都 市 左 京 区 上 高 野 藤 田 町 二

京 都 市 左 京 区 上 高 野 藤 田 町 二

京 都 市 左 京 区 上 高 野 藤 田 町 二

京 都 市 左 京 区 上 高 野 藤 田 町 二

京 都 市 左 京 区 上 高 野 藤 田 町 二

名古屋能楽堂定例公演

二月十二日(金)午後六時半始  
名古屋能楽堂

狂言 宝の笠 大徳冠者 井上 靖浩 兼観者 井上 祐一 都の者 大野 弘之助 後見 井上禮之助

高山 砂 飯富 雅介 河村総一郎 鬼頭喜太郎 杉江 元正 後藤嘉津幸 竹市 幸三 佐藤 友彦 浦野 正二 鬼頭 嘉男 三橋 茂三 水上 輝和 後見 玉井 博祐 地謡 久野 幸三 東川 光夫 玉井 博祐 藤原 耕司 稲川 寿一

主催 能楽普及事業実行委員会  
名古屋市長 名古屋城振興協会  
名古屋文化振興事業団  
協賛 能楽協会名古屋支部

愛知県稲門教育会主催

狂言鑑賞会

二月十二日(土)午後二時開演  
名古屋能楽堂

第一部 幸若舞 敦盛 小鼓幸清流 福井啓次郎 舞 信長・幸若舞保存会会員

第二部 狂言 鳳の会

萩大名 井上 祐一 井上 靖浩 井上 融 佐藤 友彦 佐藤 融 今枝 靖雄

狂言の解説

名古屋女子大学教授 林 和利 主催 愛知県稲門教育会

(入場料)一般二千円、高校生以下千円  
お問い合わせ 愛知県稲門教育会  
事務局・名古屋石田学園星城高等学校内  
TEL 0562-97-3111

名古屋観世会定式能(初回)

二月十四日(日)十二時半始  
名古屋能楽堂

翁 観世 清和 三番 井上 祐一 河村総一郎 上田 教史 藤田六郎兵衛 千才 観世 芳宏 大倉源次郎 吉阪 一郎 後見 片山九郎右衛門 清沢 一政 久田 勘助 観世 芳伸 古橋 正邦 藤井 完治 井上 靖浩 中川 雅章 小島 一英 佐藤 友彦 狂言 高砂 武田 志房 寛 敏一 鬼頭 好信 後藤嘉津幸 竹市 学

狂言 張蛸 野村又三郎 野村小三郎 井上礼之助 後見 松田 高義

能 花筐 森本 幸治 河村 大 大野 誠 中村 三郎 飯森 正直 山本 順三 高橋 良一 古橋 正邦 梅田 邦久 須部 幸親 藤井 徳三 高橋 麻一 観世 芳宏 (終了四時半頃)

能で観る平家物語(第11回)

二月二十日(土)午後二時始  
名古屋能楽堂

附 祝言 武田 邦弘 地謡 高橋 須部 高橋 麻一 観世 芳宏 (終了四時半頃)

安宅 宝生 閑 河村真之介 藤田六郎兵衛 大倉源次郎

主催 花伝の会

(入場料)一回券五千円(自由席)  
お問い合わせ 申込み 花伝の会 (052-571-3464) 藤田六郎兵衛事務所 (052-571-3464)



金剛流 松野恭憲 松野洋樹

千616 東京都右京区鳴滝泉殿町一八三三  
TEL 075-462-2148  
FAX 075-462-6098

金剛流 名古屋周星会 岐阜周星会 吉川周子

千491 名古屋千種区西崎町三二六  
電話 052-761-2357

金 春 信 高 金 春 安 明

千167 東京都杉並区南荻窪3-17-16  
電話 03-3333-2571

金 春 欣 三 春 敲 会 名古屋春栄会

千630 奈良市法蓮南町一四  
電話 074-221-7929

本 田 光 洋 千164 東京都中野区上高田二ノ二五ノ二  
電話 03-3386-2641

伊勢金春会 宇仁田吉邦 千516 伊勢市八日市場町5-16  
電話 059-596-5298

二井栄逸 千515 松阪市殿町1412の3  
電話 059-823-0226

長田驍後援会 千514 津市高野尾町三三五一-四六  
電話 059-220-6976

喜多流 和楽会 和谷衡市 千516 伊勢市中島二丁目26-12  
電話 059-220-1599

喜多流 山本才 千441 愛知県高浜市青木町三丁目七の五  
電話 056-653-1825

福王茂十郎 高安流 岡 同門会 高安流 岡 次郎右衛門

千673 明石市松ヶ丘4の3 A6-301  
電話 FAX 078-911-3374

植田和光会 植田隆之亮

森 常好 千154 東京都世田谷区世田谷一-47-12  
電話 03-3342-4853

宝生欣閑 千176 東京都練馬区小竹町一-150-15  
電話 03-3972-7230 03-3955-4795

谷田宗二郎 千603 東京都北区衣笠街道町31-7  
電話 075-463-4875

花伝の会 事務局 名古屋西區新道2-7-17  
電話 052-571-3464 (FAXとも)

名古屋観世九皇会

二月二十一日(日)午後一時始  
名古屋能楽堂

能 養 老  
後ツレ 小島 英明  
前ツレ 外山 圭一  
水波之伝 親世 喜之

能 松 風  
見 留  
古川 亮一  
高橋 敏一

能 (入場料)  
年三回公演  
三回分(自由席)一三、五〇〇円

当日券(自由席)五、〇〇〇円  
学生券二、〇〇〇円  
電話 (〇五二)六一一三六五九

国家指定芸能

「能楽」鑑賞会名古屋公演

二月二十七日(土)十二時三十分開演  
名古屋能楽堂

宝生流 衣斐 正宜  
番 組  
飯富 杉江 元  
橋本 雅介 幸  
住駒 幸英 赤井 啓三

能 春日龍神  
白頭 間  
佐藤 友彦

觀世流  
後見 渡邊容之助  
高橋 右任 地謡  
鬼頭 嘉男 島村 明宏

舞囃子 高砂  
中川 雅章  
福井 良治 鬼頭 喜太郎

喜多流  
舞囃子 実盛  
長田 駿  
柳原富司 藤田六郎兵衛

地謡  
八神 孝充  
松山 幸親  
清久 加賀 敏彦

地謡  
飯島佐之六  
柳原富司 藤田六郎兵衛

地謡  
中井 俊正  
和雄 長島 田

地謡  
戸沢 井村 和雄  
和雄 長島 田

平成11年1月・2月放送予定

(1月)  
NHK・FM放送能楽鑑賞  
(日曜)午前8時~8時57分  
21日 素謡「給馬」~観世流~林 喜一郎  
31日 舞囃子「鉢木」~喜多流~栗谷 菊生  
(2月)  
NHK・FM能楽鑑賞  
(日曜)午前8時~8時57分  
2月7日 「東北」花月~観世流~親世 喜之ほか  
14日 「草紙洗」胡蝶~宝生流~三川 淳雄ほか  
21日 「巴」弱法師~喜多流~香川 靖嗣ほか  
28日 「権貴妃」~観世流~大西 智久ほか  
日本の伝統芸能「能・狂言鑑賞入門」(再放送)  
講師 高桑いづみ 聞き手 平野 啓子  
土曜日 午前7時10分~7時40分  
(再)木曜日 午後3時30分~4時  
1月23日(土)「花子①」野村 万作 野村 万蔵  
1月28日(木)同上・再放送  
1月30日(土)「花子②」同上  
2月4日(木)同上・再放送

TOKAI VIDEO SYSTEM  
ハードシステム部門  
AV機器販売部門(家庭用)  
映像企画・制作部門  
放送関連部門  
機器設備レンタル部門  
充実の先進設備と、プロの手腕。  
燃えるハートで、熱い映像を。  
株式会社 東海ビデオシステム  
〒460 名古屋市中区上筒井二丁目14-15 TEL.<052>322-6541(代表)6562(芸能部)

観世流 舞囃子 卒都婆小町 泉 嘉夫 福井啓次郎 赤井 啓三  
舞囃子 熊坂 久田 勘助 河村総一郎 鬼頭喜太郎 中川 雅章  
舞囃子 熊坂 久田 勘助 柳原富司 赤井 啓三 武田 邦弘  
宝生流 仕舞 采女 渡邊容之助 野村 英丘 井上禮之助  
狂言 棒 縛 大郎冠者 野村 英丘 井上禮之助  
和泉流 狂言 棒 縛 大郎冠者 野村 英丘 井上禮之助  
能 草子洗小町 高安 勝久 後藤孝一郎 藤田六郎兵衛  
後見 久田 勘助 高島 良一 高橋 正邦  
中川 勘助 黒田 博 泉 嘉夫  
雅章 加賀 敏彦 祖父江 修一  
主催 日本能楽会  
後援 文化協  
出演者 (入場券) 一般五千円、学生二千円  
取扱い市内外各プレイガイド  
チケットぴあ(052・320・9999)  
チケットセゾン(052・290・9999)



龍吟会  
藤田六郎兵衛  
〒451 名古屋市中区下二丁目一〇番九号  
電話(〇五二)五七一五七六三

大倉源次郎  
〒532 003 大阪市淀川区宮原4-1-2-705  
TEL(〇六)六三九七-1333

幸友会  
福井啓次郎  
柳原富司 忠

桂 会  
後藤孝一郎 嘉津 幸

亀井俊一  
保忠雄

富原富司 忠  
柳原富司 忠  
小鼓教室 名古屋市中区栄 朝日神社内 (丸善前)

河村真之介  
〒466 名古屋市中区南一丁目二二番  
電話(〇五二)七六一四八八二  
河村 大  
〒603 001 京都市北区紫野下柏野町五九一  
電話(〇七五)四六二四一五

飯島佐之六  
大藏狂言会  
大藏彌右衛門  
大藏彌太郎  
大藏吉次郎  
〒215 007 川崎市麻生区岡上四三八一  
電話(〇四四)九八七二二八七番

鬼頭喜太郎  
好信  
愛知県中島郡平和町城西  
電話(〇五六七)一八九六番

助川龍夫  
助川治

青耀会  
上田 悟  
金春流太鼓  
〒594 003 和泉市青葉台2-17-25  
電話(〇七二五)八五二二  
名古屋市中区丸の内二-三  
〒1-17 那古野神社  
電話(〇五二)一四〇三〇

大阪能楽会館  
〒530 005 大阪市北区中崎西2-3-17

前川光隆  
前川光長  
〒616 005 京都市右京区御室橋町一〇の六  
名古屋植古場 名古屋市中区葵二-13-3  
ツインクルガーデン前野舞台  
電話九三三二八八〇六番

茂山千作  
千五郎  
千三郎  
正邦  
茂

野村万蔵  
野村万丞  
野村良介

野村万蔵  
野村万丞  
野村良介

茂山忠三郎  
茂山良暢

狂言やるまい会  
野村又三郎  
野村小三郎

野村又三郎  
野村小三郎

### ◆初冬から仲冬の舞台◆ 「第十三回名古屋定例」「宝生会」「第三回なりの座」と「大阪梅会」「第十四回名古屋定例」

竹尾 邦太郎

「萩大名」歌一首詠んずる  
さへ覚東無いシテ大名・又三郎、小才の利く太郎冠者・小三郎からとなく一首だけを仕込み、身共はとつと歌詠みで「ごまろ」と庭主高義に広言してニタリ太郎冠者を振り返る表情の深長の妙。(25分)

「栗焼」シテ太郎冠者・千之丞の、生かし生ける物への慈しみが感じられる栗との対話、「そちはほのほの赤うなつて小歌を詠うか」が実にほのほの。アド主・千五郎の、どこやらが正直な人柄もほのほの。(26分)

「林宜山伏」郎では一介の僧も上人さんと呼ぶ伝で、この林宜も一介の御師(おし・御持師)の略、年末には唐やお札を諸國に配って歩いたという。茶屋での彼岸不遜な山伏の態度に、見て見ぬふりが出来ないお節介な御師は友彦の役得、力めば力むほど戯画化される山伏・祐一は、それが狙いかもしれないが憎めないのは資性。中に立つ茶屋・弘之は、おろおろする程には両者の争いを楽しむ風情、全体はとげた味わい。(32分)

11月13日、十三回を数える名古屋定例公演初演初演の狂言尽くしは好企画だが、近年大蔵流の舞台が少くない当地、折角の機会にシテ・アド替えてもう一番欲しかった。

「松虫」シテ寿一のみ男笠に白大口・掛素袍、ツレ三人は素袍袴。さんざめく酔客四人にしてはシテが絶えず伏目がちなのが陰気で気になるが語は沁々と、ツレが退いて独りになると俄に寂しい。一旦一ノ松に抜け、へ虫の音の我を待つ声、と舞台へ戻る辺りから中人へ、虫の音につれ

「杭か人か」 臆病者の、留守居の見廻り、槍を持って「御用心、御用心」と連呼する声に怖さを紛らせる太郎冠者・祐一、の気が出る。杭か人か、と誰何すい、かされて問

髪入れず、「くい」と答える手弘之の気合もまた可。(19分)  
「車僧」 野に寝、山に伏すのが山伏と同じ伝で、車に乗り山野を駆けるのが車僧。シテ山伏(実は天狗の化身)満次郎、「いかに車僧」とすばり禪問答を挑めば、重々しく応酬するワキ車僧・元、一騎討ちはスケールが大きい。アイ海越天狗は融、通走の主の仇討とばかりせめては笑わせようの懸命さは買うが車僧は泰然自若、とても操ってこちよこちよとでなく貫貫、負けて愛敬。後場は先刻のブライド失墜を回復せん和本性現わす天狗、修行を積めば徳もへつるまじとよ、と二ノ松もへつる勢いを付け、と二ノ松べせん、と一氣に正中へ戻り羽扇を投げ捨てて安座し、ワキをキッと見込んで勢威を誇示するのが面白かったが、地に迫力はなかった。(49分)

「井樋」 ぶぶ(ん) かつちり、とは石を投げて流れの深淺を測る音。沙門帽子・長袴・長衣の句当、小三郎、弟子の座頭菊市・靖浩を供に機嫌よく「平家」を誦しながら往長閑かきに味。菊市の背を借り徒渉する段は、目明きの通行人・融の悪戯に先んじられ、菊市の不審と不満を招いた上に再徒渉は深みに陥り、諸共に濡れ肌になる騒ぎ様もさこそである。岸に上り持参の酒に暖をとろうとすれば、またしても通行人に為て遣られ、掠められて果は盲人同士の静い、「己れが飲むによつて早や皆になつたは」、は見所で聞くに辛いのが三者の個性の陽気に深刻味は無い。(23分)

「小舞」 祐善、いわゆる能掛りの舞狂言「祐善」のカケり以下トメまでを小ぶりの祐善傘で舞う。祐善は傘張りの名、下手ゆえに張り死にしたという。なりの座が共に歩もうとする若い見所を象徴するならば、改まった小舞一番だけというのはどうだろうか。狂言には舞もあり、

のデモンストレーションなら、習物でシテ・地謡が音でなくとも、平物数番の方が親しみ易いと思われるが。  
シテ靖浩の舞は、茫洋とした大きさが得難い。(7分)

「釣針」 良縁折願は現代もあること、してみると人間それ程進歩はしていないものやうである。主・又三郎にあやかり我も眉目良い妻女を釣ろうと、囃子にかかると浮かれる太郎冠者・融の、いかにも躍しそうで悪振れして、いな風には好感が持て、逆に我が妻女、の思いで太郎冠者が最後に対面する女人・祐一の態度の濃艶(?)が物恐ろしい。(40分)

「郎郎」 シテ恭徳。思い詰めた様な運、シテはこれこれなは「と徐に枕を見る様子に深刻な哲学青年慮生の面影もみえる。夢中、帝位を受諾する辺りはゆつたりと風格を示し、宮廷の豪華は台上安座にへ日運し、と先ず左手を挙げ、次いで唐團扇の右手を挙げて描るがめ帝位を象徴するのにも利く。楽は閑達、空下りには右手に柱を持ち左足を床に着けて引き上げるが特に目を惹くことにはなく、いわゆる飛び入りはワキ正から台に進み、大きく足を上げて上るやすつと臥すの極く平凡。夢醒めへ不思議なりや、と左膝を抱いて杖を凝視する辺りは未練とも見えて面白かった。(1時間20分)

「胸突」 再々の借金の延滞に力づくでも、気負う貸人・七五三、揉み合う中に借人・千之丞を倒してしまふ。しかし、胸を打って息が出来ぬの死ぬるのと喚き散らされては世間体も悪く、利息免除は疎か元金までもチャラにされる。借人の粘っこいえげつ的なさを千之丞、貸人のお人好しを七五三、共に巧演するがこの曲、いつもながら後味は宜敷くない。(17分)

「葛城・大和舞」 シテ善高、領地縫箔腰巻・白練笠折へ、深い雪の中を、へ通りへ掃り来て、後見座に右膝つく雪を脱ぎ、負をを外すところ、疲勞感を漂わせ、焚火後のクセ舞には、我が身の動きをも、取り添える陰翳をみせる。シテの身の動きは「我に極める心」、それを聞き捨てならぬという風に、くるりシテに身体を向けるワキ山伏三郎、その因を掛合に聞き出し、シテとの連吟に、霜に貫められ起臥の立居も重き岩戸の内、と確かめ合うところがとても良い。

中人は雪山、後はへよしや吉野の、と床几を立てて山を出る。面増・葛紅葉天冠・緋大口・淡黄舞衣の姿、へ降る雪の、と常座で後見から白相木綿四手付袖枝を受ける。と、白和幣、から四ツ拍子踏み神楽になる。正先に下居、神枝をゆつくりと左右に横で置き、立つと位進んで直ぐへ高天の原の岩戸舞、の地となり、神枝を被つて拝礼すると後見は神枝をひき、シテは懐中の扇をとって舞い進む。小舞で緩急がつき、へ浅間にもなぬべし、と一ノ松に抜けに勾欄に寄り、左袖返シ面テラして左から右へ眺めるのは曙光を氣遣う趣、弾みをつけるかに一旦横板趣へ戻るとそのままだと、幕に入りワキ留、気品のある美しい舞台だった。(1時間20分)

「鶴・白頭」 シテ盛義。面は淡男か、襟水・濃紺無地、髪は黒髪・濃紺水衣の、くろくろと陰湿な雰囲気を感じる姿は、両肩に垂れる黒頭の髪が絡んであるのか水から上が濡れたように見えて、まさに深更へ浦波に幽かに浮かみ寄るもの、の異形、妖気自ずから発散する。クセ中に、へ頼政きつと見上ぐれば、と右に面切り、扇を矢に擬して射掛け、へ落つる所を、とスミへさつと寄って刺すところなど、その俊敏は型の鮮烈である。中人は、へ見えつ隠れ絶えく、と棒捨てる音が鶴の声に暗合し、へ恐ろしや凄

や、の地の裡にするくと幕に入るのも巧妙。  
後シテは面泥小飛出・白頭・濃紺・厚板着付・白地半切・濃黄地法被、半幕に床几の全身を見せると、居住まいを正し幕を見ていたワキ僧・茂十郎はワキ正に進み合掌。シテも呼応して合掌し、へ頼むべしや、と幕内からワキを指すと地に膝を一旦下ろし、ワキも戻ると、へ涅槃に引かれて、と幕がさつとあがってシテが小走りに常座へ出、へありがたや、と合掌する。後の活躍も目覚ましく、へ御殿の上に飛び下れば、を右に体を開いて拍子二ツ左袖サツと返してイメージし、へ頼政が矢先に、と扇を両手に握って胸に突き立て、へ地に倒れて、の安座では具象の型も隙がない。キリにへ涙みつ流れつ、橋懸を流し足に流れ、三ノ松で袖に面を隠して沈み、立つとトメとなるまで、歯切れのよい型の鮮やかさには目が離せなかった。(1時間13分)

12月6日・大阪梅会・大観能楽堂  
「文蔵」 旨いもの名を失念の太郎冠者・融、旨いものとの開いては是非知りたい主・友彦、その名が愛語の草紙の中にありそうと言われ、早速気分よく立板に水の石橋山の合戦譚、仕方に気合が入るがその名は一向に出てこない。草紙の終わりに頃によつと「あ、申し」とノホン口を挟む太郎冠者と主の奇立ち、ひよつとこれに語に水を注がれて不満だったのでなかろうか。(28分)

ウシマド写真工房  
〒002-1331 京都市上京区北野上七軒  
TEL 075-464-1331  
FAX 075-464-1577

彰 諷 閣  
名古屋市中区白区植田西二一八〇二二  
電話(〇五二)八〇五三三〇  
名古屋市中区鳴海町有松裏40-9  
電話(〇五三)六二一四三三八

葵 心 庵 舞 台  
尾張旭市東大前町二四九三ノ二  
若杉ビル(旭市役所南)  
電話 〇五六一五〇三三四六番  
能舞台 電話 〇五六一五〇六九八

楽 諷 庵 舞 台  
名古屋市中区瑞穂町四七七八三  
電話(八三三)七〇〇一

名古屋狂言共同社  
事務所 名古屋市中区橋下町7の5  
電話 052-321-1430 井上菊次郎方

井上 菊次郎  
井上 礼之助  
大野 上 弘  
井上 野 友  
佐藤 藤 友  
佐藤 上 靖  
今井 枝 靖  
今井 雄

鳳の会  
林 和 利  
井上 祐 一  
佐藤 友 彦

狂言 なのり座  
井上 靖 浩  
佐藤 融  
野村 小三郎

朝日カルチャーセンター  
雛子教室  
小鼓 後藤孝一郎  
丸栄スカイル10階

栄 能 楽 舞 台  
名古屋市中区栄五六一四  
電話(二六二)一一八三番

能 楽 の 友 社  
同人一同

年賀欠礼致します

梅 若 善 高  
金 剛 永 謹  
近 藤 乾 之 助  
福 井 良 治

「おこわり」  
年賀広告の掲載にあたりましては、紙面の都合により順不同とさせて頂きましたので何卒ご理解賜りますようお願い申し上げます。



# 観世流・金剛流 宗家本發行元 檜書店

〒101-0052 東京都千代田区神田小川町2-1  
電話 03(3291)2488 振替00130-7-3552  
〒604-0935 京都市中京区二条通麩屋町東入  
電話 075(231)1990 振替01010-0-113

# 能 楽 の 友

## 発行能楽の友社

名古屋市中千種区千種2丁目18-18  
(郵便番号 464-0858)  
電話 (052) 731-7984  
FAX (052) 733-2837  
振替口座 00800-6-36393

購読料 1年 1100円  
郵送の場合 1年 1800円  
— 部 100円

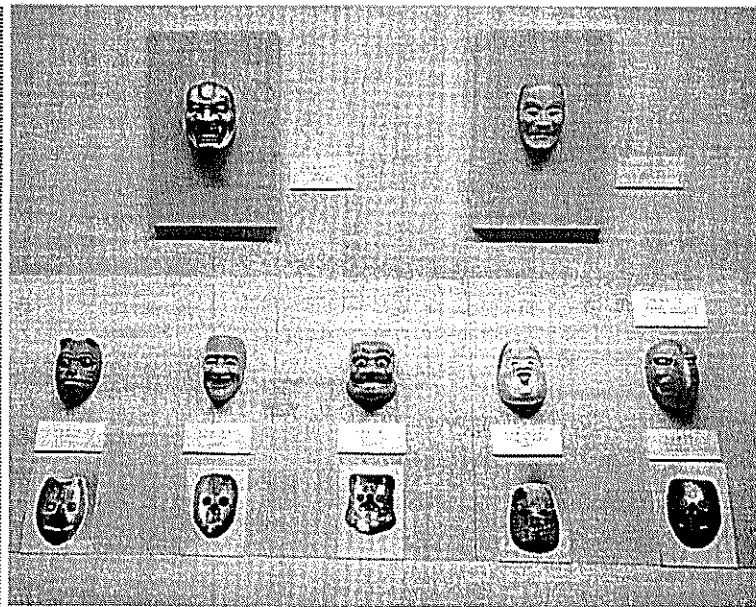
## 演能力レンダー

### ◆名古屋能楽堂◆

- (2月)  
21日(日) 名古屋観世九事会(有料)  
27日(土) 日本能楽会名古屋公演(有料)(番組①面)  
(3月)  
7日(日) 富 耀 会(無料)(番組②面)  
12日(金) 名古屋能楽堂定例公演(有料)(番組②面)  
13日(土) 名古屋関祥会10周年記念謡曲大会(無料)(番組②面)  
20日(土) 能で観る平家物語(有料)(番組③面)  
22日(月) 壺泉会大会(無料)(番組③面)  
27日(土) 名古屋能楽鑑賞会(有料)(番組③面)  
(4月)  
3日(土) 邦謡会能公演(有料)(番組③面)

### ◆熱田神宮能楽殿◆

- (3月)  
20日(土) 梅 猶 会(有料)(番組④面)  
(4月)  
4日(日) 猶 謡 会(無料)  
18日(日) 幸 謡 会(無料)



名古屋能楽堂の企画展「近代愛知の能楽」の能面展示

## 「近代愛知の能楽」

### 3月14日まで開催

### 名古屋能楽堂で企画展

名古屋能楽堂の展示室では、二月十三日から三月十四日(日)まで、企画展「近代愛知の能楽」を開催している。  
この企画展では、明治から昭和前期にかけての名古屋地方の能楽の活動を、近代能楽の舞台、近代の能楽師、戦時下の能楽の三つのテーマに分けて紹介している。  
江戸時代、能楽師は幕府・有力

諸藩に召し抱えられその生活は割合安定していたが、明治維新により幕藩体制が崩壊すると大変困難な時代を迎えることとなった。しかし、尾張では能楽が町衆に浸透していたため積古する人が多く、家業の継承ができた能楽師も数多くいたとしている。

出品は(Ⅰ)近代能楽の舞台①古春舞台披露組(明治十三年)②愛知県博物館舞台披露組(明治十七年) (Ⅱ)近代の能楽師①名古屋能楽師・能楽愛好者相撲見立(明治初期)②掛軸③能面④狂言(面など二十数点) (Ⅲ)戦時下の能

## 観世宗家「隅田川」上演

### 名古屋能楽堂 3月定期公演

平成十年四月からことし三月まで毎月行われてきている「名古屋能楽堂定期公演」は、能楽普及事業実行委員会(名古屋市長、財団法人名古屋城振興協会、名古屋市長、文化振興事業団)主催、能楽協会名古屋支部の協賛により、能楽普及に大きな役割を果たしているが、きたる三月十二日(土)は平成十年度演能企画の幕尾をかざって、観世流宗家・観世清和師が来演、能「隅田川」の公演、狂言は「夜音曲」(野村又三郎)が上演される。なお名古屋能楽堂定期公演としては、五月十四日(金)午後六時

## 近代愛知の能楽

### 2月27日、名古屋能楽堂講演会

名古屋能楽堂では、きたる二月二十七日(土)、「近代愛知の能楽」のテーマで、福山女学園大学生活科学部・飯塚恵理人助教による講演会を開催する。  
会場は名古屋能楽堂会議室、時間は午後五時から午後六時。入場無料(当日先着順百名受け付け)

## 山本定期能

### 4月3日、6月5日

山本定期能楽会は、上半期定期能として、二月七日(土)の上演につき、四月三日(土)、六月五日(土)山本能楽堂で開催する。

●四月三日午後一時始  
素謡「忠度」(山本勝一)  
能「弱法師」(河村栄重)  
能「胡蝶」(物着(山本順之)  
●六月五日午後一時始  
素謡「賀茂」(橋本和風)  
能「楊貴妃」(山本博通)  
能「鶴鶴」(森本哲郎)

## 大阪能楽養成会

### 研究発表会

### 2月24日 大阪能楽会館

大阪能楽養成会主催の第四回大阪能楽養成会研究発表会は、二月二十四日(水)午後六時から大阪北区中崎西の大阪能楽会館で開催する。

同養成会は、昭和三十八年の発足より現在まで、能楽後継者の養成にたずさわり、多くの能楽師を舞台に送り出してきた。研究発表会は毎年四回行われ、平成十一年度は、六月二十九日、九月二十九日、十二月二十八日、平成十二年二月二十九日が予定されている。

今回の番組は、素謡「忠度」、能「知章」、「狂言」(師・舞囃子「鱗形」)「屋島」。

本科生七名、研究科生四名、予科生三名が出演する。

## 国家指定芸能

### 「能楽」鑑賞会名古屋公演

### 二月二十七日(土) 十二時三十分開演

宝生流 衣裳 正直  
春日龍神 飯富 杉江 元 飯島佐之六 助川 龍夫  
白頭 橋本 幸 住駒 幸英 赤井 啓三  
間 佐藤 友彦  
後見 渡邊容之助 地謡 久野 幸三 藪 俊彦  
高橋 右任 地謡 佐藤 耕司 寺井 良雄

### 観世流

舞囃子 高砂 中川 雅章 地謡 八神 孝充 加賀 敏彦  
舞囃子 実盛 長田 駿 飯島佐之六 藤田 六郎兵衛  
喜多流 舞囃子 實盛 長田 駿 飯島佐之六 藤田 六郎兵衛

### 観世流

舞囃子 卒都婆小町 泉 嘉夫 寛 敏一 赤井 啓三  
舞囃子 熊坂 久田 勘助 河村総一郎 赤井 啓三  
舞囃子 熊坂 久田 勘助 柳原富司忠 赤井 啓三

### 観世流

舞囃子 熊坂 久田 勘助 河村総一郎 赤井 啓三  
舞囃子 熊坂 久田 勘助 柳原富司忠 赤井 啓三

### 観世流

舞囃子 熊坂 久田 勘助 河村総一郎 赤井 啓三  
舞囃子 熊坂 久田 勘助 柳原富司忠 赤井 啓三

### 観世流

舞囃子 熊坂 久田 勘助 河村総一郎 赤井 啓三  
舞囃子 熊坂 久田 勘助 柳原富司忠 赤井 啓三

### 観世流

舞囃子 熊坂 久田 勘助 河村総一郎 赤井 啓三  
舞囃子 熊坂 久田 勘助 柳原富司忠 赤井 啓三

### 観世流

舞囃子 熊坂 久田 勘助 河村総一郎 赤井 啓三  
舞囃子 熊坂 久田 勘助 柳原富司忠 赤井 啓三

### 観世流

舞囃子 熊坂 久田 勘助 河村総一郎 赤井 啓三  
舞囃子 熊坂 久田 勘助 柳原富司忠 赤井 啓三

### 観世流

舞囃子 熊坂 久田 勘助 河村総一郎 赤井 啓三  
舞囃子 熊坂 久田 勘助 柳原富司忠 赤井 啓三

### 観世流

舞囃子 熊坂 久田 勘助 河村総一郎 赤井 啓三  
舞囃子 熊坂 久田 勘助 柳原富司忠 赤井 啓三

### 観世流

舞囃子 熊坂 久田 勘助 河村総一郎 赤井 啓三  
舞囃子 熊坂 久田 勘助 柳原富司忠 赤井 啓三

### 観世流

舞囃子 熊坂 久田 勘助 河村総一郎 赤井 啓三  
舞囃子 熊坂 久田 勘助 柳原富司忠 赤井 啓三

### 観世流

舞囃子 熊坂 久田 勘助 河村総一郎 赤井 啓三  
舞囃子 熊坂 久田 勘助 柳原富司忠 赤井 啓三

### 観世流

舞囃子 熊坂 久田 勘助 河村総一郎 赤井 啓三  
舞囃子 熊坂 久田 勘助 柳原富司忠 赤井 啓三



# 「一色能の世界」

## 能面・装束・古文書展

### 3月6日～22日 おかげ横丁 大黒ホール

四百五十年の伝統を誇る郷土芸能、一色能では来たる三月六日

(土)より二十二日(月)までの十七日間の予定で、伊勢神宮内宮前、おかげ横丁の大黒ホールで「一色能の世界」(能面・装束・古文書展)を開催する。

一色能は伊勢三座の流れを汲み、室町時代末期から今日まで絶えることなく能を守り続けられてきたもので、ことしの一色神社例祭に当たっての「奉納能」は三月十一日が平日のため、三月十四日の日曜日に行われることになっている。

奉納能の会場は、一色町公民館仮設能舞台。開演十二時。

演目は、「翁」のほか能「経政」「葛城」の二番、狂言「蚊相撲」「竹生鳥夢」「佛師」、舞囃子、仕舞が予定されている。

また前述の「一色能の世界」特別展は、三月二十二日の振替休日まで毎日午前九時から午後五時まで開催。入場無料。出品は、能面実物、(三重県有形文化財)、能面写真、能装束、小道具類、能

組、展示絵図、文書類など。一色町能楽保存会の百二十数点にのぼる。

とくに、能面は三重県有形文化財指定の「翁」「三番叟」「悪尉」「室町初期」「小面」「姥」「童子」「瘦男」「天狗大ベシ」「般若」「江戸末期」「三光尉」「那那男」「江戸末期」の出席。また同じく三重県有形文化財の能装束「赤扇文様唐織」「青扇文様唐織」小道具類では「唐團扇」「鳥兜」「田子」「羯鼓」「時絵能面箱」「初冠」「小結烏帽子」「鬘扇」「床几」などが出品される。

また一色町史作成委員会による展示絵図、文書類も貴重なもの。伊勢国度会郡浜郷村大字一色塩田状況図、安政大地震堤防決壊之図など、パネルによる一色能の歴史、戦災で燃失した一色町の面などが出品される。

保存会の土谷喜八郎会長は「一色能はもともと神宮に奉仕するこ

とによって育てられたようなものであり、このたび伊勢神宮のお近くのおかげ横丁で展示会を開催させて頂くことになったのも意義あることであり、関係各位に心から感謝を申し上げたい。古文書を通じて一色町ならびに一色能の歴史に触れていただき、一色能の良さを、すばらしさを知って頂ける機会として、また地域の文化の振興と活性化に役立てたいとの気持ちから企画させて頂いたものである。お伊勢参りかたがたお出かけ下さい。幸甚です」と語っている。

主催/一色町能楽保存会、一色町史作成委員会、おかげ横丁(伊勢福)の三者共催、後援/伊勢市、伊勢市教育委員会、三重県教育委員会、財団法人三重県文化振興事業団。

問い合わせは一色町能楽保存会事務局(0596-22-1720)またはおかげ横丁総合案内所(0596-23-8838)

## 閑祥会10周年記念の大会

3月13日 名古屋能楽堂

観世流閑祥六師の指導による名古屋閑祥会は、このたび十周年を記念して、三月十三日名古屋能楽堂で、会員により十周年記念大会を開催する。

## 豊田市能楽堂

5月定例公演

豊田市能楽堂定例公演は、五月八日(土)、豊田市能楽堂で上演される。

新作狂言(和泉流)「彦市ばなし」(シテ野村万斎)  
能(金巻流)「頼政」(シテ本田光洋、ワキ高安勝久)  
入場料正面席六千円、脇正面席五千円、中正面席四千円。問い合わせ:豊田市能楽堂(0565-35-8200)

## 能と狂言の楽しみ公演

滋賀県文化振興事業団

滋賀県文化振興事業団主催による滋賀県伝統文化フェスティバル協賛事業として「能と狂言の楽しみ」公演がきたる三月十三日(土)滋賀県立長浜文化芸術会館で行われる。午後一時半開演。

番組は能「百万」(シテ片山清司、子方・中辻耕太郎、ワキ飯沼雅介、笛・竹市学、小鼓柳原富司、大鼓河村大、太鼓前川光範、間・茂山七三三)  
狂言「蝸牛」(主人・茂山七三三、太郎冠者茂山逸平、山伏茂山宗彦)

能「一角仙人」(シテ古橋正邦、龍神・味方玄、龍神・分林道治、夫人・片山伸吾、ワキ飯沼雅介、笛・竹市学、小鼓柳原富司、大鼓河村大、太鼓前川光範)

入場料一般三千円、学生二千円、前売り所は長浜文化芸術会館、文化産業交流会館、ひこね市文化プラザ、長浜市民会館など。長浜文化芸術会館は0749-63-7400。

## 富耀会

三月七日(日) 午前十時半始

名古屋能楽堂

一調 花筐 泉 嘉夫 福井啓次郎  
二調 松風 久田 勘助 柳原富司忠

囃子 経正 古橋 正邦 河村真之介 船戸 昭弘 大野 誠

「養老」「西王女」「蘆刈」「高砂」「采女」「融」「五段」「新之段」「紅葉狩」「半部」「安宅」「五段」「駒之段」「吉野夫人」「松虫」「熊野」「実盛」「唐船」「パンシキ」「小督」「雲林院」「笠之段」「老松」「羯鼓」「田村」「井筒」「天鼓」「船辨慶」

主催 富耀会  
主催 柳原富司忠

名古屋昭和区流川町四七一―四七三  
サザンビル八事二一七〇三  
電話(〇五二)八三二一〇三

## 名古屋能楽堂定例公演

三月十二日(金) 午後六時半始

名古屋能楽堂

狂言 寝音曲 太田 宗和 祖父江修一  
西行桜 関根 祥六 地謡 泉 勘助  
観世 清和 後見 松田 高義

能 隅田川 福王 和幸 河村真之介 藤田六郎兵衛  
後見 武田 宗和 清沢 良一 久田 勘助  
祖父江修一 泉 嘉夫 高島 良一 久田 勘助  
古橋 正邦 梅田 邦久 高橋 正邦

## 名古屋閑祥会

### 十周年記念謡曲大会

三月十三日(土) 午前九時始

名古屋能楽堂

素謡 神歌 岡本九十九 関根 祥大  
竹生島 小川貴美子 田中 謙 浜名 芳男

素謡 経正 神田 俊吾 武田 真悟  
花月 林 左希也 杉本佳津子  
仕舞 道明寺 植谷英一郎  
忠度 長谷川嘉洋  
井筒 石黒 道彦  
高砂 貴田 永克  
吉野天人 大嶋ゆきの 石川三枝子

仕舞 西王母 小川貴美子  
野宮 中北 昌美  
班女々 仁科 治子  
夕顔 柳沢 綾子  
森野 麗子 好江 藤原香澄子

素謡 千手 武 好江 藤原香澄子

## 藤戸

石井 節子 関根 祥大

## 熊野

久松千鶴子 木原 稔夫

## 巴

河村 文恵 坂井満里子

## 鶴之段

林 伸彦

## 春日童神

林 伸彦

## 隅田川

関根 祥九 関根 知孝

## 養老

安田 順子

## 采女

長村美美子

## 柏崎

若林 和子

## 放下僧

小山 七重

## 山姥

正村百合子

## 吉野天人

河盛 迪子

## 弱法師

秋鹿 年子

## 藤戸

増永 和子

## 天鼓

柴田 悦子

## 老松

きたむらゆい

## 烏居

村瀬 純

## 能狸

関根 祥大 地謡 藤波 時昭  
高梨 良一 関根 知孝

## 安宅

中川 雅章 関根 知孝 関根 祥六 関根 祥人

## 安宅

清沢 一政 野尻千枝子

主催 関根 祥六 関根 祥人 名古屋閑祥会

### 佐藤友彦氏 舞台生活50周年記念の祝賀



第十九回風の会公演は一月十日名古屋能楽堂で行われ、和泉流狂言師・佐藤友彦氏が舞台生活五十年を記念して「木六駄」を上演した。

この会の終演後、三の丸会館で氏の五十周年記念祝賀の小宴が催された。武蔵野女子大学教授小林貴氏、名古屋演劇ペンクラブ理事長井沢慶一氏、東海女子短期大学学長・長谷川通雄氏、元名古屋大学教授山下宏明氏、さらに和泉流狂言方野村又三郎氏らから祝辞が述べられ、佐藤友彦氏から「この年月ご指導を頂いた諸先生、一緒に歩んだ仲間の皆様、そして多くの皆様方のご支援、励ましに支えられてきました。あらためて心から感謝を申し上げます」とあいさつ。風の会から佐藤夫妻に記念品を贈呈、井上礼之助氏の発声で乾杯、祝賀のひとつが持たれた。舞台生活50周年の記念品を贈られる佐藤友彦氏夫妻

### 能にみる日本女性展 名都美術館

名都美術館(愛知郡長久手町)では二月二日から三月二十二日まで「能面・能装束の美(能にみる日本女性展)」を開催している。(毎週月曜日休館)  
今回の展覧は「源氏物語」伊勢物語などから日本女性を主人公としたものを取り上げている。

### 新刊紹介

#### 能楽入門2巻

小学館発行

小学館では、シヨトル・シリーズとして、能楽入門①「初めての能・狂言」と、能楽入門②「能の匠たち、その技と名品」の2巻がこのほど刊行された。(発刊平成十年十二月十四日)  
能楽入門①「初めての能・狂言」は、企画/横濱能楽堂、監修/山崎有一郎、文/三浦裕子。能や狂言に興味があるがよくわからない、まず基礎知識から学びたいという初心者向けの入門書。泣く、怒るなど舞型表現の写実解説、実演中の舞台と楽屋裏の同時中継、野外能、地方能の魅力、初心者向けの作品紹介、用語解説、

### 能で観る平家物語(第十回)

三月二十日(土)午後二時始

名古屋能楽堂

お話し 井沢 元彦

片山九郎右衛門  
西村高夫  
片山清司

### 大原御幸

福王 和幸  
山本 孝  
福井啓次郎

野村小三郎

後見 赤松 慎英 地謡  
観世 暁夫

武富 康之 齊藤 信隆  
柴田 稔大 大槻 文蔵  
山本 博通 野村 邦久  
梅田 邦久

主催 花伝の会  
藤田 六郎兵衛  
大槻 文蔵

### 壺泉会大会

三月二十二日(月)

午前九時二十分始

名古屋能楽堂

番組

仕舞 嵐山 加藤 春枝

仕舞 清経 清水久美子

羽衣 山田めぐみ

竹生鳥 丸川 華月

神歌 篠田 三郎 長屋 文裕

高砂 倉田 一郎 高松 嘉彦

羽衣 加藤 定子

砧 大森萬里子 山本 正人

景清 近藤 幸江

山本 和子

能班女 飯森 正直 河村総一郎

仕舞 大江山 福王 知登 福井啓次郎

恋重荷 伊藤 銚一 笠田 稔

### 第21回 邦謡会能公演

四月三日(土)午前十一時始

名古屋能楽堂

神歌 高島 良一 本田 勲 地謡 須部 正邦

正 飯富 雅介 河村真之介 大野 誠

仕舞 後見 武田 邦弘 地謡 橋本 忠樹

胡蝶 今沢 美和 須部 正邦

花月 須部 甫 地謡 古橋 正邦

鞍馬天狗 清沢 一政 地謡 武田 邦弘

遊行柳 野村小三郎 野村又三郎 高峯

伯母ヶ酒 野村小三郎 野村又三郎 高峯

仕舞 後見 武田 邦弘 地謡 橋本 忠樹

花月 須部 甫 地謡 古橋 正邦

善知鳥 片山九郎右衛門 曾和 博朗 藤田 六郎兵衛

石橋 橋本 磯道 地謡 高島 良一

仕舞 後見 橋本 磯道 地謡 高島 良一

花月 須部 甫 地謡 古橋 正邦

善知鳥 片山九郎右衛門 曾和 博朗 藤田 六郎兵衛

石橋 橋本 磯道 地謡 高島 良一

仕舞 後見 橋本 磯道 地謡 高島 良一

花月 須部 甫 地謡 古橋 正邦

善知鳥 片山九郎右衛門 曾和 博朗 藤田 六郎兵衛

石橋 橋本 磯道 地謡 高島 良一

仕舞 後見 橋本 磯道 地謡 高島 良一

花月 須部 甫 地謡 古橋 正邦

善知鳥 片山九郎右衛門 曾和 博朗 藤田 六郎兵衛

石橋 橋本 磯道 地謡 高島 良一

仕舞 後見 橋本 磯道 地謡 高島 良一

花月 須部 甫 地謡 古橋 正邦

善知鳥 片山九郎右衛門 曾和 博朗 藤田 六郎兵衛

石橋 橋本 磯道 地謡 高島 良一

仕舞 後見 橋本 磯道 地謡 高島 良一

花月 須部 甫 地謡 古橋 正邦

### 名古屋能楽鑑賞会

三月二十七日(土) 午後一時三十分始 名古屋能楽堂

〔御来場歓迎〕

舞臺子 松風	河村総一郎	藤田六郎兵衛
海士	前川 和子	河村総一郎
素謡 木賊	奇田 嘉子	泉 嘉夫
舞臺子 木賊	柴田うた子	後藤孝一郎
舞臺子 錦木	石川 晴子	後藤孝一郎
舞臺子 養老	中沢 修	後藤孝一郎
歌占	片岡な、子	河村真之介
山姥	内藤 悦子	河村真之介
吉野天人	中川 真澄	河村真之介
野守	泉 嘉夫	河村真之介
附祝言	主催 壺 泉 会	

### 名古屋能楽鑑賞会

三月二十七日(土) 午後一時三十分始 名古屋能楽堂

〔御来場歓迎〕

舞臺子 松風	河村総一郎	藤田六郎兵衛
海士	前川 和子	河村総一郎
素謡 木賊	奇田 嘉子	泉 嘉夫
舞臺子 木賊	柴田うた子	後藤孝一郎
舞臺子 錦木	石川 晴子	後藤孝一郎
舞臺子 養老	中沢 修	後藤孝一郎
歌占	片岡な、子	河村真之介
山姥	内藤 悦子	河村真之介
吉野天人	中川 真澄	河村真之介
野守	泉 嘉夫	河村真之介
附祝言	主催 壺 泉 会	



# 観世流・金剛流 宗家本発行元 檜書店

〒101-0052 東京都千代田区神田小川町2-1  
電話 03(3291)2488 振替00130-7-3552  
〒604-0935 京都市中京区二条通麩屋町東入  
電話 075(231)1990 振替01010-0-113

# 能 楽 の 友

発行能楽の友社

名古屋市千種区千種2丁目18-18  
(郵便番号 464-0858)

電話 (052) 731-7984  
FAX (052) 733-2837  
振替口座 00800-6-36393

購読料 1年 1100円  
郵送の場合 1年 1800円  
一部 100円

## 名古屋能楽堂定例公演

### 11年度 特別公演など8回

#### 「道成寺」「狂言尽くし」を上演

名古屋能楽堂の定例公演は、名古屋市、名古屋城振興協会、名古屋市文化振興事業団による「能楽普及事業実行委員会」主催で、能楽協会名古屋支部の積極的な協賛

により、平成九年十月から公演が行われ、能楽各流派宗家の来演もあり充実した演能で期待も高まってきた。実行委員会では、このほど平成

#### 愛知県芸術文化選奨

#### 名古屋 狂言共同社が受賞

#### 平成10年度個人5人と4団体

愛知県は、平成10年度の県芸術文化選奨の受賞者として、文化賞に個人5人と4団体、文化奨励賞に中学校2校を決定、能楽狂言関係では、団体として名古屋狂言共同社が受賞した。

授賞式は三月十一日、愛知芸術文化センターで行われ、井上祐一氏が出席、神田愛知県知事から賞状と奨励金が贈られた。名古屋狂言共同社は、会員十四

### 演能カレンダー

#### ◆名古屋能楽堂◆

(3月)

27日(土) 名古屋能楽鑑賞会 (有料)

(4月)

3日(土) 邦謡会能公演 (有料) (番組①面)

5日(月) 伝統の現在スペシャルⅣ (有料)

11日(日) 名古屋観世会定式能 (有料) (番組②面)

17日(土) 第40回中部電力全社謡曲大会 (無料)

24日(土) 狂言鳳の会・第20回記念公演 (有料) (番組②面)

25日(日) 久田親正会春の大会 (無料)

29日(木・祝) 中日能 (有料) (番組③面)

#### ◆熱田神宮能楽殿◆

(4月)

4日(日) 鑑賞会 (無料) (番組③面)

18日(日) 幸会 (無料) (番組④面)

(5月)

3日(祝) 豊水会 (無料)

23日(日) 名古屋観能会 (無料)

七月公演は、新作能の先駆けとして知られる「鷹姫」、観世鏡之丞師の指導・監修で上演、九月公演は、能舞「相聞」(そうもん)観世鏡之丞、一管独吟「芭蕉」片山九郎右衛門、さらに復曲能「護法」(ごほう)。茂山千作、野村萬斎、大観文蔵の諸師が出演して記念公演を飾る。

七月公演は、新作能の先駆けとして知られる「鷹姫」、観世鏡之丞師の指導・監修で上演、九月公演は、能舞「相聞」(そうもん)観世鏡之丞(人間国宝)一管独吟「芭蕉」(ばししょう)片山九郎右衛門(芸術院会員)茂山千作(人間国宝・芸術院会員)野村萬斎・大観文蔵(シテ、ワキを狂言方が勤めるよう改作され、平成九年に復曲された能。

#### 7月・9月に記念公演

#### 「鷹姫」「相聞」など上演

「鷹姫」を現代の若手能楽師、狂言師により上演。初演時制作に深く関わった観世鏡之丞師が監修。当日、「鷹姫」上演前に観世鏡之丞師と藤田六郎兵衛師による対談がある。

第21回 邦謡会能公演			
四月三日(土) 午前十一時始			
名古屋能楽堂			
神歌	高島良一本田 勲	須部正甫	梅田清一
能	飯富雅介	河村真之介	船戸昭弘
上野嘉宏	飯富雅介	河村真之介	船戸昭弘
後見	武田邦弘	橋本忠樹	分林道治
片山九郎右衛門	地謡	武田幸親	片山清司
祖父江修一	味方	片山清司	清司
仕舞	今沢美和	本野正邦	古橋
胡蝶	須部	武田	祖父江修一
花月	須部	武田	祖父江修一
花月	須部	武田	祖父江修一
鞍馬天狗	清沢一政	祖父江修一	祖父江修一
狂言	野村小三郎	野村又三郎	高義
伯母ヶ酒	野村小三郎	野村又三郎	高義
梅田邦久	中村弥三郎	河村総一郎	藤田六郎兵衛
遊行柳	野村又三郎	曾和博朗	藤田六郎兵衛
後見	分林道治	高島良一	橋本忠樹
武田欣司	地謡	清沢一政	片山九郎右衛門
味方	古橋	武田	祖父江修一
仕舞	片山慶次郎	地謡	分林道治
花	片山慶次郎	地謡	分林道治
善知鳥	片山九郎右衛門	河村総一郎	藤田六郎兵衛
曾和博朗	地謡	梅田清一	橋本忠樹
梅田清一	橋本忠樹	上野嘉宏	梅田清一
橋本忠樹	上野嘉宏	梅田清一	橋本忠樹
石橋	高安勝久	河村真之介	柳原富司忠
片山清司	高安勝久	河村真之介	柳原富司忠
後見	橋本忠樹	高島良一	橋本忠樹
片山慶次郎	地謡	松山幸親	祖父江修一
須部	味方	梅田清一	橋本忠樹
台後見	分林道治	武田	橋本忠樹
上野嘉宏	橋本忠樹	忠樹	忠樹
入場料(全館自由席) 五千円	前売券取扱い	邦謡会	電話
052-3320-9999	市内各プレイガイド	電話	052-3320-9999



# 「狂言共同社名品展」

## 3月20日～4月25日開催 名古屋能楽堂の企画展

名古屋能楽堂の展示室では、能・狂言に関する古文書、装束、面・或いは地域の歴史、活動など展示企画を催して鑑賞の便に資しているが、この春の特別企画展として「名古屋狂言共同社名品展」を三月二十日から四月二十五日まで開催する。開館は午前九時から午後五時。入場無料。

出品目録は次のとおり。

①掛軸「和泉流狼狽狂言碑」②井上菊次郎追善会写真帳③角淵宜自筆履歴書④河村健三郎自筆履歴書⑤狂言面「狐」⑥狂言面「伯藏主」⑦狂言面「犬」⑧狂言面「武悪」⑨狂言面「祖父」⑩狂言面「乙」⑪藍地松竹梅に波文様縮箔⑫段違い枝枯梗小石文様厚板⑬狂言面「比丘貞」⑭蘭菊紗綾型地菊枝に葉平菱文様縮箔⑮白輪子地松竹梅鶴亀波文様縮箔⑯鮮鉄文様

肩衣⑩ふくら雀に雪輪文様肩衣⑪割炭文様肩衣⑫格子地に鬼瓦と瓦文様肩衣⑬小太刀⑭小き刀⑮橋に文様縮箔⑯地紙ちらし文様肩衣⑰綱車に玩具文様縮箔⑱糸巻に糸管文様縮箔(会期中、四月八日に一部を入れ替え展示)

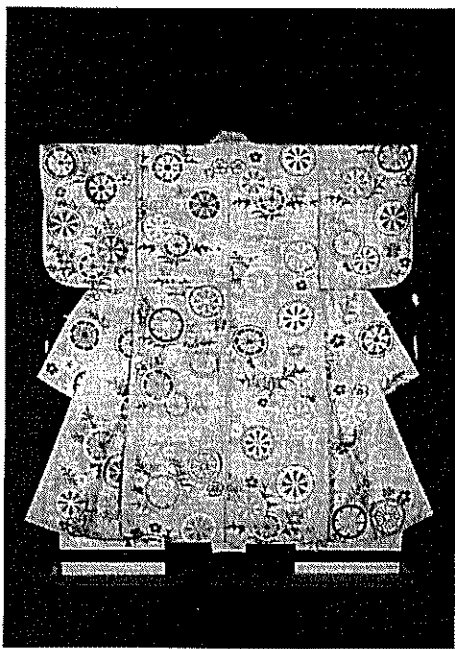
名古屋狂言共同社が設立されたのは明治二十四年(一八九一)で百有余年の歴史をもっている。江戸時代尾張藩の庇護のもとで隆盛であった和泉流狂言界は、明治になり大きな転換期を迎えることになった。宗家の山脇元賀が明治九年(一八七六)に他界し、また明治十年(一八七七)には、早川幸八、翌明治十一年(一八七八)には山脇得平が相次いで他界、さらに山脇元賀の後を継いだ宗家山脇元清が明治十四年(一八八一)に上京し、名古屋の和泉流

# 「能装束の美」展

## 横浜シルク博物館が特別展

横浜市のシルク博物館(横浜市中区山下町一番地、シルクセンター)では、四月十日から五月十六日まで、平成十一年度春季特別展として「文化の伝承—江戸から現代へ—華麗なる装束の美」展を開催する。

この特別展は、大名家や能楽師家に古くから伝わる装束や江戸時代代の文献などの調査研究を重ね、現代のもの百十六点、能面十九面(江戸時代十二面、現代七面)を



シルク博物館所蔵・唐織「鬱金地源氏車に羊齒桜模様」

## 平成11年3月～4月放送予定

- (3月)
- 3月1日(日) NHK・FM能楽鑑賞 (日曜) 午前8時～8時57分
  - 3月21日(日) 「源氏供養」～金春流一本田光洋ほか
  - 3月28日(日) 「玉鬘」～親世流一本田光洋ほか
- (4月) NHK・FM能楽鑑賞
- (日曜) 午前8時～8時57分
  - 4月4日(日) 「阿波舞」～親世流一本田光洋ほか
  - 4月11日(日) 「熊野」～宝生流一本田光洋ほか
  - 4月18日(日) 「小畑」～金剛流一本田光洋ほか
  - 4月25日(日) 「大原初春」～親世流一本田光洋ほか
- 能NHK教育テレビ(4月放送予定) 放送日未定
- 能「道成寺」～親世流一本田光洋ほか
- (平成10年11月 東京・親世能楽堂で収録)

当時の原料から織機、技法、天然染料の色に及ぶ再現を手がけ復元したもので、江戸時代の技術の粋を総合的に研究し現代へ文化を伝承していくうえで意義あるものである。

展示は、能装束百十六点(唐織三十八点、腰帯・髪帯など五十点)をはじめ長絹十五点、厚板十四点など、江戸時代のもの五十点、現代のもの百十六点、能面十九面(江戸時代十二面、現代七面)を

## 若手狂言会

4月9日神戸文化ホール

神戸市、神戸文化ホール

主催の「若手狂言会」は四月九日(金)神戸文化ホール・中ホールで開催。

番組は「清水」「六地蔵」など、出演は、茂山千三郎、野村萬斎、茂山正邦、茂山宗彦、茂山茂、茂山逸平、ほか茂山千五郎、茂山七三、茂山あきらの諸師。入場料(全席指定)三千元。

# 演能案内

## 名古屋観世会定式能(第二回)

四月十二日(日) 十二時半始  
名古屋能楽堂

- 朝長 和久田 勘助、梅若 六郎、植田 英基、河村健三郎、大野 誠
- 茶壺 佐藤 友彦、井上 祐一、後見 大野 弘之
- 高野物狂 山本 勝一、片山 慶次郎、高安 勝久、河村真之介、助川 龍夫
- 采女 山本 順之、中川 雅章、梅田 邦久、古橋 正邦
- 歌占 山本 順之、高橋 敏一、久田 勘助
- 後見 武田 邦弘、地謡 外山 圭一、中山 雅章、片山 九郎右衛門、加賀 敏彦、山本 順之
- 附祝言 (終了 四時半過頃)

# 鳳の会第20回記念公演

## 春らんまん 花づくし

四月二十四日(土) 午後二時始  
名古屋能楽堂

- 花争 主人 佐藤 友彦、太師 今枝 靖雄、後見 鷺見 政行
- 花子 留葉 井上 祐一、太師 佐藤 友彦、後見 佐藤 友彦、井上 祐一
- 花折 新巻 佐藤 友彦、見物人 今枝 靖雄、見物人 鹿島 俊裕、見物人 鷺見 政行、後見 今枝 靖雄

## 久田観正会春の大会

四月二十五日(日)  
午前九時三十分始  
名古屋能楽堂

素謡、舞囃子、仕舞ほか  
〔御来場歓迎〕

TEL 052・852・9436 名古屋女子大学・林研究室  
TEL 052・856・1388 井上祐一方  
052・835・3780 ギャラリーA・C・S



—京洛二つの狂言会から—

第3回「千作の芸を見る会」と  
20周年記念「忠三郎狂言会」

竹尾 邦太郎

忠勤を励み緒々として縄を縛う。つれづれに何某方の、就中、お内儀の悪口雑言を仕方に語る所は、何時か跡を控える主が何某に靡り替わす勢い、名跡を継いだ自信に七五三先代(当代千作)を彷彿とさせる。中に、お内儀を「石地蔵が夕立に遇うた様な面」と言い放つ口吻に、何やら懐かしさのやうなものも感じられるのが面白い。キリは、再度主に引掛かれて開き直り「これはようお出でなされたら、と何某を揶揄する口吻も強か、千五郎の剛直がシテとがっちり絡み後日の展開が大いに気になろうというものである。主・正邦が狡猾さを示すのはこれから。(44分)

「枕物狂」 重寶、百歳に余るシテ祖父(おおじ)千作が別部三郎の妹乙(おおと)あきらに恋をしたと仄聞する孫二人(千三郎・宗彦)、何とか思ひを叶えさせようとして出向くと、狂言下り端(保美・正博・大・敬介)でシテが一ノ松に出る。シテは貝杓子と称する面を着けるのが一般というが先の東京同様、先代万歳は「元来老人の貌そのものが既に芸術的要素を持っている」と自著に言うが、千作の自負が窺える。

「無罪」 訴訟が解決し水の在京から戻るシテ大名・千作、信仰する因幡薬師を因幡に勧誘、の思いで御堂を千細に見るうち破風(はふ)の上を目を留める。鬼瓦、とアド太郎冠者・千之丞に教えられた「あれは誰やらによう似てあつたが」と思ひ出す間もあらはこそ、派手な双シオリは馴れ親しんだ妻君懐かしさの催涙、その造作の一々を殊さら克明に述べ立てるところ、不細工をあはくかだがそうとは思わぬ大名の無邪気を千作は球か迎合の素振りもみせず取り持つ千之丞の忠告もみせず取

「無罪」 シテ太郎冠者・七五三、委細知らされず主・正邦の博奕の賞(かた)に何某千五郎の方へ遣られる。内実を知り賭を固めた太郎冠者、「随分とお目長に使ふて下されい」とは言ひお、雇い主の権利とばかりとかく強権発動しようとする何某に悉く反発する。持て余され戻されて太郎冠者、主を諷め二君に仕えずの意気

「櫻桃」 主・千之丞に到来の四十粒の栗を焼くシテ太郎冠者、忠三郎、実に楽しげな働きぶりに主の人柄まで推量され、焼き上がった栗を食へ尽くしてきて弁解は、となつても、「どこやらが正直な」主への安心が高を括る訳でもなかるうが、切迫感も覚えない。荒唐無稽とも思える鬼神一族を方便に口調法で切り抜け様とするところも、姑息より一種の居直りの横着、罪がない。最後まで抵抗して暖味算用を衝かれ降参するまで、主との応酬を面白がるかの忠三郎が如何にもおどおどか、精彩をみせた。なお論語に「媚於寵」(かまどの神に媚びる)の語句があり、主権者よりも実力のある者に媚びる響え、という。キリで、主の詰問を録そうと鬼神に擬る太郎冠者に影響してはいないだろう(30分)

「仏師」 持仏堂に納める仏像を求め上洛の田舎人・幸四郎、その律儀で几帳面な人柄から醸し出される飄々とした味わいは正に絶品。素朴一途な力に押され、流石にあざとい部のスッパ千作も、小手先だけの自光の変幻ではたらし切れず、「何もちらつく物は居りない」と苛立つ。芸劫を重ねた両者の、阿吽の呼吸の素晴らしさは無駄な力が全て脱け、融通無礙の境地は互いに芸を楽しみます。趣、化けの皮を剥がし剥がされるキリは、しこりの跡どころか和楽の気が漂うのもけだし両者の器量であろう。(29分)

「釣狐」 シテ老狐・良鴨、伯藏主に変身し、狐を釣る甥のアド彌師・千五郎を諷め罵を捨てさせるが、疑念をもつ彌師は罫に細工をして手応えを待つ。魂胆を知った老狐は、敵討ちに事寄せるも好餌の誘惑には抗しきれない。「時」の利、前後に和泉元祿がある。「忠三郎狂言会」は同一番組で約一ヶ月半の間に東京・福岡・大阪と巡演して京都がトメ、当然(?)とはいへ良鴨はアドを替えて四度「釣狐」を動めるが異例。父即師の当代忠三郎の期待の程も思われ、良鴨またよく応えた。

「こんくわい(後悔)の涙なるらん、の思いを空(鏡板)に向かつて吐露する次第は少々元気が過ぎるが、犬の遠吠に怯えて身を凍めると、数珠が杖に触れたかたかた鳴る辺りの表現力は中々。玉藻前の語は常座で胸杖の立シヤベリ、和泉流は床几だが、奥へ通るのが怖さの上がり程に掛ける心、大蔵流は更に小心な戸口の立ち話の心、である。この警戒心が訝し心、「那須野の原(落て行)一件にアドがつつとシテの背後に寄つて足元を千細に見るところなど、アドに察することがあつたと思わせで微妙。ここが伏線で、別れ際に異を鼻先へ突きつけられ、また「よう御出でなされた」と大音声で挨拶されて肝を消すところに効く。小歌節機嫌の掃途は、謡は若さが苦しいが、走り廻り、異を見詰め、検分し、引き返しては尻にそばえる、など身のこなしは獣足も立派。中人は、臨座・常座・一・二・三ノ松そして幕に入つて、と一声ずつ啼いた。

後場は、察することが見抜けたかた千五郎が切歯扼腕そのもの、老狐の跡を尋に見込み吼えること再三再四、気合が入れば、身軽になつて正体現わした良鴨も氣力充実、鼠鳴きめいて「クワイ、ちよつとこい、せんころう」と探りを入れるところから、高々と跳び上つては伏せ、思案しては静かに餌に寄り、匂いを嗅ぎ、首を振り、首を振りながら後退し、手を出しかけては引つ込め、でんぐり返り、など餌に執着遠慮する姿を若さのしなやかさで活き活きとみせる。異を外しても舞台から匂越しに逃げるキリも鮮やかに、逃げ逃せて幕からは「有難うございませう」の声、無事大役を果した安堵から思はず進る感謝の気持も爽やかだつた。(1時間15分、11月20日・忠三郎狂言会 観世会館)

中日能

四月二十九日(祝)  
名古屋能楽堂

〔第1部〕(十二時三十分始)  
解説 増田 正造  
祖父江修一  
武田 宗和  
高安 勝久  
河村真之介  
後藤嘉津幸  
竹市 龍夫  
松田 高義  
河村真之介  
幸親 清沢  
一政 芳伸  
松山 幸親  
清沢 一政  
高橋 敏彦  
藤波 重彦  
加賀 敏彦  
藤波 重彦

能 高砂  
見 岡 中川 久広  
後見 岡 久広  
河村真之介  
幸親 清沢  
一政 芳伸  
松山 幸親  
清沢 一政  
高橋 敏彦  
藤波 重彦  
加賀 敏彦  
藤波 重彦

能 半部  
見 藤波 重彦  
梅田 邦久  
河村真之介  
幸親 清沢  
一政 芳伸  
松山 幸親  
清沢 一政  
高橋 敏彦  
藤波 重彦  
加賀 敏彦  
藤波 重彦

能 三輪  
見 藤波 重彦  
梅田 邦久  
河村真之介  
幸親 清沢  
一政 芳伸  
松山 幸親  
清沢 一政  
高橋 敏彦  
藤波 重彦  
加賀 敏彦  
藤波 重彦

能 弱法師  
見 藤波 重彦  
梅田 邦久  
河村真之介  
幸親 清沢  
一政 芳伸  
松山 幸親  
清沢 一政  
高橋 敏彦  
藤波 重彦  
加賀 敏彦  
藤波 重彦

能 三輪  
見 藤波 重彦  
梅田 邦久  
河村真之介  
幸親 清沢  
一政 芳伸  
松山 幸親  
清沢 一政  
高橋 敏彦  
藤波 重彦  
加賀 敏彦  
藤波 重彦

能 三輪  
見 藤波 重彦  
梅田 邦久  
河村真之介  
幸親 清沢  
一政 芳伸  
松山 幸親  
清沢 一政  
高橋 敏彦  
藤波 重彦  
加賀 敏彦  
藤波 重彦

能 三輪  
見 藤波 重彦  
梅田 邦久  
河村真之介  
幸親 清沢  
一政 芳伸  
松山 幸親  
清沢 一政  
高橋 敏彦  
藤波 重彦  
加賀 敏彦  
藤波 重彦

能 三輪  
見 藤波 重彦  
梅田 邦久  
河村真之介  
幸親 清沢  
一政 芳伸  
松山 幸親  
清沢 一政  
高橋 敏彦  
藤波 重彦  
加賀 敏彦  
藤波 重彦

能 三輪  
見 藤波 重彦  
梅田 邦久  
河村真之介  
幸親 清沢  
一政 芳伸  
松山 幸親  
清沢 一政  
高橋 敏彦  
藤波 重彦  
加賀 敏彦  
藤波 重彦

狂言 杭か人か  
見 野村又三郎 松田 高義

能 安達原  
見 武田 志房  
森 常好  
後藤孝一郎  
大野 元祐

能 安達原  
見 武田 志房  
森 常好  
後藤孝一郎  
大野 元祐

能 安達原  
見 武田 志房  
森 常好  
後藤孝一郎  
大野 元祐

能 安達原  
見 武田 志房  
森 常好  
後藤孝一郎  
大野 元祐

能 安達原  
見 武田 志房  
森 常好  
後藤孝一郎  
大野 元祐

能 安達原  
見 武田 志房  
森 常好  
後藤孝一郎  
大野 元祐

能 安達原  
見 武田 志房  
森 常好  
後藤孝一郎  
大野 元祐

能 安達原  
見 武田 志房  
森 常好  
後藤孝一郎  
大野 元祐

能 安達原  
見 武田 志房  
森 常好  
後藤孝一郎  
大野 元祐

能 安達原  
見 武田 志房  
森 常好  
後藤孝一郎  
大野 元祐

能 安達原  
見 武田 志房  
森 常好  
後藤孝一郎  
大野 元祐

料 金 1部 5000円  
2部 4000円  
A席前売4000円(当日5000円)  
B席前売3000円(当日4000円)  
S席前売2000円(当日3000円)  
A席前売1000円(当日2000円)  
B席前売700円(当日1000円)

〔来聴歓迎〕  
主催 名古屋猶諷会  
梅若 盛義



# 観世流・金剛流 宗家本発行元 檜書店

〒101-0052 東京都千代田区神田小川町2-1  
電話 03(3291)2488 振替00130-7-3552  
〒604-0935 京都市中京区二条通麩屋町東入  
電話 075(231)1990 振替01010-0-113

# 能 楽 の 友

## 発行能楽の友社

名古屋市中種区千種2丁目18-18  
(郵便番号 464-0858)  
電話 (052) 731-7 9 8 4  
FAX (052) 733-2 8 3 7  
振替口座 00800-6-36393

購読料 1年 1 1 0 0 円  
郵送の場合 1年 1 8 0 0 円  
一 部 1 0 0 円

## 演能カレンダー

### ◆名古屋能楽堂◆

- (4月)
- 24日(出) 狂言鳳の会・第20回記念公演 (有料)
  - 25日(日) 久田観正会春の大会 (無料) (番組①面)
  - 29日(木・祝) 中日能 (有料)
- (5月)
- 2日(日) 翠謡会春季大会 (無料) (番組①面)
  - 8日(出) 青陽会定式能 (有料) (番組②面)
  - 9日(日) 邦謡会春の発表会 (無料) (番組②面)
  - 14日(金) 名古屋能楽堂定例公演 (有料) (番組②面)
  - 15日(出) 名古屋観世九章会定例会 (有料) (番組③面)
  - 16日(日) 第42回狂言やるまい会 (有料) (番組③面)
  - 22日(出) 第11回たまも会 (無料) (番組③面)
  - 23日(日) 井上橋番社・井戸梅春会  
第3回合同名古屋大会 (無料)
  - 29日(出) 三菱電機全場所謡曲大会 (無料)
  - 30日(日) 名古屋淡交会別会 (有料) (番組③面)

### ◆熱田神宮能楽殿◆

- (5月)
- 3日(祝) 豊水会 (無料)
  - 23日(日) 名古屋観衛会 (無料) (番組③面)
- (6月)
- 5日(出) 熱田祭奉納能 (無料)
  - 27日(日) 観生会 (無料)

**梅若 六郎氏**  
日本芸術院(大丸直院長)は三月十九日、芸術の分野で顕著な業績を挙げた人に贈る一九九八年度日本芸術院賞を内定、能楽関係では、観世流シテ方・梅若六郎氏(五一)が受賞、六月七日、東京・上野の日本芸術院会館で授賞式が行われる。

### 日本芸術院賞

### 梅若 六郎氏

**狂言やるまい会**  
名古屋・東京で公演  
狂言やるまい会(野村又三郎氏主宰)は「技」と「業」と「術」の競演と題して、名古屋と東京で公演する。

### 狂言やるまい会

名古屋公演は五月十六日(日) 52・751・9966  
東京公演は八月二十一日(土) 宝生能楽堂で第十六回公演として催される。演目は「牛馬」「庵之梅」「大般若」「宝の笠」素囃子「早舞」(名古屋公演案内は本号③面掲載)。問い合わせは電話0

## 希望曲1位「道成寺」

### 狂言「釣狐」がトップ

### (名古屋) 定例公演アンケート

名古屋能楽堂では、平成九年十月から実施している定例公演について、公演の内容、希望上演曲名観回数などのアンケートを求めたが、平成十年六月からことし三月の第十七回公演までの九回にわたる上演についてこのほどアンケートの集計を行った。

アンケートの総回答数は五百九十三通で、とくに「今後上演してほしい能、狂言」についての回答では、能では一位「道成寺」(回数42)、二位「羽衣」(22)、「隅田川」(16)、「葵上」(11)。

狂言では、一位「釣狐」(11)二位は「報復」(5)、「蚊相撲」(5)三位は「椿椿」(4)四位「末広がり」(3)「唐人相撲」(3)「附子」(3)の順となっている。

能の上演希望の五位以下は次のようである。

「小町の能」(8)、「安宅」(8)、「井筒」(8)、「蟬丸」(7)、「教盛」(6)、「石橋」(6)、「紅葉狩」(5)、「卒都婆小町」(5)、「熊野」(5)、「善知鳥」(4)、「翁」(4)、「碓」(4)、「清経」(4)、「熊坂」(4)「恋重荷」(4)、「桜川」(4)、「俊寛」(4)、「船弁慶」(4)、「山姥」(4)、「小鍛冶」(3)、「土蜘蛛」(3)、「野宮」(3)、「八島」(3)、「松風」(3)、「新作能」(3)以下「弱法師」(3)、「新作能」(3)以下阿波、安達原、綾鼓、鶴岡、鏡持、杜若、通小町、菊慈童、景清、国柄、狸々、拱待、高砂、定家、通盛、半部、鉢木、班女、二人静、弓八幡、吉野天人、輪蔵がいずれも二回答となっている。

また、狂言は、前記につづいて二回答には、川上、狐塚、木六駄、腰折、鶏聲、武悪、二人持が挙げられている。

定例公演を何で知ったかという設問に対して、五百九十三回答のうち①知人の紹介二五三(44%)、その他チラシ、新聞、広報など、また能狂言の観覧は、今回が初めて、というのが34%、年により数回17%、年に十回以上13%となっている。

## 演能案内

### 久田観正会春の大会

四月二十五日(日) 午前九時半始

名古屋能楽堂

素囃子	舞囃子	仕舞	素囃子	舞囃子	仕舞	素囃子	舞囃子	仕舞	素囃子	舞囃子	仕舞
松屋	松屋	松屋	松屋	松屋	松屋	松屋	松屋	松屋	松屋	松屋	松屋
松屋	松屋	松屋	松屋	松屋	松屋	松屋	松屋	松屋	松屋	松屋	松屋
松屋	松屋	松屋	松屋	松屋	松屋	松屋	松屋	松屋	松屋	松屋	松屋

### 翠謡会春季大会

五月二日(日) 午後一時始

名古屋能楽堂

素囃子	舞囃子	仕舞	素囃子	舞囃子	仕舞	素囃子	舞囃子	仕舞	素囃子	舞囃子	仕舞
三輪	三輪	三輪	三輪	三輪	三輪	三輪	三輪	三輪	三輪	三輪	三輪
三輪	三輪	三輪	三輪	三輪	三輪	三輪	三輪	三輪	三輪	三輪	三輪
三輪	三輪	三輪	三輪	三輪	三輪	三輪	三輪	三輪	三輪	三輪	三輪

〔入場無料〕

〔来場歓迎〕

拝啓 薫風さわやかな季節となりました。日頃より、古典芸術能楽に心を寄せ、伝統ある能楽の中に生きる、香り高い精神文化に親しみ、此処名古屋能楽堂に於いて、素謡、舞囃子、連吟、仕舞を演じ、心潤す一時を楽しみ、中日文化センター翠謡会会員一同、日頃修練のささやかな成果を以て、明日への鋭意と活力に資することを願うものです。

私ども、生駒里翠



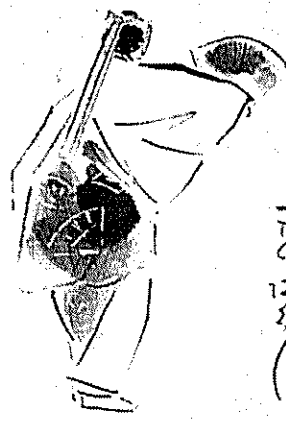
# 五月雅日記

(191)

## 籠太鼓

えと文 二井 栄逸

時守の  
打ちます鼓  
声聞けば  
時こそうつれ



藤村 賢二

君はおそくて  
作物に結びつけられた鼓を打  
ち、萬葉の歌を詠いながら、鼓の

声も時過ぎて、と鼓の段に舞い進  
む、籠太鼓のシテの、型の美しさ  
や決りのよさに、観衆は酔わされ  
てしまう。

物狂能の多くは、愛児に別れた  
り、夫に遠ざかった女性が、愛慕  
の情にたえかねて、心が乱れるさ  
まをえがいたものであるが、この  
籠太鼓はちよつと違う。

口論のすえ、人をころした科  
で、牢に投ぜられた剛勇の夫が、  
牢を破って逃走したのをかばう、  
列婦型の女性をシテとする狂女能  
である。

領主の権勢に対して反抗する意  
気を示しながらも、一面、夫への  
愛情は深く、身替りに投獄された  
妻は、領主から、夫の在所を明せ  
ばこの牢を出してやるといわれ  
ても、この牢の内こそ、夫のかたみ  
よ、なつかしやと、牢を出よう  
としない。その心根に動かされた  
領主は、ついに夫の罪を許してし  
まうのであった。

端的に事件の展開を追いなが  
ら、複雑な感情の起伏を表現する  
ところ、すぐれた手法と言わねば  
ならない。

関の清次という夫を金く陰の存  
在として扱い、現実性はあるなが  
ら、劇的な要素を主題としては扱  
っていない。

多くの能役者によって磨かれ、  
籠太鼓は世阿彌の傑作の一つにな  
っていった。

狂気となったシテは、此の牢の  
内をばらばらと、これこそ形見  
よ、なつかしやと、牢にこもると  
ころは独吟で詠われる、名時ど  
ろである。出づまじや雨の夜の、  
盡きぬ名残ぞかなしき、西楼に月  
落ちて、と夫を恋うる牢の内のお  
われさが切々と胸を打つ。私は  
昔、齊藤劉の獄中の記を読んだ事  
を覚えている。筆者はその書の中  
に、獄中生活の一切を告白、赤  
裸々に感涙を吐露し、心身の塵埃  
を払って、静かに真実を語ってい  
るところに非常に清潔な美しさを  
感じたものである。

夫を恋うる情次の妻の心情とは  
全く違ふけれど、獄屋の高い窓に  
流れる雲や月は、静寂な光をも  
つてさしのぞくことにかわりは無  
い。

私は、籠太鼓を語つた際に、何  
故か次の齊藤劉の歌を思い出され  
てならない。

この牢に  
居馴れて聞けば  
音に泣き  
庭松が枝を  
吹く風のあり

一、佐藤友彦「籠太鼓」(橋岡慈親、ツ  
レ久田勘助)で、橋岡一門はじめ野  
村四郎、上田貴弘師らが来演。  
能「経正」シテ瀬戸洋子師は師  
範披露の初能、「隅田川」は親子  
の共演で別会をかざる。(番組③  
面掲載)

## 「ナディア狂言」上演

6月4日 ナディアパーク

### 若手狂言師たちの活動

名古屋市の中心・栄にある名古屋  
市青少年文化センター「ナディア  
パーク」のアートピアホール  
で、きたる六月四日(金)、初め  
て狂言が催される。

この企画は、若者に広く狂言を  
知ってもらおうということで、名  
古屋を中心に活躍している若手の  
狂言師自身が若者の集まる「ナデ  
ィアパーク」へ出向き、演じるこ  
ういう試みにチャレンジしようとい  
うもので、狂言界の未来をになう  
若き狂言師たちが、自ら同世代、  
さらに次代をになう青少年に狂言  
をみる機会と関心を高めるものと  
して、積極的なアクションが注目

される。  
演目は「蝸牛」と「六地藏」の  
二番、ほか「狂言よもやまばな  
し」として名古屋女子大教授林和  
利氏のお話がある。  
出演は「蝸牛」山伏・佐藤融、  
主人・今枝靖雄、太郎冠者・井上  
靖浩。「六地藏」は、すっぱ・松  
田高義、田舎者・野村小三郎、徒  
者・野口隆行、徒者・奥津健太  
郎。  
開演午後六時半。入場料は全自  
由席で一般二千五百円、学生千二  
百円、チケット取扱いは、チケッ  
トぴあ(電話052・320・9  
999)。

## 長生会、伊勢 神宮で奉納能

親世流太鼓、長生会(鬼頭喜太  
郎師主宰)は、四月六日(火)伊  
勢神宮内苑能楽殿で神宮奉納能を  
開催。同会の奉納は毎年行われ  
ており、こゝしは四十一回になる。

## 5月30日名古屋 屋談交會別會

### 親子出演の「隅田川」

名古屋屋談交會(橋岡慈親師主  
宰)は五月三十日(日)名古屋能  
楽堂で別會を開催。能三番、狂言  
一番を上演する。  
能「経正」(瀬戸洋子)能「隅  
田川」(久田三津子、子方・久田  
勘吉郎)狂言「禁野」(井上祐

## 青陽会定式能 (第43期)

五月八日(土)十二時半開演

名古屋能楽堂

能組  
仕舞 網之段 三村 恵子  
胡蝶 鶴之段 前野 郁子  
武田 邦弘 飯富 雅介  
柳原富司忠  
寛 鉦一  
竹市 龍夫

仕舞 竹生鳥 祖父江修一  
雲雀山 高橋 暎一  
山姥 久田 勘助  
梅田 邦久 杉江 元  
西村 信広  
河村真之介  
後藤嘉津幸  
大野 誠

隅田川 梅田 邦久  
後藤嘉津幸  
大野 誠

狂言 魚説法 今枝 靖雄  
星野 路子 梅田 邦久  
加賀 敏彦  
地 謡  
三村 洋子  
今野 美和  
竹市 学

能 狸々 後見 梅田 邦久  
加賀 敏彦  
地 謡  
三村 洋子  
今野 美和  
竹市 学

〔有料〕  
当日券三千円  
学生 千円  
主催 青 陽 会

## 春の邦謡会

五月九日(日)午前九時半始

名古屋能楽堂

番外舞臺子 屋島 梅田 邦久  
河村真之介  
竹市 学  
熊野 岩田 崇子  
石黒由美子  
西沢富貴枝  
隅田川 尾藤 英邦  
松原 幸男  
須部 甫  
松中たね子  
河合六三郎  
高島 良一

舞臺子 葛城 野田ちづ子  
河村真之介  
助川 竜夫  
善知鳥 高野千勢子  
河村真之介  
竹市 学  
松盛 関谷 薫  
柳原富司忠  
竹市 学  
実盛 鈴木志子  
横山 国枝  
遠山美津子  
檜垣 美濃辺真知子  
河村真之介  
助川 竜夫  
菊慈童 近藤とさ子  
福井啓次郎  
大野 誠  
鈴木 高木 正之  
上田 牧子  
森 培根  
山口 三好  
東方朔 片山 伸吾  
河村真之介  
助川 竜夫  
附祝言 片山慶次郎  
福井啓次郎  
大野 誠

〔御来場歓迎〕  
主催 邦 謡 会  
梅田 邦 久  
〔終了六時頃〕

## 名古屋能楽堂定例公演

五月十四日(金)午後六時半始

名古屋能楽堂

〔親世流〕 杜 若 泉 嘉夫  
地 謡  
高橋 暎一  
助川 竜夫  
〔和泉流〕 藤 戸 片山九郎右衛門  
地 謡  
武田 邦弘  
正 邦  
熊野 梅田 邦久  
高安 勝久  
杉江 元  
後藤 孝一  
竹市 学  
〔親世流〕 熊野 梅田 邦久  
高安 勝久  
杉江 元  
後藤 孝一  
竹市 学

協賛 能楽協会名古屋支部  
名古屋文化振興事業団  
名古屋市・名古屋城振興協会  
名古屋市文化振興事業団

〔入場料〕前売一般三千五百円、学生二千円(当日一般四千円、学生二千五百円)  
〔前売券取扱〕名古屋能楽堂(電話052・231・0088) チケットぴあ、チケッ  
トピオン、市内プレイガイド

## 平成11年4月～5月放送予定

●NHK・FM能楽鑑賞

〔4月〕(日曜日午前8時～9時)

25日(日)「大原御幸」(親世流)坂井音重ほか

〔5月〕

2日(日) 休止

9日(日)「杜若」「善知鳥」(宝生流)寺井良雄ほか

16日(日)「頼政」「鶴」(親世流)五木田武計ほか

23日(日)「頼朝」「橋弁慶」(親世流)大槻文蔵ほか

30日(日)「伊文字」「昆布売」(和泉流)山本東次郎、野村万作

●NHK教育テレビ

5月23日(日)午後3時～4時45分

能「道成寺」シテ岡根祥人、ワキ森 常好ほか

名古屋観世九阜会定例会

五月十五日(土)午後一時始  
名古屋能楽堂

番組 中野 宜夫  
駒瀬 直也  
能通盛 高安 勝久  
柳原真之介  
鬼頭喜太郎  
竹市 学

狂言 地蔵舞

佐藤 友彦  
後見 融  
井上禮之助

仕舞 賀茂

高橋 暁一  
外山 圭一  
加藤 保彦  
鶴之段 五木田三郎

能海 上

飯富 雅介  
西村 信広  
後藤嘉津幸  
大野 龍夫

附祝言

主催 名古屋観世九阜会  
事務所 名古屋南区元塩町一丁目一七  
電話(〇五二)六一一三六五九  
チケットぴあの取り扱いも始めました。  
052-320-9999

「技」と「業」と「術」の競演  
狂言 やるまい会名古屋公演

五月十六日(日)午後一時開演  
名古屋能楽堂

入間川

野村小三郎 野口 隆行  
松田 高義

序之舞

寛 敏一 竹市 学  
柳原富司忠

文蔵

野村 万作 野村小三郎  
野村又三郎 井上禮之助

お茶の水

野村 万作 野村小三郎  
茂山七五三 木村 正雄  
茂山 正邦

入場料(前売) A券五〇〇円 B券四〇〇円 C券三〇〇円  
当日券 五千元 学生券 二千元  
チケットぴあの取り扱いも始めました。  
TEL052-320-9999

第十二回 たまも会

五月二十二日(土)午前十時始  
名古屋能楽堂

竹生島 太田 初一 天野 元成 長棟 忠美  
鞍馬天狗 水野すま子 澤田 拓 西澤 康夫  
西王母 青山 博子 玉川 裕香

箆

青山 博子 服部 公忠 水野すま子  
小督 萩野 敏子 三橋 尚美 長棟 忠美

草紙洗

高木アイ子 谷川 真理 青山 博子

右近

西澤 康夫 河村真之介 大野 龍夫

安宅

三橋 茂三 河村真之介 大野 龍夫

卷絹

水野すま子 河村真之介 大野 龍夫

葵上

長尾 幸子 鈴木 久恵 寺田 郁子

盛久

奈良 善一 澤田 拓 小山 皓司

源氏供養

駒林 豊徳 平松 豊司 真野 久

三井寺

小山 皓 澤田 拓

加茂

三橋 尚美 青松 隆 川本 達彦

八嶋

河田 直昭 真野 久 駒林 豊徳

威陽宮

善松 鶴田 笠龍 鳥蟬 天大 枕江 慈山 童

主催 たまも会  
三重県一志郡一志町田尻七〇番地  
TEL(〇五九)二九三二五〇五六

井上橋香社 井戸梅春会

第三回合同名古屋大会  
午前九時十五分始  
名古屋能楽堂

素謡、仕舞、舞囃子、連吟ほか  
〔入場無料〕

三菱電機全場所謡曲大会

午前九時四十五分始  
名古屋能楽堂  
〔入場無料〕  
番囃子「安宅」舞囃子、素謡、仕舞ほか

名古屋淡交会別会

五月三十日(日)正午始  
名古屋能楽堂  
番 組 鈴木多美子 玉木 孝男  
西王母 中村 朝子 清沢 一政  
杜若 加賀 敏彦 八神 孝充

能 經

飯富 雅介 河村真之介 竹市 学

熱田神宮能楽殿演能案内

五月二十三日(日)十時始  
熱田神宮能楽殿

番外仕舞

井花 筒月 河村 信重 松浦信一郎

仕舞

鶴子洗小亀 北村 照代 稲葉 正信

舞囃子

須磨源氏 駒形賀津子 河村真之助 柳原富司忠 竹市 学

松風

山中 節子 河村真之助 柳原富司忠 竹市 学

老松

中川 芳子 河村真之助 柳原富司忠 竹市 学

菊慈童

杉野 伸江 河村真之助 柳原富司忠 竹市 学

花筐

川瀬とよ子 河村真之助 柳原富司忠 竹市 学

能 隅田川

後見 橋岡 慈観 地謡 鈴木多美子 山田 義高  
久田三津子 谷田宗二朗 大 久田舞一郎 大野 誠

狂言 禁野 井上 祐一 佐藤 融 友彦  
仕舞 頼 政 野村 四郎 地謡 松山 幸親 山田 義高  
卒都婆小町 下田 雄三 加賀 敏彦 久田 勘三郎

能 鷺

高安 勝久 河村真之助 鬼頭喜太郎  
橋本 正樹 福井啓次郎 藤田六郎兵衛

〔終了予定四時半頃〕主催 名古屋淡交会  
〔入場料〕前売一般七千円(当日八千円)  
学生四千円(当日四千五百円) 全自由席  
取り扱い所 チケットぴあ、チケットセゾン、市内各プレイガイド  
久田三津子方(TEL052-705-1585)

仕舞 三輪 輪 青山久美子 鬼頭喜太郎  
吉野天 人 真野 健 藤田六郎兵衛  
雲林 院々 竹内美紀子 上野 朝義  
玉之 段 水野 恵子 野村 四郎  
合浦 湯浅 知子 湯浅 知子 野村 四郎

舞囃子 竜田 移神楽 福井啓次郎 藤田六郎兵衛  
歌占 伊藤健一郎 河村真之助 大野 誠  
定家 足立奈々子 福井啓次郎 藤田六郎兵衛

素謡 披き 捨 神野勝之助 山本 真義  
居囃子 羽衣 伊藤 秀子 後藤孝一郎 大野 誠  
番外仕舞 兼平 山本 順一  
山本 章弘 山本 勝一  
山本 彰弘 川久保彰礼

能 江口 飯富 雅介 福井啓次郎 藤田六郎兵衛  
間 佐藤 友彦 橋本 幸 藤田六郎兵衛

〔御来場歓迎〕主催 名古屋観世九阜会  
指導 山本 博通  
指導 山本 博通







熱田祭協賛 奉納能

六月五日(土)

午前十時三十分始

熱田神宮能楽殿

舞囃子(金春流)

高砂

小島 芳樹

河村真之介 鬼頭 好信

柳原富司忠 大野 誠

佐久間祥夫 前田 茂穂

加藤 正嗣 本田 光洋

加藤 雅弘 加藤 雅弘

加藤 雅弘 加藤 雅弘

加藤 雅弘 加藤 雅弘

加藤 雅弘 加藤 雅弘

加藤 雅弘 加藤 雅弘

加藤 雅弘 加藤 雅弘

加藤 雅弘 加藤 雅弘

加藤 雅弘 加藤 雅弘

加藤 雅弘 加藤 雅弘

加藤 雅弘 加藤 雅弘

加藤 雅弘 加藤 雅弘

加藤 雅弘 加藤 雅弘

加藤 雅弘 加藤 雅弘

加藤 雅弘 加藤 雅弘

加藤 雅弘 加藤 雅弘

加藤 雅弘 加藤 雅弘

加藤 雅弘 加藤 雅弘

加藤 雅弘 加藤 雅弘

加藤 雅弘 加藤 雅弘

加藤 雅弘 加藤 雅弘

加藤 雅弘 加藤 雅弘

加藤 雅弘 加藤 雅弘

加藤 雅弘 加藤 雅弘

加藤 雅弘 加藤 雅弘

加藤 雅弘 加藤 雅弘

加藤 雅弘 加藤 雅弘

加藤 雅弘 加藤 雅弘

加藤 雅弘 加藤 雅弘

加藤 雅弘 加藤 雅弘

加藤 雅弘 加藤 雅弘

加藤 雅弘 加藤 雅弘

加藤 雅弘 加藤 雅弘

加藤 雅弘 加藤 雅弘

加藤 雅弘 加藤 雅弘

加藤 雅弘 加藤 雅弘

加藤 雅弘 加藤 雅弘

加藤 雅弘 加藤 雅弘

加藤 雅弘 加藤 雅弘

加藤 雅弘 加藤 雅弘

加藤 雅弘 加藤 雅弘

加藤 雅弘 加藤 雅弘

加藤 雅弘 加藤 雅弘

加藤 雅弘 加藤 雅弘

加藤 雅弘 加藤 雅弘

加藤 雅弘 加藤 雅弘

加藤 雅弘 加藤 雅弘

加藤 雅弘 加藤 雅弘

加藤 雅弘 加藤 雅弘

加藤 雅弘 加藤 雅弘

加藤 雅弘 加藤 雅弘

春の大和路探訪

大槻能楽堂自主公演能

平成十一年度の大槻能楽堂自主公演能は、能の魅力を探るシリーズとして「春の大和路探訪」の企画で上演される。

▽五月二十九日(土) お話「今日の狂言と能」村瀬和子氏。

能「采女」美奈保之伝(シテ山中義経、ワキ福王茂十郎、笛・藤田六郎兵衛、小鼓・林光寿、大鼓・山本哲也)

▽六月十九日(土) お話「今日の狂言と能」大森亮高氏。

能「三山」(シテ泉泰孝、ツレ齊藤信隆、ワキ植田隆之丞、アイ茂山千五郎、笛赤井啓三、小鼓・成田達志、大鼓・白坂信行)

▽六月二十六日(土) お話「今日の狂言と能」高橋隆郎氏。

能「國樞」(シテ赤松植英、前ツレ片山伸吾、後ツレ山本正人、

能「國樞」(シテ赤松植英、前ツレ片山伸吾、後ツレ山本正人、

放下僧

能(喜多流)

松井 俊介

長田 郷

西村 信広 寛 敏一 大野 誠

後藤嘉津幸

間 松田 高義

巻絹

瀬戸 洋子

河崎 勲 鬼頭喜太郎

柳原富司忠 鹿取 希世

星野 路子

三村 恵子

久田 三津子

加藤 春枝

お冷し

狂言(和泉流)

佐藤 友彦

後見 井上礼之助

能(宝生流)

橋本 幸

衣斐 愛

野村又三郎

後見 衣斐 正宜

鬼頭 嘉男

山田あき子

後藤 恒子

長阪 清子

小林 福子

竹内 澄子

影山 三池子

戸田 三池子

玉井 博和

野村又三郎

福井啓次郎

鹿取 希世

半部

能楽協会名古屋支部

開演午後二時、入場料当日四

千三百円、お問い合わせは06・

6761・8055、大槻能楽

堂。

名古屋の女性能楽本宮大社の

能楽本研究で得られた成果と今

後の課題。資料篇①尾張藩「藩士

名寄」②「安政五年戊午改分限

帳」③「高安流」語

序文として筑波大学名誉教授・

日本民俗史学会・芳賀登氏が意欲

にみちた研究を評価推薦のことは

をよせている。

全四百六十八頁、A5判

発行・雄山閣出版株式会社(東

京都千代田区富士見二六一九)

新刊紹介

「近世能楽史の研究」

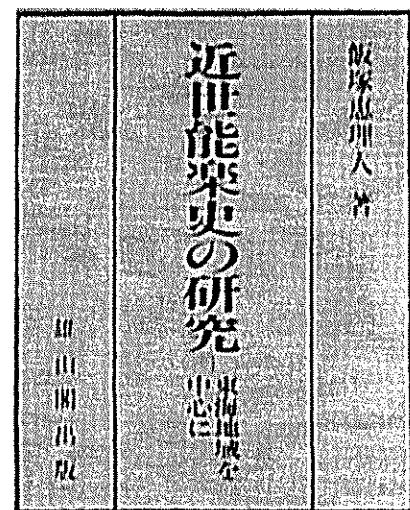
東海地域を中心に

飯塚 恵理人氏著

相山女学園大学助教授・飯塚恵理人氏は、このほど「近世能楽史の研究―東海地域を中心に」の諸研究をまとめ、相山女学園大学研究叢書として、雄山閣出版から刊行された。

内容は、序章「東海地域能楽史の研究とその意義 明治期の名古屋能楽界の特徴と問題点など。第一部「尾張藩御役者の事蹟をめぐって」①金春八左衛門家・林家(金春喜左衛門家)の代々②金春流より宝生流に転流させられた家③金剛流寺田家年譜考④観世流木下家年譜考⑤平岩加兵衛家年譜考

要集」に親



(叶石会・一謡会番組つづき)

熊野

清沢 一政

飯富 雅介

池ヶ谷 豊

河村 栄重

梅方 栄重

中川 邦久

雅章

須部 南

中川 邦久

雅章

雅章

飯富 雅介

池ヶ谷 豊

河村 栄重

梅方 栄重

中川 邦久

雅章

須部 南

中川 邦久

雅章

雅章

雅章

飯富 雅介

池ヶ谷 豊

河村 栄重

梅方 栄重

中川 邦久

雅章

須部 南

中川 邦久

雅章

雅章

雅章

飯富 雅介

池ヶ谷 豊

河村 栄重

梅方 栄重

中川 邦久

雅章

須部 南

中川 邦久

雅章

雅章

雅章

飯富 雅介

池ヶ谷 豊

河村 栄重

梅方 栄重

中川 邦久

雅章

須部 南

中川 邦久

雅章

雅章

雅章

飯富 雅介

池ヶ谷 豊

河村 栄重

梅方 栄重

中川 邦久

雅章

須部 南

中川 邦久

雅章

雅章

雅章

飯富 雅介

池ヶ谷 豊

河村 栄重

梅方 栄重

中川 邦久

雅章

須部 南

中川 邦久

雅章

雅章

雅章

飯富 雅介

池ヶ谷 豊

河村 栄重

梅方 栄重

中川 邦久

雅章

須部 南

中川 邦久

雅章

雅章

雅章

飯富 雅介

池ヶ谷 豊

河村 栄重

梅方 栄重

中川 邦久

雅章

須部 南

中川 邦久

雅章

雅章

雅章

飯富 雅介

池ヶ谷 豊

河村 栄重

梅方 栄重

中川 邦久

雅章

須部 南

中川 邦久

雅章

雅章

雅章

飯富 雅介

池ヶ谷 豊

河村 栄重

梅方 栄重

中川 邦久

雅章

須部 南

中川 邦久

雅章

雅章

雅章

飯富 雅介

池ヶ谷 豊

河村 栄重

梅方 栄重

中川 邦久

雅章

須部 南

中川 邦久

雅章

雅章

雅章

飯富 雅介

池ヶ谷 豊

河村 栄重

梅方 栄重

中川 邦久

雅章

須部 南

中川 邦久

雅章

雅章

雅章

飯富 雅介

池ヶ谷 豊

河村 栄重

梅方 栄重

中川 邦久

雅章

須部 南

中川 邦久

雅章

雅章

雅章

飯富 雅介

池ヶ谷 豊

河村 栄重

梅方 栄重

中川 邦久

雅章

須部 南

中川 邦久





平成七年六月一日認可の金剛能楽堂財団の事業の一、財団公開能楽曲のシリーズ、「異服」「影祖」「龍虎」に続き本年は「住吉詣・蘭拍子」である。...

珍しい金剛流の

「住吉詣・蘭拍子」

竹尾邦太郎

九一六四七)の時にこれを勤めていた。その時は当主にシテを仰出されたのであったが、幼少であつたから、シテを勤めるとなると、それと同輩の童や明石が...

白大口のワキ茂十郎の名宣の莊重と源氏光臨を触れるアイあきらの神妙が舞台を飾る。...

白大口のワキ茂十郎の名宣の莊重と源氏光臨を触れるアイあきらの神妙が舞台を飾る。車が正先へ、一声(市和、清次郎・建雄)で源氏・童・惟光・從者四人と出...

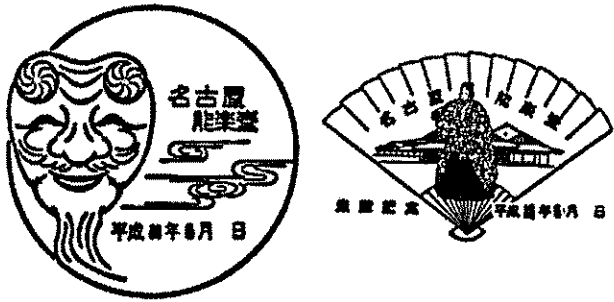
金剛永謹宗家むかえ 八ヶ岳薪能 8月3日 小淵沢 身曾岐神社

名古屋宝生会定式能 (第43期) 第2回 六月二十日(日)午後一時始 名古屋能楽堂

也留舞会(和泉流) 合同発表会 六月二十七日午前十一時始 名古屋能楽堂

# 名古屋能楽堂の参観 連休3日間で3000人

名古屋能楽堂来館記念スタンプ



平成11年5月9日

名古屋能楽堂では、ことし四月から演能が行われなくなり、能舞台の参観を公開しており、いろいろな能・狂言関係の展示を行う企画展とともに、好評を博している。

名古屋能楽堂は、ことし四月から演能が行われなくなり、能舞台の参観を公開しており、いろいろな能・狂言関係の展示を行う企画展とともに、好評を博している。

## 平成11年5月～6月放送予定

- NHK・FM能楽鑑賞（日曜日午前8時～9時）
  - [5月]
    - 23日(日) 「邯鄲」 「橋弁慶」 (親世流) 大規文蔵ほか
    - 30日(日) 「伊文字」 「昆布売」 (和泉流) 山本東次郎、野村万作
  - NHK教育テレビ
    - 5月23日(日) 午後3時～4時45分
    - 能「道成寺」シテ関根祥人、ワキ森 常好ほか
  - NHK・FM能楽鑑賞（日曜日午前8時～9時）
    - [6月]
      - 6日(日) 「水無月祓」 「采女」 (親世流) 山本順之ほか
      - 13日(日) 「鶉飼」 「雲雀山」 (宝生流) 高橋勇ほか
      - 20日(日) 「天鼓」 「是界」 (喜多流) 塩津哲生ほか
      - 27日(日) 「女郎花」 (親世流) 大江将董ほか
  - NHK教育テレビ
    - 6月27日(日) 午後3時
    - 「舍利」 (金春流) 金春見実・金春徳高・森常好・善竹十郎ほか

### 来館記念スタンプも設置

## 徳川美術館 の特別陳列

「青・ブルー・藍の世界」

徳川美術館（名古屋市中区徳川町一〇一七）は、同館企画展として、五月二十九日（日）から七月十一日（日）まで特別陳列「青・ブルー・藍」日本人が愛した色の世界」を開催する。

観覧料／一般千二百円、高大生七百元、小中生五百円。なお七月三日（日）午後一時半から三時まで、第三十五回定期研究発表会として、「大倉七左衛門家蔵『能楽子組』」にみる尾張徳川家の演能―二代光友・三代綱誠の時代―について、徳川美術館学芸員・山川氏氏の講演が講堂で開催される。入館者聴講自由。

「夜討雪隠」 戦中戦前は人口に膾炙した物語、仇討ちなどは時代錯誤と思いきや、姿形は変わりぬ有様、防衛指針法案なども何やらさななく、今日性を留めるのも皮肉。

「悪坊」 酔余、僧、あきらかに絡むシテ悪坊、忠三郎、潰れて前後不覚の裡に僧の仕返しを受け、思いも寄らぬ道に追い込まれるが、長刀に替へたる唐傘を掲げて頭陀に出でうよ、の殊勝も頓狂ではなからうかと思わせ思三郎老翁。宿屋・耕道、後見・童司。（21分・3月21日・河村定期能・河村能舞台）

「遊行柳」 遊行上人、西行ゆかりの老柳を看過し、古き老に案内されて念仏を上げれば、喜ぶ古老は後シテに柳ノ精と変じ、クセ舞に柳にまつる故事を、見せて上人を慰め、報謝を序ノ舞に表して消える。

「朝長」 シテ六郎。前は長者の女丈夫の貫禄、語にワキ隆之亮を静聴ならぬ頼聴させる熱情をみせる。後は面子に拘泥する血気の若武者の杜絶、紺紅段入小菱雲持・濃緑単法被の姿も武張る。敵味方入り乱れ戦う様を指廻シ面使と見せて上人を慰め、報謝を序ノ舞に表して消える。

## 「名古屋梅猶会」「河村定期能」と「第廿一回・邦謡会」「観世会」

竹尾 邦太郎

「班女・笹ノ伝」 一夜の契りに取り交した互いの扇、その持ち主を追究する遊女シテ花子・盛義、奇立つ宿の長アイ友彦に呼び出され、うつつなき心の運は虚脱の様も如実に、舞台上入ってはひたすら激怒の風が頭上を過ぎるに任せる風情。取り上げられた扇を静かに拾って懐中し、流れの身こそ悲しけれ、のシオリには女心の哀れ憫々と迫り、後場の物狂おしい彷徨に利く。

「空籠」 臆病を承知で日暮に便へ出す主・礼之助も人が悪いが、拒めば活字に関わりと太刀を借りて出掛ける太郎冠者・祐一も

「遊行柳」 遊行上人、西行ゆかりの老柳を看過し、古き老に案内されて念仏を上げれば、喜ぶ古老は後シテに柳ノ精と変じ、クセ舞に柳にまつる故事を、見せて上人を慰め、報謝を序ノ舞に表して消える。

「遊行柳」 遊行上人、西行ゆかりの老柳を看過し、古き老に案内されて念仏を上げれば、喜ぶ古老は後シテに柳ノ精と変じ、クセ舞に柳にまつる故事を、見せて上人を慰め、報謝を序ノ舞に表して消える。

「遊行柳」 遊行上人、西行ゆかりの老柳を看過し、古き老に案内されて念仏を上げれば、喜ぶ古老は後シテに柳ノ精と変じ、クセ舞に柳にまつる故事を、見せて上人を慰め、報謝を序ノ舞に表して消える。

「班女・笹ノ伝」 一夜の契りに取り交した互いの扇、その持ち主を追究する遊女シテ花子・盛義、奇立つ宿の長アイ友彦に呼び出され、うつつなき心の運は虚脱の様も如実に、舞台上入ってはひたすら激怒の風が頭上を過ぎるに任せる風情。取り上げられた扇を静かに拾って懐中し、流れの身こそ悲しけれ、のシオリには女心の哀れ憫々と迫り、後場の物狂おしい彷徨に利く。

「空籠」 臆病を承知で日暮に便へ出す主・礼之助も人が悪いが、拒めば活字に関わりと太刀を借りて出掛ける太郎冠者・祐一も

「遊行柳」 遊行上人、西行ゆかりの老柳を看過し、古き老に案内されて念仏を上げれば、喜ぶ古老は後シテに柳ノ精と変じ、クセ舞に柳にまつる故事を、見せて上人を慰め、報謝を序ノ舞に表して消える。

「遊行柳」 遊行上人、西行ゆかりの老柳を看過し、古き老に案内されて念仏を上げれば、喜ぶ古老は後シテに柳ノ精と変じ、クセ舞に柳にまつる故事を、見せて上人を慰め、報謝を序ノ舞に表して消える。

「遊行柳」 遊行上人、西行ゆかりの老柳を看過し、古き老に案内されて念仏を上げれば、喜ぶ古老は後シテに柳ノ精と変じ、クセ舞に柳にまつる故事を、見せて上人を慰め、報謝を序ノ舞に表して消える。



# 観世流・金剛流 宗家本発行元 檜書店

〒101-0052 東京都千代田区神田小川町2-1  
電話 03(3291)2488 振替00130-7-3552  
〒604-0935 京都市中京区二条通慈屋町東入  
電話 075(231)1990 振替 01010-0-113

# 能 楽 の 友

## 発行能楽の友社

名古屋市千種区千種2丁目18-18  
(郵便番号 464-0858)  
電話 (052) 731-7 9 8 4  
FAX (052) 733-2 8 3 7  
振替口座 00800-6-36393  
購読料 1年 1 1 0 0 円  
郵送の場合 1年 1 8 0 0 円  
— 部 1 0 0 円

### 演能カレンダー

#### ◆名古屋能楽堂◆

- [6月]
  - 20日(日) 名古屋宝生会定式能(有料)
  - 27日(日) 也留舞会・信誼会合同発表会(無料)
- [7月]
  - 3日(出) 能楽「鏡座」公演(有料) (番組①面)
  - 10日(出) 久田勘鷗の会公演(有料) (番組①面)
  - 11日(日) 第41回朝日狂言公演(有料) (番組②面)
  - 16日(出) 名古屋能楽堂定例公演(有料) (番組②面)
  - 18日(日) 名古屋親世会・夏の素謡会(有料) (番組③面)
  - 21日(出) 花伝の会特別公演 パートI(有料) (番組③面)
  - 31日(出) 能楽同好会(無料)

#### ◆熱田神宮能楽殿◆

- [6月]
  - 27日(日) 親生会(無料)

平成十年春から毎月行われていた「名古屋能楽堂定例公演」は、能楽普及事業実行委員会主催、能楽協会名古屋支部の協賛により、能楽の普及に大きな役割を果たしている。さる三月には親世流宗家・親世清和師が来演、能「隅田川」の上演で定例公演の声価を高めたが、さらには七月十六日(日)の公演は、定例公演二十回記念特別公演として、金剛流宗家・金剛永禪師の来演により、能「道成寺」が上演される。

公演はシテ金剛永禪、ワキ高安勝久、金剛流の広田隆一、豊嶋三千春、今井清隆、宇高通成、種田

## 名古屋能楽堂定例公演 能「道成寺」上演 7月16日 金剛宗家が来演

川祭り(尾張津島天王祭)と知られて津島の夏の風物詩として知られるようになった「天王薪能」が今夏八月八日(日)津島市文化会館ホールで催される。

## 第16回 天王薪能 能「黒塚」狂言2番 8月8日 津島市文化会館

津島薪能は昨年第十五回記念公演として大曲「安宅」が上演されたが、今回第十六回を迎え、金春流・金春安明師ら一門の来演により能「黒塚」(シテ本田光洋師)が上演される。

「黒塚」の上演について、次のように解説されている。

津島には一五二二(大永二)年以来、能人形が津島川祭の能置物になるという記録が残っており、これが現在も受け継がれている。毎年六月の半ばには、各車の乗方衆によって今も人形づくりが行われる。その人形は、先車には必ず「高砂」であるが、二番車は能の二番目物より、三番車は能の三番目物より、毎年違ふことにな

### ろくそく能

7月15・16日  
大規模能楽堂自主公演能  
財団法人大規模能楽堂の自主公演能「ろくそく能」は、今回は「鬼の世界」をテーマに、七月十五日(木)七月十六日(金)の二日間催される。午後六時三十分開演。入場料当日四三〇〇円。

お話し「鬼の伝説」馬場あき子  
お話し「伯母ケ酒」(茂山忠三郎)  
能「黒塚」白頭(シテ栗谷菊生、ワキ福王茂十郎)  
七月十六日(金)  
お話し「鬼の伝説」馬場あき子  
お話し「神鳴」(茂山忠三郎)  
能「山姥」長杖之伝(シテ片山九郎右衛門、ワキ宝生欣哉)

## 能楽「鏡座」第3回公演

七月三日(土) 午後一時三十分始

名古屋能楽堂

- 狂言 鐘の音  
舞臺子 絵馬 林 豊彦  
片山 清司  
後藤嘉津幸 大野 光範  
河村真之介 前川 誠  
河村 和晃 上田 大介  
河村 浩行 浦田 保親  
松野 清道 浦田 保親
- 能 敦盛  
殿田 謙吉  
野村小三郎  
後藤嘉津幸 大野 誠
- 附 祝言  
後見 杉浦 豊彦  
林 喜一郎 地謡  
上野 嘉宏 河村 保親  
大江 信行 片山 清道  
大介 味方 清司

### 故・本多静雄氏をしのぶ催し

豊田市長 本多静雄氏  
地域文化の発展と創作狂言など狂言の大衆化に大きな貢献をされた本多静雄氏は、豊田市長市民として去る五月六日、百一歳で逝去されたが、豊田市では「豊田市長市民」本多静雄氏を偲ぶ狂言の会として六月二十四日、豊田市能楽堂で、本多氏の台本による「菊石」「霧ぐれ」の二つの創作狂言を上演、国会議員、県、市議、行政委員、各種団体長、地元コミュニティ、報道機関を招き故人をしのぶ。

事務局 名古屋千種区仲田1-11-16  
野村事務所 野村 誠  
電話 052-751-9966

## 第12回

### 久田勘鷗の会

七月十日(土) 午後一時開演  
名古屋能楽堂

- 一 調  
橋弁慶 久田勘鷗  
久田舜一郎
- 狂言  
鶴亀 久田勘吉郎  
遊行柳きり 橋岡 慈親  
山姥きり 浦田 保利
- 能  
久田勘鷗 谷田宗二郎 河村 舜一郎  
藤 藤田六郎兵衛

磁石 階村又三郎 野村小三郎  
松田 高義

天鼓 久田三津子 河村 大 鬼頭 喜太郎  
久田舜一郎 藤田六郎兵衛

舞臺子 玉木 孝男  
藤谷 音彌 久田 勘鷗  
松山 幸親

入場料 一般(前売)五、〇〇〇円(当日)五、五〇〇円  
学生(前売・当日とも)二、五〇〇円

取扱い: チケットぴあ、チケットセゾン、市内各プレイガイド  
取扱い・問い合わせ: 久田勘鷗 (TEL 052-705-1585)

# 主月雅日記

(192)

## 伯母捨

えと文 二井 栄逸

親月の名所として名高い伯母捨山は、長野県善光寺の南部にある海抜一、三〇〇メートル位の山で、能においては最高の秘曲、伯母捨（娘捨とも）の遺跡がある山である。

山頂からは、東に四阿山、浅間山、北面には戸隠山や飯綱山などをながめることが出来、月明の夜には、はるか山下を流れる千曲の清流が輝くように、うつくしく見えるという。

伯母捨山の北の斜面には棚田があり、水田の一つ一つがうづらむ月や、江戸の奴らが何知って信濃の俳人、一茶が自慢した話も有名である。世阿彌は、伯母捨を、大和物語に想を得て作った。

## 7月から毎週「観能の夕べ」土曜日公演

### いしかわの能楽鑑賞事業

田秋雄 能「花月」(佐々木英一)

7月10日 狂言「鬼瓦」(野村英丘) 能「藤戸」(渡辺啓之助)

7月17日 狂言「昆布売」(小崎正信) 能「吉野静」(数俊彦)

7月24日 (特別公演) 狂言「神山伏」(炭哲男) 能「杜若」(沢辺之舞) (宝生英照)

7月31日 狂言「長光」(増田秋雄) 能「竹生鳥」(寺田成秀)

8月7日 狂言「伯母ヶ酒」(炭哲男) 能「清経」(千原修)

8月14日 狂言「鎌腹」(野村英丘) 能「鶴岡」(玉川博)



昔、信濃の国、更科に、幼少の頃、両親を失い、伯母に育てられた男が、年頃になって嫁を求めた。其の嫁は、伯母の老いたるを好まず、男に伯母を山に捨てようとする。男は困り果てた。月、月の明る秋の夜、伯母をたばかて人の居るべくもあらぬ、高山に捨て家に帰った。然し、夜もすがら眠られず、わが心、なぐさめかねつ、更科や、おぼすてやまに、照る月を見て、と詠み、再び伯母を連れもどったとの事である。

大和物語に記されたものは、老女の痛ましい境遇であるが、世阿彌はそのことを、重きにおかず、月光の中に大自然の幽遠な情感をえがき、清逸高雅な山上の月そのものが、白衣の女人に人格化する。ことに主力をそそいだ。夢想的な月光曲で、娘捨の伝説は背景となつてに過ぎない。

山下に千曲の悠遠の流れ、天上に皓々と照る月光、其の中に白長絹の清純高遠な老女、それだけでよい。

小鼓は気味悪いほど、しっとりとし山の地肌をおおせ、大鼓の力一ぱい、カーンと夕闇迫る山の気配にしみこんでゆく。

深みのある謡声に、笛の音がすみ通るように流れ、各々が交りあつて伯母捨の山容を形づくつてゆく。

私は前から伯母捨を絵にしたいと思ひながら、まだ思うようには出来ない。来年の展覧会までには是非完成したいと思つている。

## 伊勢の伝統の能楽まつり

7月24日 いせトピアで

四百五十年の伝統を誇る一色能、通り能、馬瀬狂言は昨年六月、大同団結して「伊勢の伝統の能楽を継承する会」を結成した。今年、今年第二回目を迎えるので、昨年開催し好評を博した「伊勢の伝統の能楽まつり」を今年七月二十四日(土)に、いせトピアで、第二回目を開催する。

この継承会は、伊勢の伝統である「能、狂言」の今後の発展を祈念するものであり、能楽を通じて、地域の文化の振興と活性化に役立てるはもろんであるが、お互いが親睦と交流をはかり、保存継承に前進を続けるものであり、継承会のひたむきな姿勢が市民の間に、親しみと愛情でもって迎えられる、順調に推移している。

継承会は、さらなる将来の発展のために、今年度から会長は一色能、通り能、馬瀬狂言が一年交替で勤めることになり、新会長には馬瀬狂言保存会会長・中林慶三氏が選任された。

七月に開催される能組は、能「田村」「熊坂」の二番、狂言は「雷」「鬼清水」「朝日奈」の三番、仕舞は「松風」など九番。

開演は午後一時、終了予定午後四時半。入場無料。

お問い合わせは、事務局0596-22-1720

(継承会事務局長・土屋喜八郎氏より通信)

## 第41回 朝日狂言会

名古屋狂言共同社・平成10年度  
愛知県芸術文化選奨文化賞  
(団体賞) 受賞記念公演

七月十一日(日) 午後一時三十分開演  
名古屋能楽堂

狂言	高砂八段の舞	狂言	鍋八撥	狂言	賽の目	狂言	鐘の音	狂言	弓矢太郎
高砂	高砂	高砂	高砂	高砂	高砂	高砂	高砂	高砂	高砂
高砂	高砂	高砂	高砂	高砂	高砂	高砂	高砂	高砂	高砂

## 名古屋能楽堂定例公演

七月十六日(金) 午後六時三十分始  
名古屋能楽堂

道成寺

金剛水鏡 飯富 雅介  
高安 勝久  
古式 杉江 元

河村真之介 鬼頭 喜太郎  
柳原富司忠 藤田六郎兵衛

## 平成11年6月～8月放送予定

●NHK・FM能楽鑑賞(日曜日午前8時～9時)

(6月)

20日(日) 「天鼓」「是界」(喜多流) 塩津哲生ほか

27日(日) 「女郎花」(親世流) 大江将董ほか

(7月)

4日(日) 「自然居士」「蟬丸」(親世流) 津村礼次郎ほか

11日(日) 「三井寺」(宝生流) 三川泉ほか

18日(日) 「班女」「天鼓」(金春流) 高橋汎ほか

25日(日) 「歌占」(金剛流) 種田道雄ほか

(8月)

1日(日) 名演ふたたび: 粟谷新太郎を偲んで「田村」「高砂」

8日(日) 名演ふたたび: 14世喜多平太ほか「羽衣」ほか

15日(日) 名演ふたたび: 野口兼資ほか「松風」ほか

●NHK教育テレビ

7月11日(日) 15時～16時15分  
能「卒都婆小町」(親世流) 親世栄夫、室生閑ほか

平成十一年二月十三日金剛能楽...

今日「道成寺」一曲のみといわ...

近世になって、金剛右京の記録...

『住吉詣・蘭拍子』『横笛』

乱拍子について

村瀬 和子

(文中敬称略)

ました。昭和十二年、同三十一年...

金剛流の『住吉詣・蘭拍子』(乱...

え役者であった徳田勝忠の「隣忠...

今頃はシテ源氏・金剛水鏡、ツ...

「横笛」については、「親世」...

が志を抱きながら果たせません...

「横笛」については、「親世」...

「住吉詣・蘭拍子」は弟子家に...

詞章は、原本に基づき、ワカの...

見終えて、シテが排長袴で眼目...

「住吉詣」の乱拍子が描かれて...

「住吉詣」の乱拍子が描かれて...

「住吉詣・蘭拍子」が、二〇〇一...

夏の素謡会

七月十八日(日)午後一時開演

花月 仕舞 久田三津子

弱法師

片山慶次郎 武田邦弘

道明寺 仕舞 小島一英

三井寺 中辻耕太郎 親世 清和

道成寺

梅若 六郎 梅田邦久

松風 加賀 敏彦 高島良一

附祝言 主催 名古屋観世会

入場料 前売券四、五〇〇円、当日券五、〇〇〇円

藤田流三百七十年

藤田六郎兵衛四十年記念

花傳の会特別公演

七月二十一日(水)

対談 「新作能 鷹姫誕生秘話」

お話し 藤田六郎兵衛

原作 W・B・イエーツ

鷹姫

老人 親世 睦夫

新作能 鷹姫 空賦麟 福王 和幸

後見 上野 雄三

獅子

赤獅子 赤松 植英

大鼓 河村真之介

問い合わせ・お申込み(FAQ)24時間受付



第16回 天王薪能

八月八日(日) 午後三時開演
津島市文化会館大ホール

【第一部】(午後三時)
地元同好会・学生能
(愛知大学、中京大学、南山大学等)

【第二部】(午後五時二十分)
「高砂」を謡おう会(観衆全員)

【第三部】(午後五時三十分)
解説 名古屋女子大学教授

林 和利氏

大蔵流狂言 濯ぎ川 男 茂山 千作 女 茂山七五三 茂山千五郎

金春流狂言 熊坂 金春 安明

和泉流狂言 蚊相撲 大名 井上 祐一 太郎冠者 井上 靖浩 蚊の精 佐藤 友彦

金春流能 黒塚 飯田 雅介 寛 敏一 鬼頭喜太郎 橋本 幸 後藤孝一郎 鹿取 希世

後見 横間 金記 地謡 林 英昭 加藤 英昭 小島 芳功 吉場 廣明 横山 紳一 鬼頭 尚久 金春 安明 前田 登 高橋 忍 佐久間 祥夫 (終演八時半頃)

附祝言

鑑賞券 三千円、学生二千円
問い合わせ 津島市観光協会(TEL0567・2812800)

夏休み 親子能楽教室
名古屋能楽堂で 8月2・3日開講

名古屋市、名古屋城振興協会、名古屋市中区三の丸一丁目1-1 名古屋能楽堂(夏休み親子能楽教室)が催され、多数の申込み

で話題となっているが、ことしは八月二日(月)、八月三日(火)の二日間、夏休みに「羽衣」を能舞台で舞いませんか、と呼びかけ親子能楽教室への参加を募集している。締切りは七月二日(金)「能楽教室」のスケジュール、参加要件は次のとおり。
講師 能楽協会名古屋支部長・泉嘉夫師(シテ方観世流)ほか。
スケジュール
八月二日(月) 10時~11時お話し、能、仕舞、謡についてマ11時~12時ビデオ鑑賞マ13時~14時30分仕舞、謡の体験と実演
八月三日(火) 10時~12時仕舞、謡の練習マ13時~14時30分仕舞、謡の発表会
参加要件 必ず親子一組で申し込むこと(小学四年生から中学生までの方と保護者)

募集定員 親子三十組、六十人(定員を超えた場合は抽選)
参加費 親子一組千五百円(追加の場合子供一人五百円、親一人千円増し)
申込み方法 往復はがきに、住所、氏名、年齢、性別、学校名、学年、自宅電話番号を記入のうえ左記に申し込む。

晩春から初夏の舞台

【第廿回・鳳の会】と【第十八回】
名古屋能楽堂定例公演 【九阜会】 【第四十二回・やるまい会】
竹尾邦太郎

「花争」 アド主・友彦、正先の物々しい名宣は「花見」を言い出すにも何やら勿体振れば、シテ太郎冠者・靖雄は「はな」なら私の「鼻」を、と軽口だてに茶化す。これが口火で「花見」か「桜見」かの言葉争いは古歌の引証に及んで双方譲らぬところ、太郎冠者の賢(さか)しらは語まで持ち出し自縄自縛、靖雄に軽妙さがほしが「一所懸命を買った。友彦は舌鋒に元気がなかったが……。(13分)
「花子」 能「班女」の後日譚という。シテ何某・祐一、土烏帽子・襟浅黄・黄地入り菱文縫着付・花色地襷散シ文素袍袴・小刀。珠更に静かな出は深く期するところあるを思わせ、正先の名宣が深刻なれば、「きつと分別を致してござる」と女の許へ忍んで行く決意は堅く、その口吻が超真面目なだけにじわりと可笑しい。
しかし、他出の許しは廻国行脚を口実の十二・三年の要求も、怖妻・靖雄の深情的なまじさにストンと落とされ持立室でのただの一夜、しかも「女がひとをたばかるは男に勝る」とあっては太郎冠者は融を座禅の身替わりに立てる慎重である。この苦心憐憫あつての東の間の解放感の喜びは、嬉しさを文字通り噛み締める様な、「花子が方へ、ま・い・ら・う」の、中人の浮揚する気分が上々である。
後場は、土烏帽子を脱ぎ、襟浅

酷刑に及べば庭内には一人の約束も大勢押し掛けられて、後は花の下の大宴である。酒に卑しい酔余のシテと立衆それぞれの、小舞謡がよくこなれて好アンサンブルは、止狂言にふさわしい華やきの賑やかさ。客が帰るとあつて大事の花も土産にと、二人には自ら手折り、以下もてんでに手折らせて持たず狼藉もいっそ無邪気、酒無くて何の己が桜かな、であるが、帰宅した住持の「ウワー」の驚愕は正に面龍点晴だった。(46分)
【長光】 半持・布羽織に三尺帯を締め、ホクソ頭巾をかぶる一癖ありげな風体のシテすっぽり、預かり物の太刀を上方へ届ける坂東の田舎者・靖雄からその太刀を巻き上げんと執拗にまつわりつき、遂に自身の腰に太刀の下げ緒を括りつけて所有権を声高に主張する。その陽気な積極性に厭味もなく、困却する若い田舎者の質朴な柄に、適う。目代・友彦が仲裁に入り、安堵の田舎者、太刀の造りの詳細を述べた聊か得意然としたところからすっぽり盗聴を察して太刀の長さは耳やうすを言り、靖雄好調。「早やうすを言え」と太刀の長さを問われてしどろしどろのすっぱは盗人に極まる。布羽織を剥きさらば下には盗品の数々、装束付の妙である。
因みに「長光」は鎌倉中期、備前長船長光の鍛刀、「名物大般若長光」は国宝として現存する。(22分)
【熊野・村雨留・墨次ノ伝・膝行留】 病母の、帰省を促す文に心痛めるシテ熊野・邦久、文ノ段は一度きつと文を眺め渡して読み出し、へた返すがえすも命の内にも、でも視線を再び右へ戻し読み進む。微かに震える文の、哀しき、涙ながら書き留む、で文を掲げるのは涙顔を隠すため、暇を乞うこと再度に亘るも花見優先と強引なワキ宗盛・勝久の、個性がびりりとする。床几を立つワキにキッと見下ろされ、しおしお立ち上がるシテの、へ心は先に行きかぬる、心は、花見車に入ると堆りかねた様に、へ東路ととも、と左手で柱に掴まり左へ遠く眺める、と、込みあげる思いにへ其方の懐

かしや、と退りシオルと切な。以下の車中は病母への心配を紛らすように通り過ぎる町筋を右左に見るが、沈んだ心には少し煩い感じもする。
車を降り、清水寺で下居合草のころからは、時に弱気にはなつても胸を固めた健気な印象である。上ヶ端まえに立つと舞ヶせからへ深き情を、と常座で涙み、へ人を知る、とワキへ酌に立つが、舞を所望され、へ深き情を人を知る、とシオリ隠し二ノ松へ逃げる、と、気を取り直して離子の急調に戻り舞になるところ、哀しみを振り切る意志すらみせる。「村雨留」は、舞半ば一ノ松で面使に雨脚を見せ、へなうなう、と慌てて戻る。舞半ばに深き情を人を知る、とシオリ隠し二ノ松へ逃げる、と、気を取り直して離子の急調に戻り舞になるところ、哀しみを振り切る意志すらみせる。
「地蔵舞」 宿を借りられなければ笠を置かせてくれと頼み、その地上権を楯に居座るシテ僧・友彦。面白い御仁ゆえに大法を破り宿を貸すという宿主・融が寝酒を勧めれば、飲まずに吸う分には大事あるまじき僧の口実。融通無礙の機知は、吸えば着に地蔵舞の酔狂、謡留に両者の遊び心もほんわか酒脱な味。(29分)
【海士・寛】 シテ喜正、前は深井・襟浅黄・白摺箔(金撫子文)着付・濃紫縫着腰巻・浅黄水衣。玉ノ段は、海漫々、と伸びやかに大きく分け、龍宮に飛び入る所はスミに高く飛び、乳の下掻き切る型はスパッと鮮やか、若さか如何にも躍動するが中人に波の底へ沈む所は小さく廻るだけで沈まぬ。後は緋大口に紫の舞衣、早舞の中で幕際まで行くと暫くツロギ、三鼓の流シで戻り舞に続けたところ雀躍の趣、爽快だった。(1時間27分・5月15日・九阜会)

「入間川」 逆言葉で興がり、褒美に着衣や太刀を入間川何某に与えるシテ大名、いざ取り戻そうとしても頭腦の回線は直ぐには機能せず焦ることになる。身勝手な大名を小三郎、土壇場になって賺(すか)され切齒扼腕の何某を高く、コンビが活き活きとみせる。
太郎冠者は隆行。(26分)
【蟬】 上松は中山道の宿場、狂言次第の蟬子(学・富司忠・敏一)で出た旅僧・万作が松立木の短冊を見始め、所ノ者・札之助に尋ねると、鳥に指め付けられて空しくなった蟬を思ふものと分かり、跡を辿っていると、シテ蟬ノ亡霊・又三郎(黒頭・面喰吹・襟焦茶・小格子着付・腰帯・白水衣・杖)が狂言一声で現われて最期を語り、旅僧に剃髪されてつくつく法師になる、という能がかり。
眼目は地(小三郎・高義ら)が謡いシテが舞う最期の件、何と蟬の羽置く露と消えにけり、と左袖を右手で取り上げて見ると退つて下居のところは「杜若」の蟬の唐衣、に似、へ数々の冥土の有様、と立つてスミへ行き、へ剣の枝と変じて、と杖を首の後ろに当てて反り返るのは「藤戸」のへそのまま海に押し入れられて、に似るなど面白い。キリには旅僧が刺刀を当てる態に黒頭を脱がせ、僧体に仕立てるまでの、万作の手際も鮮やかに、俳味の感じられる舞狂言だった。(24分)
【文蔵】 いつも何なりと珍しい物を振舞う東福寺の伯父が太郎冠者・小三郎には何を出したか、病的な程に気懸かりの主・万作、「忘れました」と元氣よく言われれば徹底追求の意地、石橋山の合戦譚にそれがあつたと聞けば語らねばならない。結局長々と語られて、「主によい骨を折らせ居つた、退り居れ」のトメは此實の中に安堵の気分。何だ温精粥だったのかの安心で、万作この辺りの機微を捉えて巧妙。(29分)
【お茶の水】 日暮れて女に茶を点てる水汲みを頼むのは、とためらう住持・正雄、新発意・七五三に申し付ければ断られて己むなくイチヤ正雄を遣るが、新発意の魂胆は二人で会うための遠謀。小歌「地主の桜」を謡いながら水を汲むイチヤの処に飛び出して咄められはしたが、そこはそれ若い男女のこと、思いを語り交わす小歌に托して恋の連吟に及ぶが、イチヤの謡い様が少々生硬で新発意も気が乗ってこない悔み無きにもあらず。キリは帰りが遅いことやつて来た住持に、「散々に戯れて居る」と見つかり、取っ組み合いの末に二人は住持を倒して入るが、今の若い者は、と嘘かばばかりの住持の存在感が一曲を締める。(22分・5月16日・第42回やるまい会)



# 観世流・金剛流 宗家本発元 檜書店

〒101-0052 東京都千代田区神田小川町2-1  
電話 03(3291) 2488 振替00130-7-3552  
〒604-0935 京都市中京区二条通麩屋町東入  
電話 075(231) 1990 振替01010-0-113

# 能 楽 の 友

発行能楽の友社

名古屋市中千種区千種2丁目18-18  
(郵便番号 464-0858)  
電話 (052) 731-7 9 8 4  
F A X (052) 733-2 8 3 7  
振替口座 00800-6-36393

購読料 1年 1 1 0 0 円  
郵送の場合 1年 1 8 0 0 円  
— 部 1 0 0 円

## 演能カレンダー

### ◆名古屋能楽堂◆

- (7月)
- 18日(日) 名古屋観世会・夏の楽謡会(有料)
  - 21日(水) 花伝の会特別講演・パートI(有料)
  - 31日(金) 能楽同好会(無料)
- (8月)
- 7日(土) 第7回能楽後継者育成研発表会(無料)
  - 8日(日) 青陽会定式能(有料)(番組②面)
  - 14日(土) 花伝の会(秘曲の会)(有料)(2面参照)  
名城夏祭協賛
  - 15日(日) 花伝の会特別講演(若き能楽師を招く)(有料)(2面参照)  
「能の公演とディスカッション」
  - 22日(日) 野村四郎名古屋公演(有料)(番組③面)
  - 28日(土) 衣斐正宜後援会能(有料)(番組③面)

### ◆熱田神宮能楽殿◆

- (8月)
- 7日(土) 第34回名古屋新能(有料)  
= 熱田神宮神楽殿前 (番組①面)
- (9月)
- 11日(土) 中日文化センター芸能発表会(無料)
  - 25日(土) 名古屋異会(無料)

「名古屋新能」はこし第三十四回をむかえ、きたる八月七日(土)熱田神宮境内・神楽殿前の特設舞台で催される。午後五時開場、午後五時三十分開演。

演能は、金剛流、喜多流、金春流による仕舞。

宝生流能「高砂」(シテ佐藤耕司、ツレ和久壯太郎)

## 第34回 名古屋新能

能3番、狂言1番上演

8月7日 熱田神宮で

観世流半能「班女」(シテ久田勘助)

和泉流狂言「昆布売」(松田高義)

親世流能「国栖」(シテ泉嘉夫、ツレ須部市、今沢美和、子方久、久田勘助)

火入式は、熱田神宮・宮田理博欄宜が執り行い、松原武久名古屋市長の挨拶が予定されている。

## 名古屋城まつり

8月3日~15日 新能上演

能楽協会名古屋支部協力

「真夏の夜のファンタジー」として恒例となった「名古屋城夏まつり」は、きたる八月三日(火)から十五日(日)まで開催され、ことしはとくに、名古屋城天守閣が再建されて四十周年を迎え、その記念事業も企画されている。

この名古屋城夏まつりのメインイベントの一つである「新能」は毎年きわめて話題をよび、きわめて好評で、会期の十三日間、毎日午後七時から特設会場で上演される。演目および主な出演者は次のとおり。

八日(日)「胡蝶」(今沢美和)

九日(月)「班女」(祖父江修一)

十日(火)清経替之型(高橋隆一)

十一日(水)「巻箱」(前野郁子)

十二日(木)「杜若」(清沢一政)

十三日(金)「羽衣」和合之舞(久田三津子)

十四日(土)「天鼓」弄鼓之舞(梅田邦久)

十五日(日)「安達原」黒頭(久田勘助)

入場料：前売八百円、当日九百円、小・中学生前売二百円、当日三百円、市内プレイガイド、チケットぴあ、チケットセゾンなど。

なお夏まつりに協賛して、名古屋能楽堂特別公演が八月十四日、十五日の二日間、名古屋能楽堂で催される。(番組②面演能案内参照)

## 能楽後継者育成 成研発表会

主催・能楽協会名古屋支部、後援・名古屋市長、熱田神宮。(番組①掲載)

能楽協会名古屋支部主催による能楽後継者育成成研発表会はきたる八月七日(土)名古屋能楽堂で催される。今回は第七回発表会で午前九時半始。

金春流「是界」(シテ鬼頭尚久、舞囃子、居囃子、狂言小舞など十二番)

## 第34回 名古屋新能

八月七日(土) 午後五時三十分始

熱田神宮神楽殿前

### 番組

金剛流仕舞 春日籠神

羽多野良子

地謡

伊藤雅子

喜多流仕舞 花 月より長田 曉

地謡

和谷市勝

小出甚吉

金春流仕舞 鶺鴒之段

前田 茂穂

地謡

佐久間祥夫

宝生流能 高砂

和久壯太郎 掛司 相元 正樹 柳原富司忠 大野 好信

間 飯富 雅介

井上 靖浩

火入式 熱田神宮欄宜 宮田 理博

御挨拶 名古屋市長 松原 武久

観世流半能 班女

久田 勘助 杉江 元 寛 鉦一

後見 三村 恵子 地謡 星野 路子

後見 前野 郁子 地謡 高島 圭一 加藤 保彦

和泉流狂言 昆布売

松田 高義 佐藤 融

後見 井上禮之助

観世流能 国栖

飯富 雅介 河村真之介 助川 龍夫

橋本 正樹 後藤嘉津幸 藤田六郎兵衛

問 大野 弘之 今枝 靖雄

後見 中川 雅章 地謡 黒田 孝博 近藤 幸江

後見 久田三津子 地謡 八神 孝光 祖父江 修一

本田 勲 清沢 一政

当日券：三千円(前売券二千五百円)

取扱い：チケットぴあ、チケットセゾン、市内各プレイガイド、能楽殿、出演各楽師宅

※雨天順延の問い合わせは熱田神宮能楽殿 電(〇五二一六八二一七五)

主催 能楽協会名古屋支部

後援 名古屋市長・熱田神宮

## 能楽研究の成果を集成した 戦後初の総合講座

戦後急速に進化した能楽研究の成果を、その中枢を担ってきた先生方の協力を得て集大成し、能楽全般にわたる基礎知識を提供する総合講座。能楽史の解明や台本研究の最新の成果を示すと共に、現代に生きる芸能として、演劇・音楽等の面からもその本質に迫る。鑑賞案内や図解にも工夫をこらした、これまでにない形のものである。七年ぶりに第三次の募集を行う。

## 岩波講座 全七巻・別巻

# 能 楽 狂 言

横道萬里雄・小山弘志・表 章編

## 能楽の歴史

表 章 天野文雄

近年の研究成果をふまえ、演劇としての発展過程を重視する新しい視座から能楽の歴史を解明。能楽の歩みを鳥瞰する能楽史概説のほか、演出・所要時間の変遷、地方諸藩の能楽、各流派の消長等について簡明に記述。

- Ⅰ 能楽の伝書と芸論(8月2日刊)
- Ⅱ 能楽の作者と作品
- Ⅲ 能の構造と技法
- Ⅳ 狂言の世界
- Ⅴ 能鑑賞案内
- Ⅵ 狂言鑑賞案内
- Ⅶ 狂言鑑賞案内
- Ⅷ 別巻 能楽図説

## 第3次 予約募集(締切) 9月25日

本講座は、全巻予約申し込みされた方にお届けいたします。

東京都千代田区一ツ橋二五二五  
PTEL/WWW.IWANAMI.CO.JP  
岩波書店

# 五月雅日記

(193)

## 能面

えと文 二井 栄逸

能面をかけることによって、能の演者は個性が否定されてしまうようであるが、それは没個性ではなく、実は、真の個性が発揮されることになる。

能面は、名手にかげられることが、唯一一つの生きる道なのであるから。

観阿弥、世阿弥は、きびしい手くばりや、人間の顔をも否定する能を作ったが、それによって反対に最も自由な境地を開いた演出家であり、演劇人であったのである。

名手と面とが、心理的に戦い、面が息づく時、始めて能面の真価が発揮される。

ぎゆうぎゆうと様式化され、しめつけられた中に、演者の個性は、反対に自由にのびのびとしたひろがりを持つてあまかけるのである。

シテは、鏡の間で、面を拝する時、すでに変心する。面は、シテの魂を吸い込み、生々とよみがえる。

能というものは、面と、すぐれた演者が一つになった時、不思議な力を出すものである。能面は、美術館のガラスの中に眠らせるの

にぶつつけて曲中の人物になり、魂の披露を始めるのである。さて、能の夜明けは応安七年、西暦でいうと一三七四年の時代にさかのぼる。

### 青陽会定式能 (第43期) (第3回)

八月八日(日) 十時半開演 名古屋能楽堂

仕舞 融 丸 星野 路子  
 加賀 敏彦 生駒 里翠  
 能 清 経 橋本 幸 河崎 勲 鹿取 希世  
 加賀 敏彦 橋本 幸 河崎 勲 鹿取 希世

仕舞 芭 盛 須部 甫  
 大江山 武田 邦弘 玉木 孝男

能 楊貴妃 杉江 元 河村真之介 竹市 学  
 間 井上 祐一 柳原富司忠

狂言 酢 薑 井上礼之助 大野 弘之 後見 佐藤 融

能 殺生石 三村 恵子 高安 勝久 河村 大 鬼頭 好信  
 河村 大 鬼頭 好信 後藤 嘉津幸 大野 誠

前売券二千円、当日券三千円、主催 青陽会  
 取り扱い チケットピア・チケットセン 各出演者宅

創造と実力をたくわえた観阿弥、世阿弥が自分の芸を都びとの前で披露し、みとめられるか、否かを賭けた御前能に、青年将校、足利義満は、始めて見る能の品格に打たれ、進んで保護育成することを心にきめたのが能の夜明けであった。

古事記、万葉、源氏物語と、文学の世界が完成した日本文化の中で、未完成の分野として残っていた、演劇の地層の上に、能は中世に生まれ、進んで世界的水準に達したのであった。



### 花伝の会お盆特別公演

初日 八月十四日(土) 午後一時半始

### 太鼓 観世流・金春流秘曲の会

一曲調 観世流 観世元伯・小寺佐七  
 二曲調 金春流 金春国和・前川光長  
 三曲調 金剛永謙・観世栄夫  
 出 演 梅田邦久・大槻文蔵  
 山本博通 山本博通  
 小鼓 大倉源次郎、ほか

若き能楽グループを招く  
 一日 八月十五日(日) 午後一時半始

### 能公演とディスプレイ

曲目 高砂 井筒 土蜘蛛 大鼓一調 大槻文蔵ほか  
 コーディネーター 藤田六郎兵衛  
 出 演 清水晴祐、成田達志、山本哲也、守家由調、中田弘美  
 ◎問い合わせ・お申込み 藤田六郎兵衛事務所(052・571・6341)

暑中御見舞  
 申し上げます

観世清和

社団法人 鏡仙会

観世鍊之亟

観世栄夫

観世暁夫

幽謳会

片山九郎右衛門

梅猶会  
 猶諷会  
 大阪国際フェスティバル能  
 梅若盛義

大垣浦声会

稽古場 大垣市伝馬町大垣別院  
 電話(0584)733362  
 浦田保利  
 浦田保浩  
 浦田保親  
 〒606-0811 京都市左京区下鴨芝本町五八  
 電話(075)781-1703

名古屋観衛会  
 山本勝一  
 名古屋正花会  
 山本博通  
 〒540-0025 大阪府中央区徳井町一丁目三十一番  
 電話(06)6944-1407・070番

大槻清韻会

大槻文蔵

鳳鳴会  
 武田志房

幽花会

片山慶次郎  
 仲吾

名古屋観世九阜会  
 観世喜喜之  
 観世喜正

加藤保彦  
 高木美智子  
 高山一

外山圭

野村四郎

大西智久

礼久

邦謡会

梅田邦久  
 清沢一政  
 須部南  
 本島良一  
 高島良一  
 今沢美和

壺泉会  
 泉嘉夫

春鶯会  
 梅若善高

初陽会  
 武田宗和

稽古場 名古屋市中千種区今池四丁目  
 電話(052)733362  
 浅井ビル  
 電話(052)733362

名古屋修諷会

梅若修一

第16回 野村四郎名古屋公演

八月二十一日(日)午後一時開演  
名古屋能楽堂

解説 堂本 正樹

能 千手

重衡 大槻 文蔵  
千手 野村 四郎

宝生 欣哉 河村真之介 大野 誠  
後藤嘉津幸

狂言 鐘の音

高濱虚子原作 野村 四郎

野村三郎 野村三三郎 野村三三郎

新作能 実朝

後見 武富 康之  
赤松 植英 地謡

吉井 基晴 齊藤 信隆  
山本 章弘 上野 朝義  
山本 博通 浅井 文義  
上野 雄三 鶴澤 郁雄  
(終演四時二十分頃)

S席(指定席)一万円。A席(自由席)八千円  
学生券(地震自由席)四千円  
取り扱い:チケットぴあ、市内プレイガイド  
問い合わせ:中部日本放送事業部 (052・241・8118)

第15回 衣斐正宜後援会能

八月二十八日(土)十二時三十分始  
名古屋能楽堂

ごあいさつ 後援会会長 神津 善行  
作曲家 神津 善行

翁

三番茂 野村 萬齋  
千歳 和久庄太郎

久野 幸三 亀井 保雄  
久野 近藤乾之助  
山内 崇生 寺井 良雄  
佐野 登 東川 光夫

高砂

佐野 萌

河村真之介 藤田 龍夫  
柳原富司忠 藤田 六郎兵衛

末広がり

野村 万作

石田 幸雄 後見 竹内 悠樹  
深田 幸三郎 一噌 庸二  
福井啓次郎

熊野

近藤乾之助

亀井 広忠 藤田 龍夫  
福井啓次郎

小鍛冶

飯富 雅介  
飯富 元

河村総一郎 助川 龍夫  
柳原富司忠 藤田 六郎兵衛  
久野 幸三 前田 晴啓  
稲川 寿一 佐野 朝  
小倉伸二 亀井 保雄  
山内 崇生 東川 光夫

附 祝 言

主 催 衣斐正宜後援会 (終了予定午後五時)

(会員制) 一般五千元、学生二千元(限定)  
問い合わせ:後援会事務局(052・882・5600)

初夏から仲夏の舞台

「名古屋淡文会別会」と「第廿四回 能にしたしむ会」

「観世会」 竹尾邦太郎

「経正」 シテ洋子。含羞の公

達経正の氣品を手締麗に見せるが、経正のかけろの様にあわわわとした生涯、その儚さを求めるには少々活潑に過ぎるか。ワキ雅介は沙門帽子に僧都行儀の位を示して風格。(36分)

「隅田川」 シテ三津子、面深

井・襟浅黄・七宝繁文白摺着付・紫地稲穂二鴨子文縫箔腰巻・浅黄水衣・女笠、千方・勘吉郎。曲趣のイメージそのまま母子共演が珍しく、それからあめかシテの心の働きが生々しく挙措に現われる。か、黒ずむ面の右頬、くすんだ着付と水衣の出で立ちからして吾子を訪ねる長い放浪の憔悴が如

実。船中は、ワキ語(宗二期)に

次第に引き込まれ身を固くしてゆく感じがよく、「念仏四五返唱へ」で初めてシオルと、船が着き上陸を促されてやつとシオリ解くのも、現実を知ってしまふ怖さの前心の準備と知れる。「なう舟人」と深く頭を垂れたまま問ひ掛けるのと、ワキとの問答は掛み掛けるといふ切迫感。最初は首を回らせていただけが、「まして母とも」と身体ごとワキへ振り返るところは、一縷の望みに鈍る思いがある。しかし、とんでもない、と一蹴されて直ルと絶望は、ワキ語の主人公こそ尋ねる子、へにては候へとよ、を手の笠と笹を投げ出す

す双シオリの激情も哀切である。

塚前は、ワキを促す様に指して「この土を返して」と下唇に掛う型や、今一度姿をへ母に見せさせ給へや、の双シオリに泣き伏すところ、浮世の無常を言う地(雄三・義高・勘助ら)に身じろぎもせず心が深く沈潜する趣のところ、など確かにみせる。念仏の段は、子方の声を聞き答め、へ今一声こそ、は正に絶唱だが、幻を追うのへ見えつ隠れつ、と両手を掲げて迫るも、塚へ消え去られバツタリ両手を着いて倒れるのは少々くどい。キリは、我が子と見えしは、と塚を下から上へ眺め、へ草茫々と、は抱きつき無で下ろして下居。左手シオルとへ標ばかり、とそのまま立ち、正に直り右ウケ地一杯に足ツメてシオリ留、写実味の勝つた情緒的な舞台はいかに母子の共演、勘吉郎君が健気に勤め、ワキ宗二期の滋味が捨て

きずりの者・融に得物を殺して持

たせたはよいが、相手は甘く見てその得物が仇となり、立場が逆転して身ぐるみ剥がされ放り出されれば、「雄も鳴かずば撃たれまい」と故事を引き慨嘆する。その独自の哀愁に味をみせるが、冒頭で得物の持たせ様にこだわるところ、弓矢を太刀と言いつつ違えたのは遺憾。(21分)

「鷲」 池畔の夕涼みとは言え

そこは帝、初冠・紫指貫・白直衣の正装にツレ勘助、威容に存在感をみせ、鷲を目にして捕えよの恣意。直前に白式の装束も清らかな驚はシテ慈観、近侍のワキ蔵人・勝久が近寄ると一旦はふわりと飛び退くのも軽やかに、勅諭を理解しての恭順が御意に適えば五位を賜り、喜びの舞。眼目の驚乱は足捌き美しく浮遊する流し足の流麗。キリはへ心緒しく飛び上り、と扇カザして一気に三ノ松へ流れ小廻りからトメ拍子、爽やかな「禁野」 シテ大名・拍一、行

久田観正会

久田 勘 鶴  
馬場 信至  
玉木 孝男  
星野 路子  
久田 舜一郎  
前野 郁子  
松山 幸親

大倉流小鼓 松月会  
松月会 前野 郁子  
松山 幸親  
千455-083 名古屋市名東区一社3-162  
電話05270511585

名古屋淡文会

橋岡 慈 観  
三 交 会  
久田 三津子

千455-083 名古屋市名東区一社3-162  
電話05270511585

武田謳楽会

武田 欣 司  
武田 邦 弘

松音会

泉 泰 孝

佳泉会

泉 雅 一郎

梅春会

井 戸 和 男

井 上 嘉 久

千545-084 大阪市阿倍野区文の里3-16-17  
電話06662112219

宝生英照

辰巳孝

近藤乾之助

衣斐正宜後援会

衣斐正宜

惠美寿会

佐野由於

倉本雅

嘉生流

宝生流

司 宝 会

金剛永謹

廣田後援会

廣田幸稔

菊扇会

後援会

廣田泰三

金春信高

金春安明

金春欣三

春敲会

名古屋春栄会

金春晃実

金春穂高

廣瀬瑞弘

(3)面よりつづき

番だったが僅かなシテの役者が難

「景清・松門ノ応答・小返」

捨てられたホームレスの中に功

「附子」 「阿母」は呼吸と吸

「海士」 自己を犠牲にして吾

子の方前大臣・親世淳夫君、二

ノ芝に案内し、老將頼政の自刃の

「能装束展」

後シテは地(宗和・邦久ら)へ

「三輪」 シテ盛義、山居のワ

今回の展示は、唐織、厚板、長

名古屋能楽堂企画展として、

「紅白胡黄段桐妻に雲・丸龍・輪

「赤地蝶扇面文様縫箔」

「金唐草文様綴箔」

「能装束展」

後シテは地(宗和・邦久ら)へ

「三輪」 シテ盛義、山居のワ

今回の展示は、唐織、厚板、長

名古屋能楽堂企画展として、

「紅白胡黄段桐妻に雲・丸龍・輪

「赤地蝶扇面文様縫箔」

「金唐草文様綴箔」

「能装束展」

後シテは地(宗和・邦久ら)へ

「三輪」 シテ盛義、山居のワ

今回の展示は、唐織、厚板、長

名古屋能楽堂企画展として、

「紅白胡黄段桐妻に雲・丸龍・輪

「赤地蝶扇面文様縫箔」

「金唐草文様綴箔」

暑中御見舞

申し上げます

二井 栄 逸

福王 茂十郎

名古屋高安会

高安 勝久

飯富 雅介

杉江 元

相元 正樹

橋本 幸

谷田 宗二朗

宝生 欣哉

宝生 欣哉

宝生 欣哉

宝生 欣哉

植田和光会

植田 隆之亮

龍吟 会

花傳の会

藤田六郎兵衛

有藤田六郎兵衛事務所

亀井 俊一

保忠 雄

谷口 正喜

前川 光隆

前川 光長

大藏狂言会

大藏彌右衛門

大藏吉次郎

大藏吉次郎

飯島 佐之

大之 輔

茂山 千作

茂山 千五郎

茂山 七五三

茂山 千三郎

茂山 正邦

茂山 茂

井上 礼次

井上 菊之

井上 祐一

井上 弘之

井上 一之

井上 助郎

井上 助郎

狂言やるまい会

野村 又三郎

野村 三郎

野村 小三郎

野村 小三郎

野村 小三郎

野村 小三郎

野村 小三郎

野村 小三郎

野村 小三郎

野村 小三郎

野村 小三郎

野村 小三郎

野村 小三郎

野村 小三郎



観世流・金剛流  
宗家本発行元

# 檜書店

〒101-0052 東京都千代田区神田小川町2-1  
電話 03(3291)2488 振替00130-7-3552  
〒604-0935 京都市中京区二条通慈屋町東入  
電話 075(231)1990 振替01010-0-113

# 能 楽 の 友

発行能楽の友社

名古屋市中区千種2丁目18-18  
(郵便番号 464-0858)  
電話 (052) 731-7 9 8 4  
FAX (052) 733-2 8 3 7  
振替口座 00800-6-36393

購読料 1年 1100円  
郵送の場合 1年 1800円  
一部 100円

## 演能カレンダー

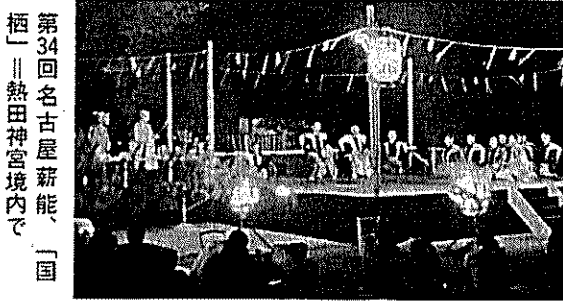
### ◆名古屋能楽堂◆

[8月]  
22日(日) 野村四郎名古屋公演(有料)  
28日(土) 衣斐正宜後援会能(有料)

[9月]  
4日(土) 青陽会定式能(有料)(番組②面)  
5日(日) 初秋能(2部制)(有料)(番組②面)  
12日(日) 名古屋観世会定式能(有料)(番組②面)  
15日(水) 和泉流狂言大会(無料)  
17日(金) 名古屋能楽堂定例公演(有料)(番組③面)  
18日(土) 名古屋観世会九章会(有料)(番組③面)  
19日(日) 名古屋宝生会定式能(有料)(番組③面)  
23日(木) 名古屋幽花会(無料)(番組③面)  
25日(土) 花伝の会特別公演パートⅡ(有料)

### ◆熱田神宮能楽殿◆

[9月]  
11日(土) 中日文化センター芸能発表会(無料)  
25日(土) 名古屋異会(無料)  
26日(日) 茶話会、宴会、種瓜会、餅舞会、合奏舞台大会(無料)(番組④面)



第34回名古屋新能、「国栖」熱田神宮境内で

## 初秋能

9月5日(日)

2部制で開催

能楽協会名古屋支部では、これまでの「大衆能」を昨年から「初秋能」と名称を改め、芸術の秋にふさわしい催しとして企画されているが、この「初秋能」は、九月五日(日)第一部・午前十時開演、第二部・午後二時開演の二部制で行われる。後援愛知県名古屋支部。

## 暑中御伺

### 熱田神宮能楽殿

#### 運営委員会

委員長 熱田神宮二橋 一彦  
権宮司 委員一同

「八神孝充」狂言「名取川」(野村小三郎)ほか仕舞。

「シテ長田懸」観世流能「紅葉狩」(シテ久田三津子)狂言「太刀奪」(井上祐一)ほか仕舞。

「第二部」宝生流能「熊野」(竹内澄子) 観世流能「殺生石」

## 三重県津・四日市で新能

### 阿漕が浦で 迎月の宴

三重県津市の阿漕が浦で、九月二十四日(日)「阿漕が浦迎月の宴」として新能が上演される。

演能は、喜多流「阿漕」、長田懸師ほかによる上演。会場は、阿漕が浦海岸、開演は午後五時三十分より。雨天の場合は九月二十七日(日)に開催。

## 能「船弁慶」

10月8日 四日市新能

四日市新能実行委員会、四日市

市文化振興財団主催、能と狂言に親しむ会四日市研究会協力による「四日市新能」は、十月八日(金)鶴の森公園で開催される。午後五時半開演、午後六時十五分開演。演能は、仕舞「三輪」(シテ駒瀬直也)、「阿漕」(シテ橋本雅夫)、火入れ式、狂言「二人大名」(野村又三郎、野村小三郎、奥津健太郎)能「船弁慶」小書重キ前後之替(シテ梅田邦久、子方田中義人、ワキ高安勝久、ワキツレ堀元正樹、間・松田高義、節・藤田六郎兵衛、小鼓・柳原富司忠、大鼓・河村大太鼓、助川龍夫、後見・青木道喜、駒瀬直也、地謡・橋本雅夫、河村和重、味方玄、祖父江修一、清沢一政、松山幸親)

## 暑中御見舞 申し上げます

名古屋観世会

研能会

梅若万紀夫

梅若万佐晴

観世芳宏

観世芳伸

山中能舞台

山中義滋

山本眞義

山本章弘

上田観正会能楽堂

上田観正会

豊中市本町六丁目一〇一六

TEL078-15449

TEL078-15449

大公拓貴 介威司弘

名古屋橋岡会  
名古屋市中区九屋町五ノ三  
山田紀子方

財団法人 鎌倉能舞台

中森晶三

中森貫太

賀水会

桑名賀水会

名鉄百貨店友の会

花屋の会

下田雄三

豊中市曾根東町四一―一二

雄嵐会中部地区連合会

名古屋和石会

一宮竹石会

岐阜花石会

下呂雄石会

倭文之屋社中

笙月会 中川雅章

〒526-0003 長浜市地蔵寺町八ノ二九  
電話(078)960-630番

洗心会 興村富久子

〒606-0003 京都市左京区永観堂西町二〇  
電話(075)777-0767番

観修会 祖父江修一

〒507-0003 多治見市日ノ出町2の2  
電話(057)221-3656番

中日文化センター

翠生謡会

翠生謡会

猶忠会 熊沢恵美子  
〒455-0003 名古屋市名東区平和ケ丘3-176  
日車マンション四〇四

芳韻会 稻生芳雄

〒475-0001 半田市船入町三十一  
電話(056)908-815

幸謡会 近藤幸江

〒441-0002 岡崎市鴨田本町十一番地ノ三  
電話(056)442-2529

重陽会 菊池重郷

〒484-0001 犬山市犬山相生五九一―一六  
電話(056)845-011番

恵謡会 三村恵子

〒445-0001 西尾市住吉町三十一―一二  
電話(056)335-725九四番

光盛会 熊沢光俱

〒435-0003 小牧市篠岡3-2-11  
電話(056)679-958七

千早会 八神孝充

〒461-0003 名古屋市千種区向陽町2-16  
電話(052)762-2120

臘月会 加藤春枝

〒509-0003 可児市早ヶ丘3-1-113  
電話(057)456-101六六

松盛会

小松勝憲

松舞台  
〒511-0001 三重県桑名市西別所一〇六一の五  
電話(059)442-314五八二

金剛流

松野恭樹

松野洋樹

〒616-0003 京都市右京区鴨渡泉町一八―三  
TEL075(46)221-四八番  
FAX075(46)221-四八番

本田光洋

〒164-0002 東京都中野区上高田二ノ二五ノ二  
電話(03)3386-264四番

# 吉田雅日記

(194)

## 嵯峨野の秋

えと文 二井 栄逸

白の長絹は、時には金色に輝いたり、さびた銀色に沈んで見えたりします。嵯峨野の思い出にひたるのでした。

満目荒涼とした野宮の夜の森を背景に、世阿弥は、捨てられるさびしき、優れたものに辱かしめられるつらさに悩む、六條御息所を月下に演じました。

昔、東京の四谷の舞台に居た頃、作家の吉田雅二さんが能を見にこられたことを覚えています。

### 青陽会定式能（第43期）（第4回）

九月四日（土）十二時半始  
名古屋能楽堂

仕舞 松風 久田三津子  
鉄輪 今沢 美和

能田村 高安 勝久 柳原富司忠 大野 誠  
四 佐藤 融

仕舞 遊経 正クセ 松山 幸親  
遊行 柳クセ 梅田 邦久  
富士太鼓 清沢 一政

中川 雅章  
近藤 幸江

能千手 杉江 元 河村真之介 鹿取 希世  
狂言 抜殻 井上 靖浩 井上 祐一 後見 今枝 靖雄

能葛城 榎本 正樹 河村総一郎 鬼頭 好信  
飯富 雅介 福井啓次郎 鹿取 希世  
大和舞 橋本 幸

附 祝言 佐藤 友彦

〔会員券〕当日券三千円  
〔学生会〕千円  
主催 青陽会

えています。吉田さんは、本三番がお好きで、中でも特に野宮がお好きで、例会にはよくお見えになっていました。

著世の、「島の秋」は、能からにじみ出る幽玄のたどよいが感じられて私の好きな本の一つです。



### 初秋能

九月五日（日）第一部 午前十時始  
第二部 午後二時始  
名古屋能楽堂

〔第一部〕

能喜多流 松風 飯富 雅介 河村総一郎 竹市 学  
長田 郷 後藤嘉津幸

狂言(和泉流) 太刀奪 井上 祐一 佐藤 融 友彦  
後見 井上禮之助

仕舞(金春流) 八島 広瀬 雅弘 地謡 小島 芳樹  
三村 恵子 前田 茂穂  
星野 路子 伊藤 雄二  
瀬戸 洋子 久田三津子 佐久間祥夫

能(観世流) 紅葉狩 高安 勝久 幸 河村真之介 鬼頭喜太郎  
榎本 正樹 福井 良治 大野 誠  
野村小三郎 松田 高義

附 祝言 野村小三郎

〔第二部〕  
〔要員券〕当日券三千円(前座二千五百円)  
取扱い「チケットぴあ」チケットセゾン、熱田神宮能楽殿、市内プレイガイド、各出演者

能(宝生流) 熊野 杉江 元 寛 鉦一 鹿取 希世  
竹内 澄子 相元 正樹 後藤孝一郎

## 暑中御伺 名古屋能楽堂

名古屋市中区三の丸一―一―一  
電話 〇五二(二三三) 〇〇八八

狂言(和泉流) 名取川 野村小三郎 井上禮之助 後見 佐藤 融

仕舞(金春流) 笹之段 牧野 元子 地謡 伊藤 雅子  
吉川 周子 羽多野 良子

能(観世流) 殺生石 飯富 雅介 河村総一郎 鬼頭 好信  
竹市 学 井上 靖浩

附 祝言

主催 能楽協会名古屋支部  
後援 愛知県・名古屋市長

### 名古屋観世会定式能（第四回）

九月十二日（土）十二時半始  
名古屋能楽堂

能 歌占 観世 淳夫 古橋 正邦 観世 晚夫  
河村真之介 竹市 学  
久田三津子 後見 佐藤 融

狂言 不見不聞 野村小三郎 松田 高義  
野村又三郎 後見 佐藤 融

仕舞 放下僧小歌 清沢 一政  
江口キリ 浦田 保利  
殺生石 片山 清司

能海士 上野 朝彦 野村 四郎 河村 大 助川 竜夫  
野村 高安 勝久 藤田六郎兵衛  
榎中之舞 野村小三郎

附 祝言 野村小三郎

〔要員券〕当日券八千円(自由席)  
〔終了四時頃〕

### 和泉流狂言大会

九月十五日（祝）午前十一時始  
名古屋能楽堂

狂言「雁礫」「祐善」「宗論」ほか  
〔来場歓迎〕

### 暑中御見舞

申し上げます

金剛流景雲会  
能を楽しむ会  
宇高通成後援会  
宇高通成面乃会  
国際能楽研究会

宇高通成

徳成

徳成

徳成

〒606 京都市左京区高野泉町四〇  
TEL・FAX 〇七五七〇一〇七五  
TEL 〇七五七〇一〇七五  
TEL 〇七五七〇一〇七五  
TEL 〇七五七〇一〇七五

### 金剛流

名古屋周星会  
岐阜周星会

吉川周子

〒491 名古屋市中区西崎町三二六  
電話 〇五二七六一―三二五七

### 伊勢金春会

宇仁田吉邦  
〒516 伊勢市八日市場町5-16  
電話 〇五九六〇五二九八

長田驍後援会

〒514 津市高野尾町三三五一―四六  
電話 〇五九三〇〇六九七番

### 喜多流

和楽会

和谷衡市

〒516 伊勢市中島三丁目26-12  
電話 〇五九三〇〇一五九番

喜多流山本才

〒410 愛知県高浜市青木町三丁目七の五  
電話 〇五二六〇五三二六―一八二番

ワキ方高安流

山崎 俊輔

〒837 大牟田市大字歴木一四八ノ二  
高泉団地二―二二

森 常好

〒154 東京都世田谷区世田谷一―47-12  
電話 〇三三四二二六 四八五三

大倉源次郎

〒532 大阪市淀川区宮原4-1-2-105  
TEL 〇六三九七―三三三

幸友会

涛華能

福井啓次郎

福井良久

福井良治

柳原富司忠

桂 後藤孝一郎 嘉津幸

富耀会

柳原富司忠

〒466 名古屋市昭和区滝川町47-147  
サザンビル八事2-1703  
電話 〇八三三三 〇一〇三二番

小鼓教室

吳竹会

鉦一

### 名古屋能楽堂定例公演

九月十七日(金) 午後六時半始

狂言 棒 縛 佐藤 融 井上 靖浩 後見 今枝 靖雄

能 久田勘吉郎 杉江 元 寛 敏一 助川 龍夫  
 入場料(全自由席) 当日四〇〇〇円  
 前売 三五〇〇円(当日二五〇〇円)  
 学生 二〇〇〇円(当日一五〇〇円)

### 名古屋観世九阜会定例会

九月十八日(土) 午後一時始

狂言 八 野村又三郎 井上 祐一 後見 井上 靖浩

能 富太鼓 飯富 雅介 河村隆一郎 竹市 学  
 宗 八 野村又三郎 井上 祐一 後見 井上 靖浩

### 戦後名古屋能楽史 ①

竹尾 邦太郎

平成十一年(一九九九)八月十五日、千九百年代最後の終戦記念日がやってきた。あれからはや五十四年の歳月が過ぎる。能楽界は今、空前の繁栄を謳歌しているように見えるが、苦難の戦後の歴史を辿り、先人達の労苦を偲ぶのも故無しとしないだろう。

名古屋の能楽史は、その昔に携わる能役者の歴史であると共に、その昔を演じる拠点となる能楽堂の変遷の歴史でもある。戦前の昭和初期、名古屋能楽界活動の拠点は名古屋能楽堂であった。能楽の殿

### 山姥

狂言 融 佐久間 喜之 高安 勝久 後藤孝一郎 鹿取 希世

能 山姥 野村小三郎

附 祝 言 主 催 名古屋観世九阜会  
 当日券五千元(自由席)  
 学生券二千元  
 ※チケットぴあでも取扱。電話〇五二(三三〇)九九九九  
 名古屋市中区南區元塩町一丁目一七番地 加藤 彦彦 事務所  
 電話 〇五二(六一)三六五九

### 名古屋宝生会定式能(第43期)

九月十九日(日) 午後一時始

狂言 瓜盗人 大野 弘之 井上 祐一 後見 佐藤 融

能 西王母 飯富 雅介 寛 敏一 鬼頭喜太郎  
 玉ノ段 和久莊太郎 飯富 雅介 寛 敏一 鬼頭喜太郎  
 花 籠 杉江 元 信成 河村隆一郎 鹿取 希世

### 放下僧

狂言 山下 崇生 飯富 雅介 河村真之介 竹市 学

能 放下僧 後藤嘉津幸

附 祝 言 主 催 名古屋宝生会  
 事務所 名古屋市中区白区島田二丁目三〇番地  
 島田橋住宅二丁目三〇番地 佐藤 耕司 方  
 電話・FAX 〇五二(一八〇)三三三三

### 名古屋幽花会

九月二十三日(祝) 午前九時三十分開演

狂言 忠 度 村川喜久子 伊藤やす子

能 殺生石 長 坤 敏明 西野 宏  
 定 家 宮崎 昌子 富岡 道代  
 井 筒 比江崎孝子 百萬 村木 玲子  
 俊 寛 富田まさ子 藤原美哉子

### 恋重荷

狂言 山 姥 岡本 耕蔵 善知鳥 東山 清和  
 番外狂言 葵 上 片山 清司 船弁慶 片山 伸吾

能 恋重荷 河村 博重 高安 勝久 河村隆一郎 井上 敬介  
 村木 寛茂 野村又三郎 杉 市和

附 祝 言 主 催 名古屋幽花会  
 (六時過頭終演予定)  
 片山 慶次郎 片山 伸吾

暑中御見舞 申し上げます

叶石会 河村 総一郎  
 河村 真之介  
 千原 名古屋市中区南區山町二丁目二三番地  
 電話(〇五二)七六一四八八二

河村 大  
 千原 東京都北区紫野下柏野町五九一  
 電話(〇七五)四六二四一五

長生会 鬼頭喜太郎  
 好 信  
 愛知県中島郡平和町城西  
 電話(〇五六七)一九六〇番

助川 龍夫  
 助川 治  
 金春流太鼓 青耀会  
 上田 悟  
 〒591-033 和泉市青葉台2-17-25  
 電話(〇七二五)八五二二  
 名古屋市中区丸の内二丁目三番地  
 電話(〇五二)一四〇三〇

野村 万蔵  
 野村 万之丞  
 野村 良介  
 〒117-0022 東京都豊島区南長崎六-15-13  
 電話(〇三三二)九五〇一五八八番

鳳の会 林和利  
 井上 祐一  
 佐藤 友彦

彰 諷 閣  
 名古屋市中区南區西二丁目八〇二二  
 電話(〇五二)八〇五三三三  
 名古屋市中区南區鳴海町有松裏40-19  
 電話(〇五二)六二二四三三八

葵 心 庵 舞 台  
 尾張旭市東大道町原田二四九三ノ二  
 電話(〇五六一)五〇三三三六番  
 能舞台 電話(〇五六一)五〇三三六九八

楽 調 庵 舞 台  
 名古屋市中区南區瀬川町四七七八三  
 電話(八三三)七〇〇一

狂言 なのり座 井上 靖浩 佐藤 融 野村 小三郎

朝日カルチャーセンター 雛子教室 小鼓 後藤孝一郎 丸栄スカイル10階

ウシマド写真工房 〒602-0801 京都市上京区北野上七軒 TEL 〇七五(四六)二一三四一 FAX 〇七五(四六)一五七七二

栄能楽舞台 〒462-0801 名古屋市中区南區五-16-14 電話(〇五二)二一八三番

〔おこわり〕 暑中広告の掲載にあたりましては、紙面の都合により順不同とさせて頂きましたので何卒ご理解賜りますようお願い申し上げます。



熱田神宮能楽殿

合同謡曲大会

九月二十六日(日)午前九時始

熱田神宮能楽殿

高砂

西よしえ 大西智津子 (楽謡会)

三輪

工藤 良一 高橋 正秋 (楽謡会)

雨月

三谷 俊幸 大西鐘八郎 (楽謡会)

菊慈童

田中 愛子 宇田 厚子 (楽謡会)

通小町

若杉 春江 瀬崎 和子 松尾 智子 (楽謡会)

小鍛冶

中原 正雄 飯田 敏三 (楽謡会)

放下僧

上田 千代 鈴木 公子 馬場 竹生 (楽謡会)

井筒

梅村 平義 (楽謡会)

半井

井本 都子 西よしえ (楽謡会)

玉城

森 勝巳 井上 義久 (楽謡会)

葛城

笠原 善隆 犬飼 次夫 (楽謡会)

天鼓

河津 清子 犬飼百合子 (楽謡会)

鶉飼

豊島伊奈子 加藤 鳳来 (楽謡会)

鞍馬天狗

伊奈志江 野村 正子 (楽謡会)

安達原

上田 千代 山田 仲子 (楽謡会)

松風

牛山 充 (楽謡会)

山姥

鶴見理太郎 (楽謡会)

附祝言

(終了予定 午後五時頃)

雅謡

錦興会

共催

錦興会

梅村平義

梅村平義

藤田政信

藤田政信

連絡先

名古屋市中区野村町四一五八

電話

〇五二一七九二一三六二七

刈谷市元町四一六二

電話 〇五六六一二二二四八〇

仲夏梅雨の舞台から

第十九回名古屋能楽堂定例公演

第二回名古屋ごさる乃座

「宝生」と「第三回鏡座」

竹尾邦太郎

「鼻取相撲」一度にとつと八千人を採用しようというシテ大名・小三郎、太郎冠者、又三郎にたしなめられ五百人に削減はしてもまだ多い。ならばと一挙に二人にするが、それも汝共にとればたつた一人の雇用。深刻なりストラの昨今、新規大盤採用など夢のまた夢の世相を皮肉り、見所の笑いの苦いか。採用された相撲得意の坂東方ノ者・高義も異能、鼻面取つて引き回す」というが相撲の要諦は機先を制すること、文字通り鼻を取れば、負けた大名はさらばと土器で鼻を防御、相星とはしても所詮はその場凌ぎの戯れ、三度挑まれ「また取る」というかの表情もうんざりと小三郎、飽きっぽい大名の気質をうまくだす(37分)

「景清」シテ馳、不遇を嘆く所謂「松門」の一節は陰々滅々の気分。一翼果てたる有様、滅々の門帽子・小格子着付・白大口・黒水衣のシテ、髭の景清が床几の姿を現わす。尋ね人として「悪七兵衛」の名を聞かれ、右下へ薄く目を外らすかの風情は、娘と察するもつれなく追い帰して「盲目ぞ悲しき」と身を振るるようには細かくぐつと右ウケル辺りの描写も細かい。落魄の身が訪うワキ里人・元には無い「思ひ切った」乞食が何で、と身を乗り出さんばかりにワキへ向く憤慨も切実。悪心は起こさじと思へども、と肩打ち震わせんばかりの無念は、一片輪なる身の癖として、と梅悟に両肩震わせるところ。巧く表現される。さて又浦は、と床几を立つと柱に植って耳を欲すれば、平家を語るには我、の盲法師の自負、潮騒に触発され、杖取り、流石に我も平家なり。と驚屋を出るのも感概深い。シテ、ワキ問答から父娘対面の場は割に平凡だが、老いては驕馬に劣る。と安座の腰をがっ

くり折って前のめりになるのは少々突出気味。合戦譚は、物々しやと夕日影に、と武者舞いするかに立つところも勇躍といった趣で、以後の型の牙えも鮮やか。キリは左手でツレの左肩抱きかかえ、へさらばよ、とツレの背を押し出すと、トメは杖を頼りに茫然の態。一体はシテの写実力が際立ち、ツレとの格闘をまざまざと見せつけて父が娘に情を通わす辺りもしっかりせず不満。トモのワキツレ雅介が支えるも支えきれない悔みが残る。地頭は山から遠来の匡一、唯子は希世・孝一・節一・鉦一、後見を輝久・俊介。(1時間15分・6月18日・第十九回定例公演)

「花子」シテ萬斎、披き以来三年ぶりの再演。愛人花子に逢いたい一念は、妻・幸雄を欺き、太郎冠者・万作も巻き添えに一夜を満喫するが、まさかの陥穽には気が付く由もない。身替り露見で、疎み上がる太郎冠者と、わななきつも目に物見せんと気を取り直す妻、好い気な惚気は小歌掛かりに仕方を放つてのシテ、それぞれが役相応の大活躍で万作家のチームワークを見せつける。就中キリ、怨念にうわする「結構な座禪なう」の妻の声音の凄味に、自棄つばちは「筑紫の五百羅漢へ参った」とシテのぬけぬけとした捨て台詞の快味、深刻に重くならずすっきり纏まる。女権の強さを皮肉り、男心の純情を謳う、などと言えは柳眉を逆立てる向きもあろうが、なあに御眉とは美人の眉の称、美人がそうざらに居る訳はあるまい、などとほざけば「喰ひつかうか」と掴み掛かれるが落ちだらう。それにしても貞女烈婦が何で不足、というにもなるがそこはそれ男女の機微は複雑にして不可思議ということか。(1時間11分)

「六地藏」シテすつば万作、仲間(萬斎・和憲・博治)を語らうて六体の地藏を求めめる田舎人。万之介から金子を奪おうという。三体を六体に見せる詐術のどたばたの雰囲気は、田舎人をからかうゲームに仲間参加する感覚。薄々察して来た田舎人も、それに加わって積極的に楽しむ魂胆が見え、万之介が巧い。(31分・6月19日・第二回ごさる乃座)

「生田教盛」法然上人に拾われ養育された男児(子方)が亡父は教盛と知り、夢にても願ひ上人の侍者ワキ元に伴われ、加茂明神の霊夢を得て生田の庵に父の幽霊シテ博治に会う。この一場物の小品は千方次第と思ふが、残念ながら無機能的に台詞をしゃべるだけで亡父に会いたい願う熱意は感じられなかった些が蓋が立った子方を取って起用する理由は様々だが、其は大人、シテの意欲にも関わらう。間魔王から後妻への一時帰休を許されてシテが遺児と会う場も空しく思えたが、中ノ舞の優しさから太刀割きに修羅道の苦思をまきつぱりみせるところ、忽々に立ち帰る二ノ松のトメまで、美しかった。(44分)

「杜若・沢辺ノ舞」杜若の美しさに感嘆措けぬわすのワキ旅僧(勝久の風情を見れば、シテ里女(実は杜若の精)英照としても満更ではない。居宅へ誘うのも、業平の遺品を身につけて郎の美しさ以上の都の洗練された美しさを見たい、英照充実ぶりを示して、勝負も好アシストである。面筋木増・襟白二・撫子文白摺箔着付、物着に郎を象徴する様な秋野茅屋文段唐織を脱ぎ、花尽シ文様箔腰巻の上に紫長絹を着け、老懸・垂櫻の初冠に日陰ノ糸を左右に垂らし、心葉に幾房かの白い藤の花をかざせば、匂うばかりの美しさ。真ノ太刀を佩き、「なうなうこの冠唐衣御覽候へ」と旅僧の関心を促すも誇らかに、杜若ノ精に業平の魂も乗り移るかである。小書で、袖を都に返さばや、の後のイロエを抜き、クセは「三河の水の底ひなく、と下を見廻すところ、契りを結んだ数々の女人の面影に思いを馳せるのか、情緒纏綿。光も乱れて飛ぶ

蓋の、は面を使わず、正先へ出てハ雲の上まで、と左袖返シ引分ヒラクところに雰囲気がある。序ノ舞は沢辺ノ舞、舞半ばに二ノ松へ抜けるに匂い寄り、左袖返シ下を見込むと更に左右へ見る辺りは水に映るわが姿に陶酔する正にナルシスト。舞台へ戻っては、常座で右袖キリリ巻き上げて暫し右ウケの姿が杜若の優美な姿を思わせる。舞上げ、昔男の名を留めて、の後イロエが入り、キリは、へ指に鳴くは、と扇左肩に上げて見るところ、へ舞の唐衣、と左袖を右手の扇に受けて下居するところ、など業平への憧れと思慕の情を具象に見せて上品、好舞台だった。唯子は六郎兵衛・孝一・真之介・龍夫、地謡は萌・克榮ら、後見を雅・澄子。(1時間26分)

「横座」牛(清進)を拾った何某・精治、目利きを頼もうとする先がその牛を探しているシテ牛主・祐一、必然所有権争いになる。牛主の言いが名を呼ばば鳴くとあり、何某はそれを三声まで許すが何分相手は牛、二声呼ばれども素知らぬ顔である。今は是迄も牛主は、描いた牛ですら主の熱意に感応して鳴いたという故事を長々喋り立てれば、苦々しく思いつつも睡魔に襲われる何某と、不貞腐れる様に寝る牛。精治の最後の一声に「モウ」と鳴くのは、けだし退屈紛れの吐息、「も曲曲曲」である。愉快とは言えない曲曲曲であるが、三者の息がよく合つて如何にも狂言らしくからりと仕上がる。(21分)

「大会」天狗の悪戯も度が過ぎれば天の怒りに触れるというお伽噺。黒水衣の白く有りけな前シテ山伏、正直、死地を救われた報恩に何なりと望みを叶える、とワキ数山ノ僧・雅介に申し出れば、自らが釈尊(後シテ)に成り済まし、望み通り説法の庭即ち大(法)会を現出させる。前シテは、木の葉をさつと、水衣に風を孕んで竜巻のように廻って消えて行く中入、してやったりの感じがよく出る。後シテは、目も眩む金ピカの装束に威容を誇示し、左手に経巻を

掲げて一ノ松、ハ山は即ち霊山となり、と幕を見込む所にハツタリの大得意をみせて妙。舞台に入つては説法の庭の壯麗、へ忽ちに信心を起し、た僧に下居合掌されれば、折柄の地鳴りに僧の信心が天に届く気配を察して偽釈尊、へ俄に、で経巻さつと下ろすと幕の方を見込み、慌てて台を飛び降りる辺りのバタバタした所が愛敬。正体現わしてからは、ツレ帝釈天・愛との働きも派手に渡り合い、キリに膝行してへ岩根を伝ひ、台に登るや忽々に二ノ松へ逃れるのもはきはきはしているが、一体は少々軽く、どっしりした大徳物の重みといったものはあまり感じられなかった。(55分・6月20日・宝生会)

「鐘の音」一作の元服には闘斗付の太刀と主・又三郎は金の値を聞きにシテ太郎冠者・小三郎を鎌倉へ遣る。鎌倉は名刀正宗を産んだが同時に五山始め寺どころ、同音異義の鐘の音と早合点する。鐘々として男で寺々を巡り、撞き鐘に耳を澄ます姿には粗忽とばかり言いつれない小三郎のぬくもりが感じられ、「うつけ」と断じると主が寧ろ無体。(22分)

「教盛」熊谷直実、若年の教盛を討ち無常観に出家、蓮生(ワキ謙吉)となつて菩提のため古戦場一ノ谷に赴き若い草刈の一行(シテ團、ツレ康之・廣道・道治)に逢う前場、先ず重々しく位を取るワキが舞台を締める。若者達は仲間同士、不遇をかこつにも深刻さは無く、草刈から掃路につく風情にも連帯感、刈草には美しい花を挿して担げ、籠には一杯に野の花を満たす優しさにシテとツレの連吟も実に爽やかで美しく

上々。笛に纏るシテ、ワキ問答の裡にツレ三人が幕へ退くのも極くスムーズである。シテの、ワキと対面を念仏を連吟・合掌もよく、へ毎日毎夜のおおひ、とワキにアシラヒ目を伏せるところは若姪暗示して心持があり、直面のよさを発揮する。アイ里人の居語は小三郎、教盛討死の経緯に熊谷が己が手で教盛の首級を挙げるところの迫力をみせれば、後シテ教盛ノ幽霊・團も中ノ舞に公達の優美を、キリには若武者の潔さを痛快にみせる。面は敦盛か、黒垂・梨子打白鉢巻・襟白赤・胴着地花文様箔着付・白地金波流文大口・鉄線二帆掛舟文相長相・矢羽二背海波文腰帯は、凛々しい美しさの中の憂愁が装束付からも窺われる。クセは、へ寿水の秋、に一ノ松、更にへ龍鳥の雲を恋ひ、と二ノ松へゆき、袖返シへ空定めなき、と遙かにワキを見込むところ、舞台へ戻ってはへ千鳥の声も我が袖も、と正先へ、袖巻き上げ退り正中、へ機杖で膝着き面伏せるところ、クセ切に「一門の果、と袖シヨルところ、などなど哀愁も一入。舞からキリは、へ馬引き返し、と舞台へ戻ると扇投げ捨て、へ跡留ひて、と太刀を捨てるも生一本の清々しさである。團・小三郎と唯子の誠・嘉津幸・真之介の、若い同人が結束した「鏡座」をこれも若手実力派の清司・晴道らの地が支え、遠来のワキ謙吉が巧味をみせて、誠実で立派な近來の「教盛」だった。後見は喜一郎・豊彦。(1時間26分・7月3日・第三回鏡座)

NHK放送予定

(平成11年8月~9月)

●NHK・FM能楽鑑賞 (日曜日午前8時~9時)

〔8月〕名演ふたたび

22日 松本謙三「弱法師」ほか

29日 観世雅雪一調「巻絹」ほか

●NHK教育テレビ

「やさしい能狂言入門」(毎土曜日)

8月21日 「能を舞ってみよう」

8月28日 「狂言で笑ってみよう」

〔9月〕NHK・FM能楽鑑賞 (日曜日午前8時~9時)

5日 「俊寛」(観世流)関根祥六ほか

12日 「実盛」(経致)(宝生流)近藤乾之助ほか

19日 「小袖曾我」(喜多流)佐々木宗生ほか

26日 「松虫」(観世流)吉井順一ほか



観世流・金剛流  
宗家本發行元

# 檜書店

〒101-0052 東京都千代田区神田小川町2-1  
電話 03(3291)2488 振替00130-7-3552  
〒604-0935 京都市中京区二条通麩屋町東入  
電話 075(231)1990 振替01010-0-113

# 能 楽 の 友

発行能楽の友社

名古屋市中種区千種2丁目18-18  
(郵便番号 464-0858)  
電話 (052) 731-7 9 8 4  
F A X (052) 733-2 8 3 7  
振替口座 00800-6-36393

購読料 1年 1100円  
郵送の場合 1年 1800円  
— 部 100円

## 演能カレンダー

### ◆名古屋能楽堂◆

- (9月)  
23日(祝) 名古屋幽花会(無料)  
25日(土) 花伝の会特別公演パートII(有料) (番組①面)
- (10月)  
3日(日) 名古屋泉楽会(無料) (番組①面)  
9日(土) 初めて知る能・狂言の世界(要整理券)  
10日(祝) 邦謡会発表会(無料) 番組②面  
17日(日) 大喜多秀撰社謡・仕舞大会(無料)  
24日(日) 三交会大会(無料) 番組②面  
30日(土) 恵美寿会同門会発表会(無料)  
31日(日) 恵美寿会同門会発表会(無料)

### ◆熱田神宮能楽殿◆

- (9月)  
25日(土) 名古屋翼会(無料) (番組③面)  
26日(日) 楽謡会・奏会・雅謡会・錦興会合同謡曲大会
- (10月)  
2日(土) 猶惠会秋の大会(無料) (番組③面)  
17日(日) 武田謡楽会(無料)  
24日(日) 鳳鳴会大会(無料) (番組④面)  
28日(日) 第4回尾州座公演(有料)  
30日(土) 鳳の会(有料)  
31日(日) 観修会大会(無料)

平成十一年度「忠三郎狂言会」は、十月一日(金)東京・国立能楽堂の公演をはじめに福岡、大阪、京都で開催される。日程および演目は次のとおり。十月一日(金)東京・国立能楽堂。午後六時四十五分開演。

## 忠三郎狂言会公演

東京・福岡・大阪・京都で

能楽堂。午後六時四十五分開演。十一月五日(金)大阪・大槻能楽堂。午後六時三十分開演。十一月十七日(水)京都・観世会館。午後六時三十分開演。(京都府古典芸能振興公演) [番組①] 二人持 翠・茂山良暢、親

## 秘曲「関寺小町」上演

福井啓次郎師古稀記念  
12月18日 涛華能

小鼓方・福井啓次郎師と幸友会主催による「涛華能」は、各流の名手による秘曲、名曲の公演として回を重ね、ことし十一回目を向かえるが、今回は福井啓次郎師の古稀を記念して十二月十八日(土)名古屋能楽堂で催される。上演は、能楽至高の秘曲「関寺

小町」でシテ芸術院会員・梅若恭行、ワキに人間国宝・宝生閑、笛方には、人間国宝・藤田大五郎の諸師を迎えての公演。「関寺小町」は、当名古屋では、享保七年(一七三二)以来、実に二百七十有余年ぶりの上演といわれる。

## 10月11日に 津市民新能

能「葵上」上演

第二回津市民新能が十月十一日(月・休)津市西丸之内お城西公園特設舞台で行われる。

演目は、舞囃子「松山天狗」(梅若六郎)、一調「蝶丸」(梅若若紀、小鼓・幸清次郎)。

演能は、狂言「二人大名」(シテ向井理子、アド松井清子、小アド河村美代子)。

能「関寺小町」(シテ梅若恭行、子方山中興員、ワキ宝生閑、ワキツレ宝生欣哉、坂苗、大日向寛、笛・藤田大五郎、小鼓・福井啓次郎、大鼓・亀井忠雄、後見山本勝一)ほか。地謡梅若六郎、梅若晋矢ほか。

喜多流能「葵上」シテ長田駿、ツレ松井俊介、ワキ高安勝久、大臣・相元正樹、そのほか仕舞数番。観能協賛券二千円(高校生以下無料)。

前売特別席一万五千元、指定席一万三千元、自由席一万円、取り扱い「プレイガイド」、楽師宅問合わせ「福井啓次郎」(電話〇五二・二四一・三二四六)

午後五時三十分開場、午後六時開演、雨天の場合はリジョンプラザお城ホール。  
連絡先 市川丁一方(TEL〇五九一・二二七・八七四四)

## 藤田家三百七十年 藤田六郎兵衛舞台四十年記念 花伝の会特別公演

九月二十五日(土)午後一時半始

名古屋能楽堂

齊川龍之介の詩による

能舞 相聞

一管独吟 芭蕉

名古屋初演  
堂本正樹台本 梅若六郎演出

復曲能 護法

山伏 野村 萬斎  
大鼓 藤田六郎兵衛  
小鼓 白坂 信行  
太鼓 親世 元伯  
地謡 片山 清司  
藤田六郎兵衛事務所  
花伝の会  
TEL・FAX 052・571・6341

## 先代観世喜之二十三回忌追善

## 名古屋泉楽会秋季大会

十月三日(日)午前十時始

名古屋能楽堂

番組

舞囃子 熊坂

素謡 熊野

羽衣

舞囃子 実盛

素謡 菊慈童

披き 葵上

砧

観世 喜正  
梅村 悦子  
加藤美登利  
遠藤とめ子  
森島久美子  
竹田美菜子

寛 鉦一  
後藤嘉津幸  
鹿取 希世

河村総一郎  
藤田六郎兵衛

若山弥栄子  
寛 鉦一  
後藤嘉津幸  
鹿取 希世

古川 暁  
諸隈 良吉  
山田 延恒  
八島 行康

鈴木 啓吾  
田中 英郎  
駒瀬 直也

観世 喜正  
梅村 悦子  
加藤美登利  
遠藤とめ子  
森島久美子  
竹田美菜子

能 卒都婆小町

飯富 雅介  
杉江 元  
河村総一郎  
藤田六郎兵衛  
五木田三郎  
観世 喜之  
高橋 保彦  
高橋 啓吾  
駒瀬 直也

独吟 井筒

仕舞 東北七

名譽師範披露

素謡 姨捨

舞囃子 忠度

砧

融

能 葛城

番外仕舞 求塚

追加

御来場歓迎

観世 喜正  
梅村 悦子  
加藤美登利  
遠藤とめ子  
森島久美子  
竹田美菜子

寛 鉦一  
後藤嘉津幸  
鹿取 希世

河村総一郎  
藤田六郎兵衛

若山弥栄子  
寛 鉦一  
後藤嘉津幸  
鹿取 希世

古川 暁  
諸隈 良吉  
山田 延恒  
八島 行康

鈴木 啓吾  
田中 英郎  
駒瀬 直也

観世 喜正  
梅村 悦子  
加藤美登利  
遠藤とめ子  
森島久美子  
竹田美菜子

寛 鉦一  
後藤嘉津幸  
鹿取 希世

河村総一郎  
藤田六郎兵衛

若山弥栄子  
寛 鉦一  
後藤嘉津幸  
鹿取 希世

古川 暁  
諸隈 良吉  
山田 延恒  
八島 行康

鈴木 啓吾  
田中 英郎  
駒瀬 直也

## 初めて知る能・狂言の世界

十月九日(土)午後二時開演

名古屋能楽堂

能の話 半能 「天鼓」

能子楽器の説明

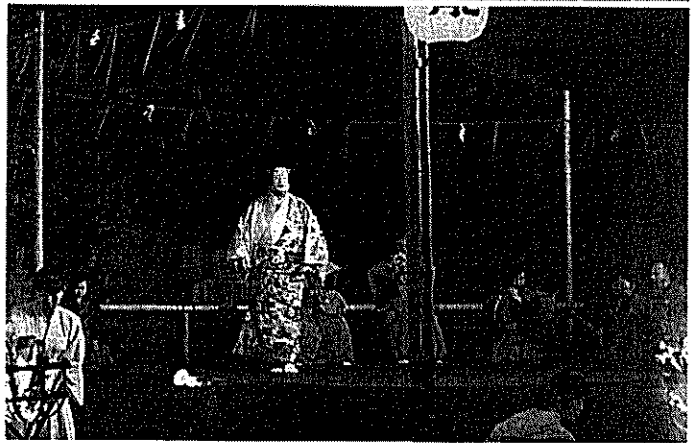
狂言の話 狂言 「梟山伏」

〔要整理券〕

問い合わせ

名古屋能楽堂  
TEL 052・231・0088

第34回名古屋新能



写真①宝生流能「高砂」、②観世流能「班女」  
③観世流能「国栖」  
（杉浦賢次氏撮影）

廣田後援会能

10月3日 金剛能楽堂  
金剛流・廣田後援会  
は、十月三日（日）金剛  
能楽堂で「第九十三回廣  
田後援会能」を開催する。午後一  
時三十分始曲。番組は次のとお  
り。

舞囃子「富士太鼓」（廣田隆一）  
狂言「右近左近」（茂山千之  
丞、丸石やすし）  
能「自然居士」（シテ廣田幸  
稔、子方・弘田美穂、ワキ中村彌  
三郎、ワキツレ山本順三、笛・杉  
市和、小鼓・成田達志、大鼓・谷  
口有祥、間・茂山七五三、後見・  
廣田泰三、松野共憲、地謡・金剛  
水龍、今井清隆、宇高通成、谷口  
宗義、種田道一、松野洋樹、塚本  
嘉樹、豊嶋晃嗣）  
入場料：当日券五千円（前売四  
千五百円）学生券二千円。取扱所  
廣田後援会、TEL（〇七五）  
七八一一八八五、七二二一九一  
二三 金剛能楽堂TEL（〇七  
五）二二一一三〇四九、松野洋樹  
か。  
能「自然居士」のシテ廣田幸稔  
（ゆきとし）氏は一九五七年生ま

面・装束特別展

奈良国立美術館

奈良国立美術館は、十月十六日  
（土）から十一月十四日（日）の  
一カ月間にわたり「能面・装束  
の特別展」を開催する。  
展示は、室町時代、桃山時代、  
江戸時代にわたる能面・装束で  
重要文化財多数の出展。  
期間中のイベントとして、十月  
三十一日（日）講演会、「能装束  
—その歴史と美—」東京国立博物館  
染織室長・長崎巖氏、十一月七日  
（日）「能の魅力—さまざまな風  
姿—」観世流シテ方・山中家一  
門、奈良県立美術館学芸員による  
展示解説、十月二十三日（土）、  
十一月十三日（土）午後二時、  
月曜日休館、入館料・大人七百  
円、大・高生五百円、中・小生四  
百円。美術館TEL（〇七四二）二  
三三九六八。

邦謡会発表会

十月十日（日）午前九時半始  
名古屋能楽堂

Table listing performers and their roles for the '邦謡会発表会' (Kōryūka Hōshōkai). Roles include 舞囃子 (Maibayashi), 素謡 (Suryō), 仕舞 (Shimai), 舞 (Mai), and 独吟 (Dokugin). Performers listed include 玄象, 竹生鳥, 野宮, 松風, 隅田川, etc.

三交大会

十月二十四日（日）午前九時半始  
名古屋能楽堂

Table listing performers and their roles for the '三交大会' (Sanjō Taikai). Roles include 舞囃子 (Maibayashi), 素謡 (Suryō), 遊行柳 (Yūkyōryū), 遊行 (Yūkyō), 遊行 (Yūkyō), 遊行 (Yūkyō), etc. Performers listed include 高砂, 富士太鼓, 三笑, 関寺小町, etc.

土蜘蛛

附祝言

胡蝶 伊藤さち子  
トモ 玉木 孝男  
頼光 久田 勲  
早川 功一  
高安 勝久  
西村 信広  
問 佐藤 融  
主権 三 交 会  
久田 三津子  
TEL七〇五一五八五

班女

素謡

舞囃子

二木 和子 日比野妙子  
仲尾 和子 後藤弘次郎  
杉江 元 寛 鉦一 助川 龍夫  
問 大野 弘之

百萬

仕舞

高安 勝久 河村真之介 鬼頭喜太郎  
福井啓次郎 鹿取 希世  
問 井上 靖浩

熊野

舞囃子

原田千恵子 寛 鉦一 鬼頭喜太郎  
福井啓次郎 竹市 学  
松原 克己 後藤嘉津幸 竹市 学  
秋田恵美子 河村真之介 鹿取 希世  
福井啓次郎 鬼頭喜太郎  
藤井 圓隆 河村真之介 鹿取 希世  
福井啓次郎 鹿取 希世

柑子

番外狂言

佐藤 友彦 今枝 靖雄  
後見 井上 靖浩

# 戦後名古屋能楽史

## 名古屋能楽堂のこと

前史に代えて

竹尾 邦太郎

更に雑誌「宝生」第十巻五月号(昭和六年五月十五日発行)は四頁を費やして一八三氏による「名古屋能楽堂を觀る」の一文と能楽堂全景・舞台・見所の写真三葉を掲載して布池能楽堂の全容を紹介する力を入れようである。

「日本に一つしかない洋式建築によつた、宝生会舞臺の弟分のよなもの」の名古屋に出来たといふので、その舞臺披露見聞に罷り出た。宝生宗家の「翁」付「高砂」に始り、各流の大家の競演であつた。流儀からは野口、桐谷、武田諸師が出られた。徳川公卿を始め、本間池内兩翁其他東京からの御見物もあり、「名古屋はエライネ」といふ言葉が方々で起る。そつたらう大阪京都にもなく、東京でも宝生会独り漢望の的となつてゐたのを、それより総じて五割方小さいながら、免に角鉄筋コンクリート能楽堂である。名古屋は金沢などと共に古来諸芸隆祥の地であるが、今日も同市は何事にも小ジシマリ(或いは大ジシマリ?)と有力者達の纏りのよい都會であり、能楽についても、流派

を超越して恒に一致協同してゐる。舞子方言方は三都に劣らぬ腕捕ひであり乍ら、シテ方のみは土地に盡力者が根城を構へず、凡て他から聘してゐる。これらがこの挙成功の原因の一つでもあらうか。

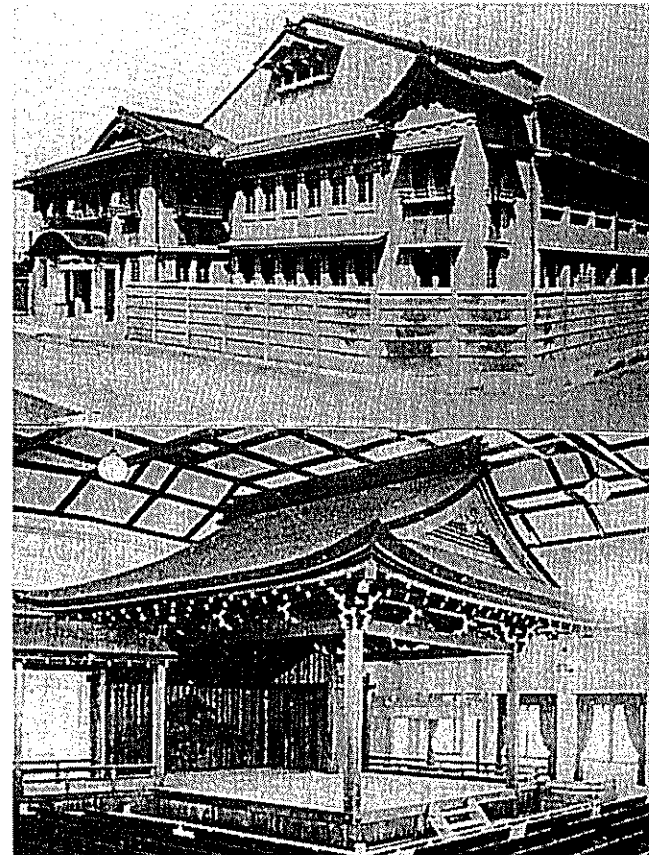
東区布池町の静かな小路に、茜色に明るい外観をして聳えてゐる。派手で一見小劇場と見える。施工は同じ清水組だが、あの清楚な宝生会とは似もつかぬ感じである。尤も聊か通俗な感じのするエレベーションは意識して独創を避けたかと思はれるが、千鳥破風、起り破風、唐破風、と小さい変化が沢山で、全体としての統一した建築美と独創とは宝生会に及ばぬようだ。

玄関も今日の実用としては軒を深く出して、自動車から濡れずに入るようにして貰ひたかつた。玄関を入つた広間の感じは宝生会の散漫なるに遙に勝つてゐる。廊下も落ちついた壁紙を貼つてあつて宝生会の如く壁をみ出しの殺風景ではない。下足の都合もよく、外套室や便所が近くにあつて便利なこと、凡てプランの点では宝生会を手本としてその欠点を補つた苦心が見えて結構だ。

見所へ入ると流石に立派だ。無暗に天井が高く、谷底のような感じのするのは、宝生会より狭いのに、小屋の天井の高さは低くするわけにいかぬからであらう。殊に大天井の真下で坐つてゐるのは、昔の芝居の平土間のような感じだ。椅子席は一人一席で、間のゆとり多く出入に楽で、之も宝生会より改良されてゐる。地裏席が宝生会の如く高く飛び上がつてゐず、低いのも正面から邪魔に見えず良い。放送調整室も宝生会のより形はいいが、舞台其他白木の部分は新材の箇所も汚してあるのに、それと真新しいのがいささか調和を破る。白洲に囲ひをしたのは良い。宝生会などで開演中に最前席へ入る人が、ジャリジャリと音をさせて白洲へ踏み込むのは耳触りなものである。廊下より座席へ入るには引戸であるから、宝生会のように嫌む。しかし座席に踏み込みがなく、廊下へ履物を脱いで入るから、筆者の如きは能が済んでから履物が紛失してゐるので、裸足で廊下を歩かせられた。

それから、どうも暖房設備が見当たらなかつたが、どうなつてゐるか聞き漏らした。宝生会が設備があつても、年中寒い非難が絶えないだけに、冬の事が心配だ。大天井は宝生会の如き独創的な採光法はとれなかつたにせよ格段が変な直線的な折上げ方で、ニス塗りの光り、鏡板の水色ペンキと共に少し品位が落ちた。これは宝生会の高く蛇腹で組み上げて舞臺屋根の高い部分を入れた方がいい。但しこの天井の形は音響効果の考慮があつたかもしれない。満員にも拘わらず見所中どこでもよく聞こえ過ぎる位で、聲殺敷といふ所はないようだ。むしろ看客の少ない場合には響き過ぎはせぬかとおもはれる。壁面はコンクリートと塗つただけだが、宝生会の如く木部や紙貼りの多い方が、感じもよく、音響吸収の効果もあらう。凡て観覧席の裝飾が舞臺と調和すべし日本化されてゐなく、況して宝生会の如く演能そのものと色彩上の調和にまで考へを及ぼしてないようだ。舞臺は明治年間出来た古いものを移したので屋根の照明もスッキリして良い舞臺である。柱間三間の橋掛りが見所の柱間に押されて非常に短いものになつた。それから鏡の間が乗り出してゐて、しかも橋掛りとの接触が歪形であるので、鏡の間の屋根の破風の形が如何にも無理に見える。

橋掛り後側はコンクリート壁をむき出しにしたのは、正に觀客を妨げる。これは是非其破風にすべきた。それにこれだけの舞臺なら後側にも若松がほしい。場幕は今更に宝生会の場幕のよさを思はせ



①布池町・名古屋能楽会会館と②同舞台＝内藤泰二氏「眼」名古屋から引用

ないだけに、冬の事が心配だ。大天井は宝生会の如き独創的な採光法はとれなかつたにせよ格段が変な直線的な折上げ方で、ニス塗りの光り、鏡板の水色ペンキと共に少し品位が落ちた。これは宝生会の高く蛇腹で組み上げて舞臺屋根の高い部分を入れた方がいい。但しこの天井の形は音響効果の考慮があつたかもしれない。満員にも拘わらず見所中どこでもよく聞こえ過ぎる位で、聲殺敷といふ所はないようだ。むしろ看客の少ない場合には響き過ぎはせぬかとおもはれる。壁面はコンクリートと塗つただけだが、宝生会の如く木部や紙貼りの多い方が、感じもよく、音響吸収の効果もあらう。凡て観覧席の裝飾が舞臺と調和すべし日本化されてゐなく、況して宝生会の如く演能そのものと色彩上の調和にまで考へを及ぼしてないようだ。舞臺は明治年間出来た古いものを移したので屋根の照明もスッキリして良い舞臺である。柱間三間の橋掛りが見所の柱間に押されて非常に短いものになつた。それから鏡の間が乗り出してゐて、しかも橋掛りとの接触が歪形であるので、鏡の間の屋根の破風の形が如何にも無理に見える。

### 熱田神宮能楽殿演能案内

#### 名古屋異会大会

九月二十五日(土) 午前十時半始

熱田神宮能楽殿

- 【舞臺】「高砂」柴田美枝子、「経政」高柳京子、「草紙」金子恵津、「弓八幡」藤田光子、「桜川」永井喜美、「須磨源氏」長崎邦子、「七騎落」荒川優子、「東北」岩田幸子、「殿」大森尚人、「龍田」深美公美乃、「胡蝶」中村成利、「通小町」足立知子
- 【連吟】「加茂」川本マサ子、「森田俊枝」高木富美子、「玉井房子」安岡美智子、「小督」山内てる子、「荒川優子」依田桂子
- 【独吟】「藤戸」玉井道夫
- 【仕舞】「鶴亀」山田すみ子、「黒塚」柿野光子、「田村」清水達郎、「蟬丸」堀部子、「田村」広瀬久子、「嵐山」森田俊枝、「胡蝶」高木富美子、「養老」長崎三枝子、「班女」塚本照子、「花月」伴定子、「田村」山内悠太郎、「蟬丸」依田桂子、「杜若」玉井房子、「小歌」川本マサ子、「八島」沢田美枝子、「羽衣」桜井昌子、「殺生石」土岐静香、「藤」山本輝、「阿清」夏目哲子、「巻箱」鈴木木ます美、「杜若」加藤美知子、「黒塚」木村仁、「千手」織田哲也、「高野物狂」寺部一威、「龍太鼓」高田正代司
- 【番外仕舞】「天鼓」辰巳満次郎

- 愛知郡東郷町和合ヶ丘二一―一五  
TEL 〇五六一三九一―一四八七
- 戸田和方
- 名 古 屋 異 会
- 〔御来聴歓迎〕
- 主催 熊澤恵美子

### 猶惠会秋の大会

十月二日(土) 午前十時始

熱田神宮能楽殿

- 山 姥 熊澤恵美子 神谷千津 岡田晃一
- 隅田川 立花香寿子 日下すみ子 池内光之助 梅若基徳
- 大原御幸 梅若修一 梅若盛彦 岡田晃一 橋本雅一
- 木 賊 子方 立花香寿子 熊谷り江 梅若修一
- 草子洗小町 鈴木ふく 後藤孝一郎 鹿取希世
- 天 鼓 河合紀代美 後藤孝一郎 鹿取希世
- 源氏供養 谷 節子 後藤孝一郎 鹿取希世
- 自然居士 日下すみ子 後藤孝一郎 鹿取希世
- 菊 童 神谷千津 後藤孝一郎 鹿取希世
- 番外 定 家 熊澤恵美子







親世流・金剛流  
宗家本発行元

# 檜書店

〒101-0052 東京都千代田区神田小川町2-1  
電話 03(3291)2488 振替00130-7-3552  
〒604-0935 京都市中京区二条通麩屋町東入  
電話 075(231)1990 振替01010-0-113

# 能 楽 の 友

発行能楽の友社

名古屋市中種区千種2丁目18-18  
(郵便番号 464-0858)  
電話 (052) 731-7984  
FAX (052) 733-2837  
振替口座 00800-6-36393

購読料 1年 1100円  
郵送の場合 1年 1800円  
部 100円

## 演能カレンダー

### ◆名古屋能楽堂◆

- 〔10月〕
- 30日(土) 恵美寿会同門会発表会 (無料)
  - 31日(日) 恵美寿会同門会発表会 (無料)
- 〔11月〕
- 3日(祝) 幸友会福井啓次郎古稀記念 (無料)
  - 6日(土) 名古屋金春流友会 (無料) (番組①面)
  - 7日(日) 郁 譚 会 大 会 (無料) (番組②面)
  - 12日(金) 名古屋能楽堂定例公演 (有料) (番組②面)
  - 13日(土) 名古屋啓尚会大会 (無料) (番組②面)
  - 14日(日) 名古屋親世会定式能 (有料) (番組②面)
  - 20日(土) 山本博之27回忌追善会 (有料) (番組②面)
  - 21日(日) 名古屋宝生会定式能 (有料) (番組③面)
  - 23日(祝) 能を楽しむ会・名古屋公演 (有料) (記事①面)
  - 27日(土) 秋 の 清 謡 会 (無料) (番組③面)
  - 28日(日) 久田観正会秋季大会

### ◆熱田神宮能楽殿◆

- 〔10月〕
- 30日(土) 鳳 の 会 (有料)
  - 31日(日) 観 修 会 大 会 (無料)
- 〔11月〕
- 13日(土) 和 泉 元 彌 を 観 る 会 (有料)
  - 23日(祝) 名 古 屋 和 泉 会 別 会 (有料)

## 能「道成寺」景清

### 11月20日、名古屋能楽堂 山本博之27回忌追善会

親世流シテ方として能楽界の隆盛に大きな貢献をした山本博之師は昭和四十八年逝去されたが、こゝとし二十七日忌にあたり、山本追善会の主催により十一月二十日(土)名古屋能楽堂で「山本博之二十七回忌追善会」を催し、能「景清」小書小返、能「道成寺」小書赤頭が上演される。

「景清」は、シテ山本勝一、「道成寺」はシテ山本博通、舞囃子「経正」山本真義、一調「百子」河村真之介。

山本博通師は、昭和三十六年生れ。山本勝一師に師事、千歳、佐橋、乱、道成寺、恋之音取、望月を披く。名古屋正花会を主宰。

「道成寺」は赤頭の小書で、小鼓に京都より幸流・曾和正博師を迎えての上演。名古屋で幸流の鼓方が「道成寺」を務めるのは近年では見られなかったことである。

## 金剛流能「鉢木」上演

### 11月23日 宇高通成後援会 後援会 能を楽しむ会

能を楽しむ会、宇高通成後援会主催による「能を楽しむ会」は、名古屋では唯一の金剛流公演として期待されているが、きたる十一月二十三日(祝・火)名古屋能楽堂で名古屋公演が開催される。

能組は次のとおり。午後二時開演。

解説 岡山大学助教授 小野芳郎氏

仕舞「高野物狂」道行(松野共彦)「井筒」(金剛水護)「谷行」(豊嶋三千春)

能「鉢木」シテ宇高通成、ツレ種田道一、ワキ高安勝久、ワキツレ二階堂・飯富雅介、ワキツレ杉江元、橋元幸、西村信広、笛・竹市学、小鼓・柳原富司忠、大鼓・河村真之介

問・従者・野村又三郎、早打・野村小三郎

後見・金剛水護、広田幸俊、百々康治、地謡・豊嶋三千春、松野恭彦、田中敏文、熊谷伸一、漆垣謙次、塚本嘉樹、宇高通成、天野幸輔

入場券 一般五千円、学生二千五百円(全席自由席)、取扱所は出演楽師方、宇高通成後援会、問合わせ 名古屋景雲会事務局 局前組(まえぞわ)方、TEL FAX 052-852-2332

4、宇高通成後援会事務局 東京都左京区高野町40、TEL FAX 075-701-6793

## 恵美寿会同門会発表会

十月三十日(土) 午前十時始  
名古屋能楽堂

十月三十一日(日) 午前九時半始  
名古屋能楽堂

(能) 一日目(十月三十日)  
枕 慈 童 竹内喜代香  
半 若 森 峯子  
杜 若 鈴木マチコ

(能) 二日目(十月三十一日)  
西王母 千田梅枝子  
熊 野 鬼頭 京子  
舞囃子十八番、仕舞十七番  
素謡 九番、独吟三番

## 幸友会

十一月二日(文化の日) 午前十時始  
名古屋能楽堂

番外一調 屋 鳥 親世 喜正 幸 正昭

能 菊 慈 童 近藤 幸江 高安 勝久 寛 鉦一 鬼頭喜太郎  
清沢 一政 飯富 雅介 河村総一郎 助川 龍夫  
和合之舞 手嶋なみ江 鹿取 希世

ほかに囃子、連調など

福井社中  
主催 幸友会

## 名古屋金春流友会

十一月六日(土) 午前九時二十分始  
名古屋能楽堂

## 金春流能

十一月六日(土) 午後二時始  
名古屋能楽堂

仕舞 春井田難 日竜神 波村 波 組 高橋山 神一 安忍 地謡 伏原橋 徳一 孝司 二 汎 高 雄

## 二井栄逸師画抄集

### 平成12年能画カレンダー

ご好評を頂いております能画カレンダー2000年版。B3(タテ51.5cm×ヨコ38.0cm)表紙とも7枚の美麗カレンダーです。

●予約特価 1部1800円、郵送の場合送料共1部2200円(2部以上の場合、部数にかかわらず送料は一律600円、例・3部の場合送料とも6000円)

●予約申し込み期限11月20日(それ以後は部数によりお応えできない場合がありますのでご理解下さい)

●お申し込み方法 ハガキ又はFAXで部数明記の上当社へお申し込み下さい。代金は振替、切手、現金書留いずれでも結構です。

### 申し込み先 能楽の友社

名古屋市中種区千種2丁目18-18  
(郵便番号 464-0858)  
電話 (052) 731-7984  
FAX (052) 733-2837  
振替口座 00800-6-36393

〔有料〕五千円(正面指定席) 四千円(中正面指定席) 三千円(要学生証自由席)

主催 名古屋金春会 名古屋金春流友会 (社)金春円満井会

(五時四十分頃終了)

能 融 前シテ 金春 穂高 後シテ 金春 見実 舞 老笹六ノ 松段浦 仕舞 六ノ 段浦 後見 金春 穂高 飯富 雅介 河村真之介 福井啓次郎 助川 龍夫 鹿取 希世

付 祝 言 後見 金春 安明 地謡 伊藤 雄二 佐藤 俊之 小池 加藤 雅弘 高橋 山 神一 信之 正嗣 高橋 廣 忍

能 巴 本田 光洋 杉江 元 河村真之介 福井啓次郎 鹿取 希世 問狂言 佐藤 友彦 後見 横山 尚久 地謡 武馬 治三 小島 芳樹 吉場 俊之 清水 隆敬 高橋 安明 井上 河村 高 忍

狂言 苞山伏 山伏 大野 弘之 山人 井上 靖浩 後見 佐藤 友彦

郁 詠 会 大 会

十一月七日(日) 午前十時半始  
名古屋能楽堂

連吟 難波 名古屋大学観世会  
紅葉狩 名古屋大学観世会  
仕舞 屋島 宮口 由美  
羽衣 熊谷 晃子  
笠之段 岩永 徳子

素謡 弱法師 大島 修 赤尾 正  
舞囃子 養老 忍田チヨ子 河村真之介 助川 龍夫  
桜川 天野 到 河村真之介 竹市 学  
子方 上田 彰敏 祖父江修一 清沢一政 松山 幸親 門脇 千鶴 高安 勝久

素謡 安宅 杉江 元 寛 鉦一 鬼頭喜太郎  
舞囃子 葛城 名倉 恵子 河村真之介 助川 龍夫  
野守 伊藤 明美 河村真之介 助川 龍夫  
素謡 砧 渡辺 都子 上田 貴弘

能 鶴亀 高安 勝久 寛 鉦一 鬼頭喜太郎  
仕舞 龍田キリ 江川恵美子  
野宮 門脇 千鶴 渡辺 都子 豊島 慎一  
花籠ケセ

舞囃子 紅葉狩 石本 純子 河村真之介 鹿取 希世  
須磨源氏 水野 臣子 河村真之介 助川 龍夫  
船弁慶 中野 裕子 河村真之介 鹿取 希世  
番外舞囃子 天鼓 前野 郁子 河村真之介 鬼頭喜太郎  
仕舞 雲林院 久田 勘助 河村真之介 鹿取 希世

〔御来場歓迎〕  
主催 郁 詠 会  
前野 郁子

名 古 屋 能 楽 堂 定 例 公 演

十一月十二日(金) 午後六時三十分始  
名古屋能楽堂

狂言 鏡男 野村小三郎 野村又三郎 井上 靖浩 後見 松田 高義

能 朝長 飯富 雅介 河村真一郎 帆足 正規  
橋本 幸 柳原富司忠  
山本 正人 味方 玄 嘉夫

〔入場料〕前売一般三千五百円、学生二千円  
〔前売券取扱〕当日一般四千円、学生二千五百円  
〔名古屋能楽堂〕電話052・231・0088  
チケットぴあ チケットセゾン、市内プレイガイド

協賛 能楽協会名古屋支部  
協賛 能楽普及事業実行委員会  
名古屋市長 名古屋文化振興事業団

十一月十三日(土) 九時二十分始  
名古屋能楽堂

仕舞 高砂 池原 好昭  
菊慈童 嶺川 知永  
紅葉狩 赤尾 良子 大野 清美  
羽衣 栗田 鏡子 鷹野 恭子  
楊貴妃 渡辺智津子 西村 素子  
弱法師 国分 徳子 岩井 寿子  
花籠 嶺川 知永 石鏡 廣子 芝 美佐子

舞囃子 井筒 中島 明子 上野 義雄 森田 啓子  
班女 小式海夏子 後藤嘉津幸 森田 啓子  
素謡 隅田川 杉山友美子 高村 和海  
仕舞 松虫 中島 啓子  
紅葉狩 西川 順子  
梅枝 芝 美佐子  
卒都婆小町 平岡 勝子 加藤 和子 野口 初子

名 古 屋 能 楽 堂 定 式 能 (納会)

十一月十四日(日) 十二時半開演  
名古屋能楽堂

能 熊野 久保田 稔 文枝 江崎 敬三 後藤嘉津幸 森田 啓子  
浅野 文枝 吉岡 省吾 吉井 基晴 吉井 順一  
番外 放下僧 善知鳥 杉山友美子 上野 義雄 三島 啓子  
舞囃子 胡蝶 杉山友美子 後藤嘉津幸 森田 啓子  
邯鄲 高村 太郎 上野 義雄 三島 啓子  
船弁慶 杉山友美子 松岡 経代 鶴野 治子 竹下美美子

能 狸 祝言 早瀬 秀雄 江崎 敬三 上野 義雄 三島 啓子  
仕舞 岩船 山村 啓雄 後藤嘉津幸 森田 啓子  
主 催 尚 會  
名古屋千種区北千種二丁目三十一番八  
毎日マンスション二〇一  
電話(〇五二)七三二・二七六四  
連絡先(〇五二)七五二・二二二一(篠田宅)

養老 関根 祥人 観世 芳伸 高安 勝久 寛 鉦一 助川 龍夫  
雁大名 久田 勘助 地謡 須藤 保彦 中川 雅章  
後見 親世 曉夫 加賀 敏彦 中川 雅章  
狂言 井上 祐一 佐藤 弘之 後見 井上礼之助

通盛 武田 邦弘 本田 雅章  
江口 武田 志房 地謡 中川 勘助  
箆太鼓 梅田 邦久 古橋 正邦  
善界 親世 曉夫

藤戸 観世親之丞 宝生 欣哉 河村真一郎 藤田六郎兵衛  
大日方 寛 御厨 誠吾 福井啓次郎  
間 佐藤 友彦

〔有料〕  
当日券八千円(予約受付・制限あり)  
主催 名古屋能楽堂  
TEL 052・841・4632

山 本 博 之 二 十 七 回 忌 追 善 別 会

十一月二十日(土) 十二時半始  
名古屋能楽堂

能 組 山本 眞義 山本 順之  
山本 眞一  
山本 眞義  
山本 順之

田村 幸親  
江口 山本 眞義  
天鼓 河村 和重 地謡 高橋 昭一

景清 高安 勝久 寛 鉦一 助川 龍夫  
河村 信重 河村 信重 河村 信重  
河村 信重 河村 信重 河村 信重

地蔵舞 狂言 井上 祐一 佐藤 友彦 後見 井上礼之助  
鶴之段 梅田 邦久 河村 眞二 地謡 今村 一夫  
通小町 河村 眞二 地謡 今村 一夫  
藤戸 山本 順之 地謡 今村 一夫

道成寺 森本 幸治 河村真一郎 助川 学治  
中村 眞三 河村真一郎 助川 学治  
是川 正彦 河村真一郎 助川 学治  
野村 眞三 河村真一郎 助川 学治  
野村 眞三 河村真一郎 助川 学治

追加 狂言後見 井上 靖浩 佐藤 友彦 今村 一夫 梅田 邦久 河村 眞二 地謡 今村 一夫  
梅田 邦久 河村 眞二 地謡 今村 一夫  
梅田 邦久 河村 眞二 地謡 今村 一夫

〔入場料〕  
前売一般券一〇〇〇円(全席自由席)  
前売学生券五〇〇円(全席自由席)  
当日一般券一、二〇〇円(全席自由席)  
当日学生券六〇〇円(全席自由席)

◎申込所  
川久保影礼 〇五二・二二二一・二二二二  
山本 博通 〇六八・四九二・二五八  
六郎長事務所 〇五二・五七二・一六三  
チケットぴあ 〇五二・二二二一・九九九

主催 山本 追善会  
〔終了予定四時半〕

戦後名古屋能楽史 ③

名古屋能楽堂のこと 前史に代えて

竹尾 邦太郎

「注」(前号より)親世流片山博通(明治四十年(昭和十八年)の「名古屋能楽堂」の項。これは当時名古屋で独自に能の機関紙「能楽界」(B4二ツ折)を発行していた水野申三(明治廿九(昭和五年)宛の手紙形式をとって居り、差出人は宮田布子、筆名からも分かる様に軽妙洒落な筆致は二人の味な交友関係も窺えよう。申三は早速これを「能楽界」第四号(昭和六年六月一日刊)の一面に掲載するが、博通も後に自著「幽花亭隨筆」(昭和九年十一月検閲曲書店刊)の「匿名名のシイリス」の中に収録している。「申三」)

先日はゴッブレイしました。(これあなたの声よ。感じが出なかつたら、声をあげてお読みなさいね)おかげ様で大変愉快な一日を送りましたよ。感謝しますわ。本日は、もつともつと御馳走していただきありがとうございました。でも、あいに、あいたが、あいたで残念しましたわ。今度は、ウントコサ御馳走してくるわね。期待してよ。

能楽堂は断然シークよ。とてもステキぢやないの。帰りの汽車の中で博ッベエと話したの。あたし、あんなスマートな建物だと思つてなかつたのよ。それに、あれでせう。自動車を降りたとき、本場にチョット動じちゃったわ。一体、名古屋の人達、どうしてるの。もつともつと自慢しなけりや、うそだと思ふわ。今の所、全く、日本一のモダン能楽堂だ。申ちゃん、筆がもてるのだから、ドンドシお国自慢しなけりや駄目ぢやないの。

設計者の大きな手落ち―舞台の照明だわ。あれはゼロよ。今時、どんな劇場だって、ほんの補助にしか使つてゐない、フットライトを重要な光源にするなんて、問題外だわ。あのスポットのおかけで、面の感じがまるで消えてしまつてぢやないの。あれぢや、どんなにいい面を持って来ても駄目ですわ、お能の照明と云ふものは、普通劇場のとは、根本的に違ふものと思ふわ。お能の、どうして自然な太陽光線に準じて工夫されなければならぬのぢや

ないのかしら、尤も、能舞台上に工夫された照明と云ふものは、皆無なんだけれど……あれだけモダンな能楽堂なんだから、かうした所に、細心の注意と工夫がほしかつたと思ふわ。

いよいよ結論よ。誰でも、宝生会の能楽堂をモダンだと言ふけれど、あれは十九世紀の遺物でしかないわ。要に重々しくして、心に慰安を与へる場所ではないわ。それにありもしないお金を使つて、さもさぎやうさん相に見せる所など、下の下だわ。そこへゆくと、名古屋には、お金がないから、ないだけに、只、全力を尽くして作り出した。と、言ふ素直な感じがあふれてゐるの気が入つたわ。安物であると言ふ事もありありと見せてゐながら、すみずみまでゆきとどかして、無駄金をはぶいてゐる所、正に百パーセントのモダン味だわ。

調子にのつて、変な気遣いをつけて御免なさいね。ぢや、失敬ッ。ブラボオ、名古屋モダン能楽堂、ブラボオ。(一九三二・五・二九)

因に水野申三は親世流シテ方林蔵の末弟で、大倉流大鼓永田虎之助に師事し、香椎貞二の芸名で大正末から昭和初期にかけて主に「保能会」で能千数番を勤めてゐる。さて、ことほどさうやうに名古屋能楽堂は全国垂涎の的であつたのであり、この大工事に関わつた関係者一同の得意と誇りは想像に難くないが、時代はようやく風雲急を告げ、昭和六年(一九三一)九月一日八日滿州事変勃発以来第二次

世界大戦へと戦に軍日無き有様で戦火は拡大し、そして敗色濃厚となつて終戦に向かつてゐる矢先の昭和廿年(一九四五)三月十八日、十四年の間名古屋が全国に誇つた中部能楽界の一大拠点名古屋能楽堂も、折からの空襲で灰燼に帰してしまつた。瓦礫と化した焼土に立ちつくした関係者の失望落胆はいかばかりであつたらうか。これ以後、名古屋の能楽界は演能の場を求めて苦難の道歩き続けることになるのであるが、能楽堂再建に向けての強烈な願いを呼び醒めさせたのである。先人達の御苦労を思はずにはいられない。

大規模能楽堂の自主公演能

平成12年能画カレンダー

入場料当日券一般四三〇〇円、学生二八〇〇円

二井栄逸師画

カレンダー

予約受付中

社団法人大規模演能会能楽堂主催

十一月十九日(金) 狂言「粟阿弥」(茂山千之丞) 能「碓」(親世流之丞)

十一月二十日(土) 午後二時 始、狂言「寝音曲」(茂山千作) 能「松風」(泉嘉夫)

十一月二十一日(日) 午後六時半 始、狂言「抜杖」(茂山忠三郎) 能「小鍛冶」(斎藤信隆)

世界大戦へと戦に軍日無き有様で戦火は拡大し、そして敗色濃厚となつて終戦に向かつてゐる矢先の昭和廿年(一九四五)三月十八日、十四年の間名古屋が全国に誇つた中部能楽界の一大拠点名古屋能楽堂も、折からの空襲で灰燼に帰してしまつた。瓦礫と化した焼土に立ちつくした関係者の失望落胆はいかばかりであつたらうか。これ以後、名古屋の能楽界は演能の場を求めて苦難の道歩き続けることになるのであるが、能楽堂再建に向けての強烈な願いを呼び醒めさせたのである。先人達の御苦労を思はずにはいられない。

名古屋宝生会定式能 (第43期)

十二月二十一日(日) 午後一時始

能 経 政 飯富 雅介 河村真之介 福井啓次郎 大野 誠

狂言 萩大名 佐藤 融 後藤 助 井上 靖浩

仕舞 三輪 盛 辰巳満次郎 地謡 三橋 茂三 伊藤 温通 馬場 富四郎 和久 莊太郎

能 鼓 高安 勝久 河村総一郎 助川 龍夫 柳原富司忠 鹿取 希世

後見 辰巳 孝 地謡 杉浦 唯雄 大松 三郎 織田 哲也 当山 孝道 寺部 一威 鬼頭 正宣 嘉男

附 祝 言 祝 言 祝 言

主催 名古屋宝生会

事務所 名古屋市天白区島田二一三〇一 島田橋住宅二一三〇一 電話 FAX 〇五二一八〇三三七二

NHK放送予定 (平成11年10月~11月) (日曜日午前8時~9時)

秋の清謡会 (第22回)

十一月二十七日(土) 午前九時半始

番外 菊慈童 清沢 一政 本田 勲

素謡 小督 今川 米子 中村 正一 柴田 嘉彦

雨月 山本 博子 三輪 藤枝 高橋 千晴

通小町 川出美英子 玄 象 片野 光子

仕舞 朝長 小栗知津子 田中 小浪 高島 順子 奥村 小浪 山内 志野 鬼頭 和子

運吟 高砂 金井 邦夫 小鍛冶 西野 志保

花 笹 高橋 千晴 熊 坂 金原 孝典

龍田 今川 米子 河村真之介 助川 龍夫 後藤嘉津幸 竹市 学

須磨源氏 林 和子 柳原富司忠 鹿取 希世 加藤 茂代 神山きよ子 鬼頭みゆき

TEL 〇五六四・五二・六九〇九 補佐 梅田 邦久

能楽至高の秘曲「関寺小町」

名古屋にて享保七年(一七二二)以来の上演

福井啓次郎古稀記念

第十一回 濤華能

幸友会別会鑑賞能

十二月十八日(土) 午後一時半始 名古屋能楽堂

能 組

關寺小町のお話

東京国立文化財研究所 音楽舞踊研究室長 羽田 飛

舞臺子

松山天狗 梅若 六郎 幸 魚井 広忠 鬼頭喜太郎

一調 蟬丸

梅若 靖記 幸 清次郎

熱田神宮能楽殿演能

壺 泉 会 能

十二月十二日(日) 午後一時始 熱田神宮能楽殿

狂言 胸 突

野村小三郎 何某 野村又三郎 後見 佐藤 融

仕舞 花 筐

大槻 文蔵 地謡 三島 憲 齊藤 嘉隆 泉 嘉夫 波多野 晋 山本 正人

能 山 姥

飯富 雅介 河村真之介 鬼頭喜太郎 橋本 幸 福井啓次郎 大野 誠

後見

近藤 幸江 地謡 八神 博 山本 正人 波多野 晋 鶴 孝充 齊藤 嘉隆 武富 康之 赤松 慎英

(入場料)

一般六千円(全席自由席) 主催 壺 泉 会 学生券二千円 名古屋市中区和区山手通 3-18-2 31306

チケット取扱いは市内各ブレイガイド 熱田神宮能楽殿(☎052・682・1751) 出演者宅、泉宅(☎052・832・3185)

能 關寺小町

山中 恭品 梅若 恭行 宝生 閉 坂苗 欣哉 大日向 寛融 福井啓次郎 藤田大五郎

特別席

(正面) 一万五千円 (中正面) 一万三千円 (脇正面) 一万円 (正面) 八千円

主催 福井啓次郎 幸友会

前売入場券 特別席(正面) 一万五千円 指定席(脇正面・中正面・正面) 一万円 自由席(脇正面・正面) 八千円 当日券 自由席 一万二千円 (特別・指定席残券あれば二千円増)

取扱い ブレイガイド(松坂屋・三越・名鉄・中日・芸文) 各楽師宅 お申込み 名古屋市中区大須三丁目2番40号 福井啓次郎 電話(☎052-241-1314) FAX(☎052-241-1315)

夏の名残の舞台から

「花傳の會特別公演PART1」と

「第四回花傳の會お盆特別公演」

「第五回大槻文蔵の會」

竹尾邦太郎

新作能「鷹姫」 孤島の濡れた 井泉に湧水を待ち続ける老人シテ 暁夫(石王尉・白垂・襟浅黄・茶 萌黄段襟に龍ノ丸文縫箔・茶縹水 衣) 乙女が独り守る、終の望み に応えよう井泉の水を希求する 波斯国の王子空賦麟ワキ和幸 (直面・唐防止・襟紺・金松皮菱 地紋赤黒段鳳凰ニ牡丹文厚板・敷 石文半切・側次・剣) 井水を守 る乙女、実は人の敬滅を待つ魔性 の鷹の化身鷹姫ツレ博通(泥濁、 襟白浅黄・襟箔・黒地丸文縫箔 腰巻・赤地鱗散シ火焔太鼓文舞衣 道折) 黒頭巾に仮面、十個の岩 が集まりイメジされる不毛の岩 だらけの鳥コソ地謡(七五三・ 千三郎・晋・清司・信隆ら) 囃 子(六郎兵衛・源次郎・哲也・ 悟) 後見(文蔵・雄三・慎

かれて不毛の岩だらけ、鷹姫は岩に君臨する女王、泉の精と云えるだろう。泉の湧くは、いつの時ぞ、と老人が問えば、左袖返すと同時に居立つ鷹姫からのテレパシィへや、鷹が鳴く、と空賦麟。否定する老人に、「いや鷹の叫びよ、と切り返す空賦麟に要然と鳴る太鼓が利き、鷹姫は羽織いをするかに左袖を戻し右袖を颯と外へ返す。鷹の叫びを乗る前に鳥を去れと空賦麟を諭す老人、立ち上がる鷹姫は、血の流れ狂へば、と台を下りてイロエから老人を指して膝行すれば、老人は金縛りで人形振りの様に立ち、空賦麟の声を残して貴人から消える。

秘曲の会「太鼓の世界」 囃子方のデモンストレーションとして 天下に名高い六郎兵衛主宰によるお盆の名物催しの終回、親世流から元伯・佐七、金春流から和相・光長が参加。舞の中の二流の相違を「一」で隆之(富司忠・広忠)に佐七と和相の競演で、謡の中で相違を榮夫・文蔵の謡で「船弁慶」(悪逆無道の、から終り迄を) 笛を抜き、源次郎・信行・元伯と富司忠・大・光長、二組の同時演奏で聞き比べるのが呼び物。掛声、構えなど流石にこの時だけは一目瞭然然、寸法に狂い無くピタリ終わるのは和相と光長の連調「出端」(笛・市利)も同じ、流儀の主眼という特色も見えて面白。アンコールに答えて「獅子」は當三流・小鼓二流・大鼓三流、太鼓二流の総勢十名の演奏、超弩級の迫力と言えようか。(八月十日・第四回花傳の會お盆特別公演初日)

新作能「蛙ヶ沼」 戦前の岩波文庫、トマス・バルフィンチ作、野上弥生子訳「希臘羅馬神話・伝説の時代」の第四章、「濁きに水を乞う神レトに、里人は拒絶するばかりか沼に入り泥を捏ね廻す。怒ったレトは彼らに、この沼で一生を送るがいい、と呪いをかけ蛙にしてしまふ」という「レトと里人」から若年の堂本正樹が取材して作る。型・筋付は大槻文蔵、五十五年ぶりに錫の目を見る本曲は原作の後日譚といえる。

沼の謂れを語り、蛙ノ精と明かして消える。巫女は囃子方の後ろにクツロギ、アシラヒ間(アイ)の劇中劇になる。切戸から老蛙(七五三)が飛び出して午睡から醒めると、華から出た里人(宗彦)が慰みにスミで一杯やるところへ纏わりつく。里人はそれが変わわり果てた祖父とは露知らず、足蹴りにして帰へ追い込む。

愛蘭の詩人・劇作家W・B・イーツの「鷹の井戸」を横道萬里雄が脚色、親世流夫節付、大槻文蔵が演出する。

「若手グループ競演」 「響」 弘美・晴祐・達志・哲也・由調、と「鏡座」誠・嘉津幸・真之介、團・小三郎、が舞囃子「高砂・八段ノ舞」シテ團、半能「井筒」シテ博通・アイ小三郎、舞囃子「土蜘蛛」シテ慎英・ツレ康之、など囃子をジャンケンで決める趣向。楽しみながら皆真摯に勤め感動。既に解散したが前の世代の「ツクスマ」六郎兵衛・源次郎、正之助・悟の賛助演奏(?)は「道成寺」の囃子のエッセンスを集めるツクスマ・オリジナルの「道成寺組曲」、若に負けるか、ばかりの熱演は、就中正之助の、

「響」の好演が忘れられない。直面・白地金立源文大口・萌黄単法被、襟の赤が初々しい。琵琶の音色を慕い現れ、ワキの行慶と問答になるところ、詞は明晰、クセ切へあら名残惜しの夜遊やな、のサシ込開キからカケリへの気分は少年の胸の昂ぶり、キリの修羅道の苦思もいつそ凛々しく爽やかだった。(32分)

後場は、千年に一度の、その一日だけの人と蛙の交感、懺悔と苦悶の姿を蛙ノ精(文蔵)はリアル過ぎる程に見せる。正先に膝着いて左手をかざし、水鏡に驚愕して退きやりがっくり安座の落胆に、身を案じ松明をかざすは人、しかし遠ざかる松明、へ影違々と、見送るは今人は人非ず見捨てられた蛙、ワキ正へツツツと行き、遠く幕へ見込むのも悲しい。伏し転び声を限りに叫べども、と退り作物前、右膝着き扇で激しく地(床)を打つは絶望、父を慕い戻って探す一人子も、沼にへざるずと引き込まれ、と目付柱に縋りつつ沈んでゆくのも哀れである。更には夫と我が子を奪った沼に幻を見て踏み入り、空しくなった妻の故を抱きかかえる体に被衣を抱き、白骨と、変わる姿を浴々見る辺りも切ない。救いを求め両手を上げて巫女へ走り、巫女の両手を取るところも凄まじく、キリに一旦沼(作物)に入って再び出ると、今度は後退りに入って水草の茎に纏る体に柱に縋り沈むところ、などは異色、中に蛙ノ精の居るまま引廻しが元通りに上げられ、巫女が退いた後を見(拓司・康之)が笛のアシラヒで作物を引いてゆき、幕に入ると再び切地が謡われる(信之・利之ら)中を囃子方(六郎兵衛・晴祐・哲也)も退き、トメになる。

何事もなく出た鷹姫、大小前井泉を藉る半畳台上安座、岩は貴人口から出る。無言の鷹姫に口を利けと切願する老人、そこへ割り込む空賦麟。鷹はこの老人のもの、と老人が執心を示せば、鷹姫を代弁する岩の声は、泉は鷹姫のもの、山のすだま鷹姫のもの、と大合唱で反発する。「すだま」は「魍魎」、山林の木から生ずる怪物で人面獸身、よく人を騙すという。「気」は「水分」か、万物は水から生まれるという。その水分を一身に集められて生まれた「すだま」が鷹姫なら、孤島は水分を抜

「響」の好演が忘れられない。直面・白地金立源文大口・萌黄単法被、襟の赤が初々しい。琵琶の音色を慕い現れ、ワキの行慶と問答になるところ、詞は明晰、クセ切へあら名残惜しの夜遊やな、のサシ込開キからカケリへの気分は少年の胸の昂ぶり、キリの修羅道の苦思もいつそ凛々しく爽やかだった。(32分)

「響」の好演が忘れられない。直面・白地金立源文大口・萌黄単法被、襟の赤が初々しい。琵琶の音色を慕い現れ、ワキの行慶と問答になるところ、詞は明晰、クセ切へあら名残惜しの夜遊やな、のサシ込開キからカケリへの気分は少年の胸の昂ぶり、キリの修羅道の苦思もいつそ凛々しく爽やかだった。(32分)

「響」の好演が忘れられない。直面・白地金立源文大口・萌黄単法被、襟の赤が初々しい。琵琶の音色を慕い現れ、ワキの行慶と問答になるところ、詞は明晰、クセ切へあら名残惜しの夜遊やな、のサシ込開キからカケリへの気分は少年の胸の昂ぶり、キリの修羅道の苦思もいつそ凛々しく爽やかだった。(32分)



# 観世流・金剛流 宗家本発行元 檜書店

〒101-0052 東京都千代田区神田小川町2-1  
電話 03(3291) 2488 振替00130-7-3552  
〒604-0935 京都市中京区二条通麩屋町東入  
電話 075(231) 1990 振替01010-0-113

# 能 楽 の 友

## 発行能楽の友社

名古屋市千種区千種2丁目18-18  
(郵便番号 464-0858)  
電話 (052) 731-7984  
FAX (052) 733-2837  
振替口座 00800-6-36393

購読料 1年 1100円  
郵送の場合 1年 1800円  
— 部 100円



朝日狂言会で観名披露の「才宝」を演ずる井上菊次郎氏  
平成九年七月十三日・名古屋能楽堂

### 狂言共同社代表 和泉流 井上菊次郎氏逝去

10月22日 告別式を執行

和泉流狂言方・狂言共同社代表、井上菊次郎氏は、十月十八日午前十時三十分、肺炎による心不全のため逝去した。享年八十五。告別式は十月二十二日正午から名古屋千種区内山一丁目の平安会館今池斎場で執り行われた。喪主は長男・祐一氏。

映とともに、狂言共同社所蔵の装束が展示され、生前の活躍をしのび、告別式には、能楽協会名古屋支部を代表して泉嘉夫支部長が弔辞を捧げ、故人の活躍をたたえ冥福を祈った。

故井上菊次郎氏(本名・井上重兵衛)は大正三年名古屋に生まれ、五歳のとき「親流」で初舞台、和泉流狂言師として活躍、名古屋狂言共同社代表として斯界の興隆と

### 狂言共同社代表 和泉流 井上菊次郎氏逝去

10月22日 告別式を執行

映とともに、狂言共同社所蔵の装束が展示され、生前の活躍をしのび、告別式には、能楽協会名古屋支部を代表して泉嘉夫支部長が弔辞を捧げ、故人の活躍をたたえ冥福を祈った。

## 歳末助け合い運動

# 能 賛 協

能楽協会 12月5日公演  
名古屋支部

能楽協会名古屋支部(泉嘉夫支部長)主催による平成十一年度の歳末助け合い運動協賛能は、十二月五日(日)名古屋能楽堂で、観世流、宝生流による能三番、和泉流狂言、金春流、金剛流舞囃子、喜多流、観世流の仕舞など協会名古屋支部能楽師の出演で開催される。

この歳末助け合い運動協賛能は毎年能楽協会名古屋支部の主催で行われ、今回は第三十一回目となる。昨年は愛好者の協力により、愛知県、名古屋市へそれぞれ二十七万七千五百円、合計五十五万五千円が寄付された。

演能は、観世流能「巴」(シテ松山幸親) 宝生流能「龍太鼓」(シテ玉井博祐) 観世流能「恋重荷」(シテ梅田邦久、ツレ近藤幸江) 狂言「骨皮」(野村小三郎、野村又三郎ほか)

金春流舞囃子(加藤正嗣) 金剛流舞囃子「自然居士」(竹市幸司) 仕舞は観世流「巻箱」(生駒里翠) 「小鍛冶」(三村恵子) 喜多流「天鼓」(長田郷)

午前十一時開演、入場料前売り二千五百円(当日三千円) 学生千五百円

前売場所は市内ブレイカイド、チケットぴあ、チケットセン、出演者 (番組②面)

## 演能カレンダー

### ◆名古屋能楽堂◆

- [11月]
  - 23日(祝) 能を楽しむ会・名古屋公演 (有料)
  - 27日(土) 秋の清謡会 (無料)
  - 28日(日) 久田観正会秋季大会 (無料)(番組①面)
- [12月]
  - 4日(土) 竹謡会名古屋大会 (無料)(番組①面)
  - 5日(日) 能楽協会名古屋支部主催 歳末助け合い運動 協賛能 (有料)(番組②面)
  - 11日(土) 中国江蘇昆劇団名古屋公演 (有料)(番組③面)
  - 12日(日) 中国江蘇昆劇団名古屋公演 (同上)
  - 18日(土) 福井啓次郎古稀記念 第11回湧華能 (有料)(番組③面)

### ◆熱田神宮能楽殿◆

- [11月]
  - 23日(祝) 名古屋和泉会別会 (有料)
- [12月]
  - 12日(日) 壺泉会能 (有料)(番組③面)

## 久田観正会秋季大会

十一月二十八日(日) 午前九時半始  
名古屋能楽堂

素謡	松風	仲村 スミ	村井すみ子
舞囃子	山姥	前野 郁子	橋本 清
舞囃子	櫻川	仁科 初夫	柳原富司忠
舞囃子	熊野	河井 満子	柳原富司忠
舞囃子	玄象	中井 牧子	寛 敏一
舞囃子	藤戸	丸山 敏子	岡田 信道
舞囃子	景清	トモ瀬戸 洋子	小池 房子
舞囃子	恋重荷	大竹富三江	羽柴 秀一
舞囃子	百万	仲村 スミ	寛 敏一
舞囃子	定家	岡田 信道	柳原富司忠
舞囃子	通小町	後藤 玲子	寛 敏一
番外仕舞	碓前	浦田 保利	竹市 学

## 能 半 部

素謡	求塚	吉田 勝巳	河村真之介
舞囃子	俊寛	坂井 満	久田 勘助
舞囃子	高砂	近藤登古代	河村真之介
舞囃子	忠度	大場はま子	河村真之介
舞囃子	雲林院	中村 萩枝	河村真之介
番外仕舞	附祝言	女郎花	久田 勘助

## 竹謡会名古屋大会

十二月四日(土) 午前九時十五分始  
名古屋能楽堂

素謡	経正	高 砂	古橋 正邦
舞囃子	鞍馬天狗	大島 純子	安永 勝政
舞囃子	車僧	大西 恵子	河下 太勇
素謡	恋重荷	石原 文字	井岡 和彦

## 安宅

舞囃子	紅葉狩	井上いく子	河村真之介
舞囃子	雲林院	藤田 隆郎	柳原富司忠
舞囃子	野宮	宮本 享子	竹市 学
舞囃子	熊野	尾崎 敏子	中村 義彦
舞囃子	安宅	江口 三男	江口 三男



# 戦後名古屋能楽史 ④

## 名古屋能楽堂のこと

第一章

### 受難のときを迎えて

(昭和二十年)

廃墟と化した中、名古屋の能楽界も閉塞したかにみえた。能役者の中には、兵役に召集されて或いは戦死し、或いは外地に抑留されて戻らぬ者もあり、世情からみても能楽界の復興は覚束ない状態であった。しかし、焼土の中に在って庶民は打ち拉がれたままに居たわけではなかった。そのバイタリティは凄まじく、復旧の雄音は先ず進駐軍向けの娯楽施設・慰安設備の充実に向けられた。昭和二十年八月二十五日、終戦記念日の十日後に松坂屋本社は「新時勢に対処する方針」を通告し、早くも一週間後の九月一日には復興に着手する。娯楽・慰安施設の充実とは、ホール・屋上庭園・クラブの修復

免れ、東京出張の帰り、名古屋の松坂屋の中に出来た進駐軍専用キヤバレーを見て脱サラしたんだ。「退職金は要らんから、名古屋支店(富国生命)の地下を貸してくれ」と。キヤバレー赤玉会館を始めた。場所は今の栄東急イン。一年後、広い所へ移し、パチンコにした。これも大当たり。「昭和六三年三月二十八日付朝日新聞「インタビュー」欄より」

また昭和二十年九月十一日付の中部日本新聞は「被爆八十回・闘ひ抜いた魂・お城も焼けたが……復興へ躍起」と見出しで報じている。因に同紙に掲載された名古屋被爆の数字は、全焼十一万四千八百九十二戸・半焼四千六百二十四戸・全壊八千二百八十七戸・半壊八千七百五十三戸・死者約八千二百四十名・重軽傷一万七千七百一十名・罹災者四十九万五千二百二名である。

この年、能・狂言関係の記事は皆無に近いが、十月三日ひっそり死亡記事が載った。「豊嶋要之助氏(高安流臨方) 東京で戦災にあひ広島市に帰省中令弟文二氏と共に八月六日の原子爆弾のため焼死が確認せられた」と。死後五十九日を経ていた。(つづく)

# 「道成寺」連続公演

大槻文蔵・梅若六郎・観世清和諸師来演

明春1月～3月 名古屋能楽堂

花伝の会 (藤田六郎 兵衛事務所、中部日本放送、中日新聞社の主催で、明年一月、二月、三月と三回にわたる、名古屋能楽堂で「道成寺」の連続公演が行われる。とくにその第一回(一月二十一日公演)には、平成四年の上演曲「鐘巻」(かねまき)が上演される。

道成寺の連続公演の日程は次のとおり。  
 [平成十二年一月二十一日(土)午後二時開演]  
 復曲能「鐘巻」(シテ大槻文蔵、ワキ中村弥三郎)  
 [二月十六日(土)午後六時開演]  
 狂言「蝸牛」(野村又三郎ほか)  
 能「道成寺」小昔替装束(シテ梅若六郎、ワキ宝生團)  
 [三月二十八日(火)午後一時三十分開演]  
 お話 馬場あき子氏(歌人) 能「道成寺」小昔・赤頭・中之段数調、無鬚之崩・五段之舞(シテ観世清和、ワキ梅若六郎)

入場料(全指定席・税込) A席一万五千円、B席一万一千円。取り扱いは、チケットぴあ、市内各プレイガイド、藤田六郎兵衛事務所(電話052・571・6341)

## 演能案内

### 中国江蘇昆劇団名古屋公演

十二月十一日(土) 午後六時開演  
 十二月十二日(日) 午後二時開演

夜遊街 沈王景「義侠記」より  
 秋江 湯頭祖「牡丹亭」より  
 訪鼠 朱素臣「十五貫」より  
 遊街 高濂「玉簪記」より

### 歓迎公演

狂言 船渡聲

野村又三郎 野村小三郎 野村三郎 野村三郎 野村三郎 野村三郎

名古屋文化振興事業団 愛知芸術文化協会 名古屋文化振興事業団文化事業部 (052) 265-2141

名古屋文化振興事業団 (052) 265-2141

名古屋文化振興事業団 (052) 265-2141

名古屋文化振興事業団 (052) 265-2141

## 能楽至高の秘曲「関寺小町」

名古屋にて享保七年(一七二二)以来の上演

### 福井啓次郎古稀記念 第十一回 濤華能

幸友会別会鑑賞能

十二月十八日(土) 午後一時半始 名古屋能楽堂

関寺小町のお話 東京国立文化財研究所 音楽舞踊研究室長 羽田 昶

能組 松山天狗 梅若 六郎 幸 正昭 藤田朝太郎 亀井 広忠 鬼頭喜太郎 幸 正昭 藤田朝太郎

### 関寺小町

一調 蟬丸 梅若 靖記 幸 清次郎

山中 景品 梅若 恭行 宝生 閑 福井啓次郎 藤田大五郎 坂苗 欣哉 大日向 寛

後見 山中 義法 小田切康陽 赤瀬 雅則 山本 勝一 山崎 正道 梅若 晋矢 梅若 靖記 河村 信重 梅若 六郎 山本 博通 波多野 晋

主催 福井啓次郎 幸友会

## NHK放送予定 (平成11年11月～12月)

●NHK・FM能楽鑑賞(日曜日午前8時～9時)	(11月) 28日「落葉」(金剛流) 廣田隆一ほか
	(12月) 5日「弱法師」「籠太鼓」(観世流) 藤波重和ほか
	19日「巻絹」「阿彌」(宝生流) 今井泰男ほか
	12日「葛城」「養老」(喜多流) 香川靖嗣ほか
	26日「鶴鶴小町」(観世流) 浦田保利ほか
●NHK教育テレビ・能狂言番組	
やさしい能・狂言鑑賞入門(再放送)	
第1回	12月4日(土) 7日(火) 「能楽堂に行ってみよう」
第2回	12月11日(土) 14日(火) 「能面・能装束をつけてみよう」
第3回	12月18日(土) 21日(火) 「能を舞ってみよう」
第4回	12月25日(土) 28日(火) 「狂言で笑ってみよう」
	(第5回平成12年1月8日(土) 11日(火) 「狂言と演劇をくらべてみよう」)
放送時間	土曜日 12:30～13:00 NHK教育テレビ 火曜日 5:25～5:55 NHK教育テレビ
出演	粟谷 菊生 (喜多流能楽師/第1～3回講師) 野村 萬斎 (和泉流狂言師/第4、5回講師) 生稲 晃子 (聞き手)

## 熱田神宮能楽殿演能

十二月十二日(日) 午後一時始

壺泉会能 熱田神宮能楽殿

狂言 胸突 野村小三郎 何某 野村又三郎 後見 佐藤 融

仕舞 花筐 大槻 文蔵 地謡 三島 齊藤 嘉隆 泉 雅一郎 飯富 雅介 河村真之介 鬼頭喜太郎 泉 嘉夫 橋本 幸 福井啓次郎 大野 誠

後見 近藤 幸江 地謡 黒田 八神 博 波多野 晋 武富 康之 赤松 信英

(入場料) 一般六千円(全席自由席) 主催 壺泉会 学生券二千円

名古屋市中区昭和区山手通 3-8-12 306 熱田神宮能楽殿 (052) 3185-1751 出演者宅 泉宅 (052) 3185-3185

前売入場券 特別席(正面)一万五千円 指定席(臨正面・中正面・正面地裏)一万円 自由席(臨正面・中正面・正面地裏)一千元

当日券 自由席 一万二千元 (特別・指定席残券あれば二千元増)

取扱い プレイガイド(松坂屋・三越・名鉄・中日・芸文) 各楽師宅

お申込み 名古屋市中区大須三丁目2番40号 福井啓次郎 電話(052) 214-1314 FAX(052) 214-1315

お問合せ 名古屋市中区大須三丁目2番40号 福井啓次郎 電話(052) 214-1314 FAX(052) 214-1315







# 観世流・金剛流 宗家本発行元 檜書店

〒101-0052 東京都千代田区神田小川町2-1  
電話 03(3291)2488 振替00130-7-3552  
〒604-0935 京都市中京区二条通麩屋町東入  
電話 075(231)1990 振替01010-0-113

# 能楽の友

発行能楽の友社  
名古屋市千種区千種2丁目18-18  
(郵便番号 464-0858)  
電話 (052) 731-7 9 8 4  
FAX (052) 733-2 8 3 7  
振替口座 00800-6-36393  
購読料 1年 1100円  
郵送の場合 1年 1800円  
— 部 100円

## 演能カレンダー

### ◆名古屋能楽堂◆

- (平成12年1月)
- 3日(月) 名古屋能楽堂定例公演(有料)(番組①面)
  - 8日(土) 名古屋能楽鑑賞会(有料)(番組①面)
  - 9日(日) 名古屋学生能楽連盟主催  
第44回学生会・狂言の会(無料)
  - 10日(祝・成人の日) 名古屋清韻会(無料)(番組②面)
  - 22日(土) 花伝の会(有料)(番組②面)
  - 23日(日) 万作を観る会(有料)
  - 30日(日) 狂言風の会第23回公演(有料)(番組③面)
- (2月)
- 5日(土) 青陽会定式能(有料)(番組③面)
  - 13日(日) 名古屋観世会定式能(有料)(番組③面)
  - 16日(水) 花伝の会「道成寺」公演(有料)
  - 18日(金) 名古屋能楽堂定例公演(有料)
  - 20日(日) 名古屋観世九皇会定期能(有料)

### ◆熱田神宮能楽殿◆

- (平成12年1月)
- 3日(月) 能楽協会名古屋支部初式  
(協会能楽関係者のみ)
  - 23日(日) 名古屋宝生会(有料)

## 有終飾る 名古屋能楽鑑賞会 新春第20回公演で終会

から鑑賞会を開催。流派、流儀、流派を問わず名曲、稀曲、復曲など多彩な演能企画により愛好者の強い関心と新しい話題をつくり出して来た。代表者の岩田はるみ氏は、毎回熱心にお集まり下さった会員の方々、熱い志でこ来演頂いた演者の方々と、見所と舞台と一緒になつて作り出した名舞台を決して忘れません。有難うございました」と閉会にあたって感謝のこぼしを述べている。

### 大阪梅猶会 定期能新春能

1月16日 大阪能楽会館  
平成十二年新春第一回・大阪梅猶会定期能は、一月十六日(日)大阪能楽会館で開催する。午前十一時始。「神歌」梅若喜高

### 面紹社能面展

能面研究会「面紹社」(主宰保田紹雲氏)は、新春一月六日から三十日まで名古屋市鶴舞中央図書館一階展示場で「新春能面展」を開催する。休館日は毎週月曜日と第三金曜日、祝日振替日の一月十一日。

## NHK 放送予定

(平成11年12月～平成12年1月)

- NHK・FM能楽鑑賞(日曜午前8時～9時)  
(12月) 26日 「鶴越小町」(親世流) 浦田保利ほか  
(1月) 9日 素謡「当麻」(親世流) 親世喜之ほか  
16日 番囃子「田村」(金春流) 金春信高ほか  
23日 番囃子「郎郷」(宝生流) 近藤乾之助ほか  
30日 狂言「武悪」(大藏流) 茂山千之丞、山本東次郎ほか
- NHK・FM新春能楽狂言  
1月2日(日) 午前11時～11時50分  
番囃子(親世流)「風島」シテ親世流之丞  
ワキ森常好ほか  
1月3日(月) 午前11時～11時50分  
狂言(大藏流)「穉穉」善竹忠一郎ほか  
狂言(和泉流)「夷毘沙門」野村又三郎ほか

## 名古屋能楽堂正月特別公演

平成十二年一月三日(月)午後二時始  
名古屋能楽堂

能「忠度」梅若喜久  
狂言「牛馬」善竹隆司  
能「熊野」梅若盛義  
能「海士」井戸和男  
定期能回数券(四回分)一万六千円。一般前売券四千五百円(当日五千円)、学生前売券二千五百円(当日三千円)  
お問い合わせは、豊中市新千里南町三十一-八一二、梅若喜高方  
梅猶会定期連絡所(電話06・6831-7854)

能「翁」三番夏 野口隆行 大鼓 河村真之介  
松田 高義 和久莊太郎 後藤嘉津幸  
千歳 柳原富司忠 竹市 学  
能「翁」 後見 宝生 英照 久野 幸三 水上 輝和  
佐野 登 稲川 耕司 寺井 良雄  
狂言後見 野村小三郎 地謡 佐藤 寿一 東川 光夫  
佐藤 融 鬼頭 嘉男 東川 光夫

能「羽衣」久田 勘助 杉江 元 河村総一郎 助川 龍夫  
和泉流 高安 勝久 福井 良治 鹿取 希世  
相元 正樹

能「餅」主人 野村又三郎 太郎冠者 野村小三郎 靖浩  
後見 井上 靖浩

能「入場料」  
前売一般 四千五百円  
学当 二千五百円  
当日一般 五千円  
学生 三千円  
前売取扱い 名古屋能楽堂(052・231・0088) チケットび  
あ(320・9999) 市内各プレイガイド

## 名古屋能楽鑑賞会公演

一月八日(土)午後一時半始  
名古屋能楽堂  
解説 国立文化財研究所・羽田 昶  
音楽舞踊研究室長

復曲狂言 若菜 大名 山本東次郎  
大鼓 安福 建雄 大倉源次郎  
大鼓 一上 増田 仙幸  
大鼓 加藤 寛治

大鼓 安福 建雄 大倉源次郎  
大鼓 一上 増田 仙幸  
大鼓 加藤 寛治

能「楊貴妃」梅若 六郎 宝生 閑 安福 建雄 一増 仙幸  
後見 赤瀬 雅則 山崎 貴博 松浦信一郎  
山本 勝一 地謡 山本 博道 波多野 晋  
河村 正道 梅若 順之  
山本 博道 波多野 晋

能「楊貴妃」梅若 六郎 宝生 閑 安福 建雄 一増 仙幸  
後見 赤瀬 雅則 山崎 貴博 松浦信一郎  
山本 勝一 地謡 山本 博道 波多野 晋  
河村 正道 梅若 順之  
山本 博道 波多野 晋

## 第44回 学生能・狂言の会

一月九日(日)午前十時始  
名古屋能楽堂  
金剛流能「加茂」(真山女学園大学)  
金春流能「黒塚」(愛知大学)  
和泉流狂言「文荷」(名古屋女子大学)  
金春流舞囃子「高砂」(中京大学) 親世流舞囃子「玉簪」(南山大学)  
親世流舞囃子「清経」(名古屋市立大学) 金剛流舞囃子「鞍馬天狗」  
(岐阜市立女子短期大学) 宝生流舞囃子「小袖曾我」(愛知県立大  
学、名古屋女子大学)  
ほか連調、仕舞など

主催 名古屋学生能楽連盟  
主 能楽普及及事業実行委員会  
協 能楽協会名古屋支部  
(午後五時頃終了予定)

## NHK教育テレビ・能狂言番組 (年末年始特集)

- ◆12月31日(金) 午前6:40～8:00  
能(親世流)「松風・見留」シテ・片山九郎右衛門  
ツレ・片山清司 ワキ・福王茂十郎ほか
- ◆1月1日(土) 午前7:00～7:55 新春能狂言 第一日  
能(宝生流)「石橋・連獅子」シテ・宝生 英照  
ワキ・錦木 岑男ほか
- ◆1月2日(日) 午前7:00～8:00 新春能狂言 第二日  
狂言(大藏流)「素袍落」茂山千之丞、茂山千作、茂山忠三郎  
狂言(和泉流)「六地藏」野村万蔵、野村万之丞、野村良介ほか
- ◆1月3日(月) 午前7:00～8:00 新春能狂言 第三日  
能(喜多流)「羽衣・舞込」シテ・粟谷 菊生  
ワキ・宝生 閑ほか



戦後名古屋能楽史 ⑤

第二章

演能の場を求めて

昭和二十一年

竹尾 邦太郎

年は改まったが疲弊し尽した焼土から復興の種音高らかにという訳にはいかないのが現状であ...

ない。つねに正確な演能は神品とも称されている。当時、この記事を閲夜の二灯と見た能楽関係者や...

平成12年度

観世会定式能 予定

番組

平成十二年度の名古屋観世会定式能は、二月十三日(日)を初回として、年五回催される。予定番組は次のとおり。会場は名古屋能楽堂。

第一回(二月十三日(日))

第二回(四月九日(日))

第三回(六月十一日(日))

第四回(九月十日(日))

天女 古橋正邦 山本博通 山本勝一 白頭 山本勝一 熊野 梅若六郎 阿漕 観世喜之 九月十日(日)十二時半始

豊嶋三千春師 「道成寺」公演 2月26日国立能楽堂で 金剛流・豊嶋三千春師は、明春二月二十六日(土)東京・千駄ヶ谷の国立能楽堂で、「道成寺」を公演する。開演午後二時。

山本東次郎。鐘後見・金剛水鏡、後見・豊嶋訓三、地頭・宇高通成。入場料 特別席一万五千円、正席一万二千円、臨正席八千円、中正席五千円

狂言 鳳の会 第23回公演

新春初笑い狂言

一月三十日(日)午後一時半始 名古屋能楽堂

さんば 千原今枝 靖雄 小鼓御原富司忠 三番叟 三番叟井上祐一 頭取福井啓次郎 市竹市 学 張章魚 果報者 佐藤 友彦 都の使者 井上 靖浩 後見 井上禮之助 大野 弘之

新春トーク 名古屋女子大学短大教授 林 和利 竹生嶋参 太田啓者 大野 弘之 主人 井上禮之助 後見 佐藤 融

金津地蔵 田舎者 佐藤 友彦 在所者 井上 靖浩 今枝 郁雄 警見 政行 九条 名鉄

青陽会定式能 (第44期)

第1回

二月五日(土)十二時半開演 名古屋能楽堂

能組

仕舞 弓八幡 生駒 里翠 三村 恵子

胡蝶 星野 路子 近藤 幸江

清沢 梅田 邦久 飯富 雅介 河村真之介 大野 誠

山姥 祖父江修一 武田志房

飯富 雅介 河村真之介 大野 誠

柳原富司忠

三村 恵子 前野 郁子 近藤 幸江 美和

飯富 雅介 河村真之介 大野 誠

柳原富司忠

三村 恵子 前野 郁子 近藤 幸江 美和

飯富 雅介 河村真之介 大野 誠

柳原富司忠

三村 恵子 前野 郁子 近藤 幸江 美和

飯富 雅介 河村真之介 大野 誠

柳原富司忠

三村 恵子 前野 郁子 近藤 幸江 美和

飯富 雅介 河村真之介 大野 誠

柳原富司忠

三村 恵子 前野 郁子 近藤 幸江 美和

飯富 雅介 河村真之介 大野 誠

柳原富司忠

三村 恵子 前野 郁子 近藤 幸江 美和

飯富 雅介 河村真之介 大野 誠

柳原富司忠

三村 恵子 前野 郁子 近藤 幸江 美和

飯富 雅介 河村真之介 大野 誠

柳原富司忠

三村 恵子 前野 郁子 近藤 幸江 美和

飯富 雅介 河村真之介 大野 誠

柳原富司忠

三村 恵子 前野 郁子 近藤 幸江 美和

飯富 雅介 河村真之介 大野 誠

柳原富司忠

三村 恵子 前野 郁子 近藤 幸江 美和

飯富 雅介 河村真之介 大野 誠

柳原富司忠

三村 恵子 前野 郁子 近藤 幸江 美和

飯富 雅介 河村真之介 大野 誠

柳原富司忠

三村 恵子 前野 郁子 近藤 幸江 美和

飯富 雅介 河村真之介 大野 誠

柳原富司忠

三村 恵子 前野 郁子 近藤 幸江 美和

飯富 雅介 河村真之介 大野 誠

柳原富司忠

三村 恵子 前野 郁子 近藤 幸江 美和

飯富 雅介 河村真之介 大野 誠

柳原富司忠

三村 恵子 前野 郁子 近藤 幸江 美和

飯富 雅介 河村真之介 大野 誠

柳原富司忠

三村 恵子 前野 郁子 近藤 幸江 美和

飯富 雅介 河村真之介 大野 誠

柳原富司忠

三村 恵子 前野 郁子 近藤 幸江 美和

飯富 雅介 河村真之介 大野 誠

柳原富司忠

三村 恵子 前野 郁子 近藤 幸江 美和

飯富 雅介 河村真之介 大野 誠

柳原富司忠

三村 恵子 前野 郁子 近藤 幸江 美和

飯富 雅介 河村真之介 大野 誠

柳原富司忠

三村 恵子 前野 郁子 近藤 幸江 美和

飯富 雅介 河村真之介 大野 誠

柳原富司忠

三村 恵子 前野 郁子 近藤 幸江 美和

飯富 雅介 河村真之介 大野 誠

柳原富司忠

三村 恵子 前野 郁子 近藤 幸江 美和

飯富 雅介 河村真之介 大野 誠

柳原富司忠

三村 恵子 前野 郁子 近藤 幸江 美和

飯富 雅介 河村真之介 大野 誠

柳原富司忠

三村 恵子 前野 郁子 近藤 幸江 美和

飯富 雅介 河村真之介 大野 誠

柳原富司忠

三村 恵子 前野 郁子 近藤 幸江 美和

飯富 雅介 河村真之介 大野 誠

柳原富司忠

三村 恵子 前野 郁子 近藤 幸江 美和

飯富 雅介 河村真之介 大野 誠

柳原富司忠

三村 恵子 前野 郁子 近藤 幸江 美和

飯富 雅介 河村真之介 大野 誠

柳原富司忠

三村 恵子 前野 郁子 近藤 幸江 美和

飯富 雅介 河村真之介 大野 誠

柳原富司忠

三村 恵子 前野 郁子 近藤 幸江 美和

飯富 雅介 河村真之介 大野 誠

柳原富司忠

三村 恵子 前野 郁子 近藤 幸江 美和

飯富 雅介 河村真之介 大野 誠

柳原富司忠

三村 恵子 前野 郁子 近藤 幸江 美和

飯富 雅介 河村真之介 大野 誠

柳原富司忠

三村 恵子 前野 郁子 近藤 幸江 美和

飯富 雅介 河村真之介 大野 誠

柳原富司忠

三村 恵子 前野 郁子 近藤 幸江 美和

飯富 雅介 河村真之介 大野 誠

柳原富司忠

三村 恵子 前野 郁子 近藤 幸江 美和

飯富 雅介 河村真之介 大野 誠

柳原富司忠

三村 恵子 前野 郁子 近藤 幸江 美和

飯富 雅介 河村真之介 大野 誠

柳原富司忠

三村 恵子 前野 郁子 近藤 幸江 美和

飯富 雅介 河村真之介 大野 誠

柳原富司忠

三村 恵子 前野 郁子 近藤 幸江 美和

飯富 雅介 河村真之介 大野 誠

柳原富司忠

三村 恵子 前野 郁子 近藤 幸江 美和

飯富 雅介 河村真之介 大野 誠

柳原富司忠

三村 恵子 前野 郁子 近藤 幸江 美和

飯富 雅介 河村真之介 大野 誠

柳原富司忠

三村 恵子 前野 郁子 近藤 幸江 美和

飯富 雅介 河村真之介 大野 誠

柳原富司忠

三村 恵子 前野 郁子 近藤 幸江 美和

飯富 雅介 河村真之介 大野 誠

柳原富司忠

三村 恵子 前野 郁子 近藤 幸江 美和

飯富 雅介 河村真之介 大野 誠

柳原富司忠

三村 恵子 前野 郁子 近藤 幸江 美和

飯富 雅介 河村真之介 大野 誠

柳原富司忠

三村 恵子 前野 郁子 近藤 幸江 美和

飯富 雅介 河村真之介 大野 誠

柳原富司忠

三村 恵子 前野 郁子 近藤 幸江 美和

飯富 雅介 河村真之介 大野 誠

柳原富司忠

三村 恵子 前野 郁子 近藤 幸江 美和

飯富 雅介 河村真之介 大野 誠

柳原富司忠

三村 恵子 前野 郁子 近藤 幸江 美和

飯富 雅介 河村真之介 大野 誠

柳原富司忠

三村 恵子 前野 郁子 近藤 幸江 美和

飯富 雅介 河村真之介 大野 誠

柳原富司忠

三村 恵子 前野 郁子 近藤 幸江 美和

飯富 雅介 河村真之介 大野 誠

柳原富司忠

三村 恵子 前野 郁子 近藤 幸江 美和

飯富 雅介 河村真之介 大野 誠

柳原富司忠

三村 恵子 前野 郁子 近藤 幸江 美和

飯富 雅介 河村真之介 大野 誠

柳原富司忠

三村 恵子 前野 郁子 近藤 幸江 美和

飯富 雅介 河村真之介 大野 誠

柳原富司忠

三村 恵子 前野 郁子 近藤 幸江 美和

飯富 雅介 河村真之介 大野 誠

柳原富司忠

三村 恵子 前野 郁子 近藤 幸江 美和

飯富 雅介 河村真之介 大野 誠

柳原富司忠

三村 恵子 前野 郁子 近藤 幸江 美和

飯富 雅介 河村真之介 大野 誠

柳原富司忠

三村 恵子 前野 郁子 近藤 幸江 美和

飯富 雅介 河村真之介 大野 誠

柳原富司忠

三村 恵子 前野 郁子 近藤 幸江 美和

飯富 雅介 河村真之介 大野 誠

柳原富司忠

三村 恵子 前野 郁子 近藤 幸江 美和

飯富 雅介 河村真之介 大野 誠

柳原富司忠

三村 恵子 前野 郁子 近藤 幸江 美和

飯富 雅介 河村真之介 大野 誠

柳原富司忠

三村 恵子 前野 郁子 近藤 幸江 美和

飯富 雅介 河村真之介 大野 誠

柳原富司忠

三村 恵子 前野 郁子 近藤 幸江 美和

飯富 雅介 河村真之介 大野 誠

柳原富司忠

三村 恵子 前野 郁子 近藤 幸江 美和

飯富 雅介 河村真之介 大野 誠

柳原富司忠

三村 恵子 前野 郁子 近藤 幸江 美和

飯富 雅介 河村真之介 大野 誠

柳原富司忠

三村 恵子 前野 郁子 近藤 幸江 美和

飯富 雅介 河村真之介 大野 誠

柳原富司忠

三村 恵子 前野 郁子 近藤 幸江 美和

飯富 雅介 河村真之介 大野 誠

柳原富司忠

三村 恵子 前野 郁子 近藤 幸江 美和

飯富 雅介 河村真之介 大野 誠

柳原富司忠

三村 恵子 前野 郁子 近藤 幸江 美和

飯富 雅介 河村真之介 大野 誠

柳原富司忠

三村 恵子 前野 郁子 近藤 幸江 美和

飯富 雅介 河村真之介 大野 誠

柳原富司忠

三村 恵子 前野 郁子 近藤 幸江 美和

飯富 雅介 河村真之介 大野 誠

柳原富司忠

三村 恵子 前野 郁子 近藤 幸江 美和

飯富 雅介 河村真之介 大野 誠

柳原富司忠</



青陽会

平成十二年

第四十四期予定

第一回 二月五日（土） 番組③面
第二回 四月二十二日（土）
吉野夫人 武田 邦弘
杜 若 近藤 幸江
山姥 ツレ星野 路子
前野 郁子

2000年記念 新春能

大観能楽堂自主公演

大観能楽堂自主公演は、「二〇〇〇年記念・新春能」として、一月三日（第二回九十五回）、一月四日（第二回九十六回）の二日間、大観能楽堂で開催する。いづれも午後二時始。後援大阪府、大阪市、大阪府教育委員会、大阪府教育委員会、大阪21世紀協会。

第一回公演

一月三日（月）午後二時始
能「翁」（翁・観世栄夫、三番三・茂山千之丞、千歳・上田宜照、面箱・茂山重司
笛・杉野和、頭取・曾和博朗、脇鼓・曾和尚靖、同・成田達志、大鼓・山本哲也
笛・赤井登三、小鼓・荒木賀光、大鼓・辻芳昭）

第二回公演

一月四日（火）午後二時始
能「翁」（翁・多島利之、三番三・茂山千三郎、千歳・武富康之、面箱・茂山茂
笛・藤田六郎兵衛、頭取・大倉源次郎、脇鼓・清水晴祐、同・荒木建作、大鼓・河村大）

能を彩る 扇の美

名古屋能楽堂展示室

名古屋能楽堂では、能楽堂展示

秋の舞台から(その二)

「観世会」「九皇会」「宝生会」

「花傳の会特別公演パートII」

竹尾邦太郎

「歌占」臨死体験をして三日後、白髪となって蘇生した神職、シテ度会ノ某・曉夫、直而・白垂。翁鳥帽子・厚板着付・鉄色大口白縷水衣、弓短冊を持つ。占いを所望の男・正邦が運れる父を探す子供が、伴幸菊丸（子方・淳夫）と分かる。これは役の親子が実の親子、成長ぶりをみせる物怖じしない淳夫君の確りした問答が立派。や、今暗くは郭公にて候か」の間に、「さん候郭公にて候」もはきはきと利発、親ならずともジシとこよう。再会の喜びは、男に地獄の曲舞を所望される。そこは地獄からの生還者、名残として、現なき有様見せ申さん、の自信は曉夫の真骨頂である。水衣の肩取り、床几は、時移り事去つて、と立つと、乗込拍子に剣の山を踏むところ、炎に咽び扇で口元押えるところ、氷に閉じられ鉄杖頭を砕き、と小廻り安座から扇で頭上指さすところ、などなど地獄の責め苦を調章に則る具象の型に鮮やかに見せる。

「不見不聞」シテ舞の太郎冠者・小三郎と首の菊市・又三郎、二人しての主・高義の留守居を仰せ付かり、退屈漫遊の戯れは知らぬが仏の互いの弱みを弄び擲擲する裡に喧嘩になる。不具を笑いの種にするなどお天道様を憚るが、昔はそれをきつくたしなめる人が回りに幾らも居り、また不具者も負けては居らず、世の中それなりのバランスがとれていた様だが、今は差別語使用禁止を言わばかり、使わなければよいというものもあるまい。「障害者」という言葉も嫌だが、頭がおかしい、腹が悪い、しかし外見が普通なら「健常者」というのも胡散臭い。平曲に事寄せ舞を諷刺する旨、それを察し小舞「鶴鶴」のキリハ名残惜しさをいかにせん、でパツと首の脚を取って投げ飛ばし仇を取る舞、両者の駆け引きに嫌味はなく、ただ一途にへこましてやろうの思いは、「持米が悪からうぞ」と言い糸さっぱりしている。

「海士・懐中ノ舞」シテ四郎、前は面曲見・横浅黄・白摺箔（銀観世水衣）着付、灰色地露芝二飛燕文縷袴腰巻の装束、水衣が着るならモキドウは羽衣の前と同じく上半身裸体に近く、今風ならさしずめウェットスーツ、され

「宗八」本来生具を厭う善の僧が料理人シテ宗八・又三郎に、料理人は僧、小三郎に成り代わるのも他人の仕事は良く見えるため、主・祐一に雇われ職掌当然の用を言いつけるが互いに不慣れどころかすぶる素人、互いに見える見かねて手を出せば固より昔執った柄柄である。其処を主に見つかつて詰まされるが、宗八・又三郎の経の読みっぷりは堂に入り、小三郎の魚捌き作法の講釈も活きよい。聊か教訓めくが臭くらなりの狂言。（27分）

「山姥・白頭」シテ喜之。我が名を騙るとは言わぬが、その評判の芸で我が名を冠し都で盛名を馳せる百万山姥（ツレ二郎）に、刃土の深山に居る本家山姥のレーンデール（存在理由）は奈辺に在るか、の哲学的命題を明かすのが本家山姥の曲舞である。後シテは白っぽい山姥専用面・白頭・横浅黄・縷箔着付・金紫大鱗文半切・立湧文無紅厚板蓋折。一洞空しき云々、のサシが抜けがクセは力強い。法性蓋を表現して、と左へ見、下化衆生を表して、と拍子二ツ、床几立つて左半身に構え、金輪際及べり、と扇逆手にぐいと下を指し拍子踏み、再び床几に掛るところなど胸が空く。鹿背杖で山廻りを見せる立廻は終わり近く、合膝返シから立つところは如何にも峻厳な山の印象。キリでは二ノ松で、影を尋ねて、と頭取り月を見る風情が佳い。なお前シテは面雲女、そこはかとなく山ノ精の神秘を匂わせていた。（1時間32分）

「西王母」シテ舞一。前は、三千年に一度咲くという桃の枝を担げ、ワキ帝・雅介に献上する。西王母の身分と明かされ、天に戻り仙桃を齎さんと消える。後には、面増・黒垂・天冠・襟白赤・白摺箔着付・緋大巾・紫長袖（籠目・花ノ丸文）、飾太刀の美々しい姿。ツレ侍女・詩乃から仙桃を受け取り帝への約束を果たすと祝意の中ノ舞。露を取るとき、扇開く時の手際や、袖巻夕際の遣り直し、は気になるが、キリの、雲の花鳥春風に和しつと、引分ヒラタとところに和気。（1時間10分）

「花筐」シテ舞。花筐と置文を残された照日ノ前の、悲しみに耐えようと努める気持が内から滲み、文読み終ると立つところ、は、独り残りて有明の、と筐（竹籠）の細い柄にさえ頼ろうとするかにみえ、松の嵐も何時しかに、と右ウケ下を見る姿の、沁々心が引かれる短い前場が出て、使いに立ったワキツレ信広の後まいった態度もよい。

「護法」別名を名取姫（名取老女）。丸岡桂著「古今謡曲解題」の第八・社寺神仏の項にあり、「名取の里に年老いたる巫女ありて、久しく熊野を信じ、此里に勧請申したるに、護法善神現れて奇特を示す」とある。名取は現在の宮城県名取市、仙台市に隣接し名取の里は狂言「名取川」にも

みえる。復曲に際し基本正樹が熊本を構成し、梅若六郎が演出、初演は平成五年（一九九三）一月廿四日、福岡大演能楽堂での梅若六郎の会、配役はシテ名取姫・千五郎（当時）、ツレ護法善神・柴夫、ワキ山伏・東次郎で、以来東京・京都で公演を重ねるがシテだけは一貫して千作である。先ず三熊野の山伏・万原、盤夢を得て松島平泉の途次名取の里に立ち寄り、目当ての靈屋に映く白椿を眺めていると春風を吹くような一瞥（六郎兵衛）の裡に茶色引廻シが下ろされ、シテ姫・千作（直而・姥姥）がつくねんと居る。本宮のお告げを齎す山伏から那の虫喰いの歌を賜わり感謝の姫は、有り難い神徳に双動められ感涙し、目出度き折柄と勤められ物着に金色小立烏帽子・鬱金色単狩衣（衣紋）を着け、鈴を持ち、へいでいで神慮を涼しめんと、ツトと捧げ、神楽を舞う。舞の途中強く拍子踏みよめる愛敬もみれば、つんのめるかの小刻みな運びは足に身体が付いて行かない。前後に揺らぐ身体で鈴を振る、草臥れ果ててへたり込み安座する、半幕で姿を現したツレ護法善神・九郎右衛門の、突き出す剣から発する靈力を与えられて再び立ち上がり、力強く舞い納めるなど、千作老足の巧みに抜群の描写力である。早苗で出たツレは面童子・黒頭・厚板着付・萌黄半切・金地袴袴衣（衣紋・右肩脱ぎ）・幣付剣、舞動に颯爽勢威をみせ、剣を扇に替えては地（清司・邦久ら）へ煩惱の垢を濯げば、の数拍子が足踏み洗濯を思わせて象徴的。キリは脚を組み進えたり流レ足などの派手な型も精彩、へかく神託の道は遠し、と姫に近づき立たせると、二ノ松へ行き、姫は後を追って正應合掌叩頭すれば、山伏も居立ち護法善神を見送る。護法善神は囃子の急調に三ノ松で袖を被くと、護法は上がらせ給ひけり、の地の裡、後ろ向きに幕に入り、姫が常座で拍子踏み太鼓の残り留、神仏混浴時代を写す能の原初形態を窺わせ、示唆に富む復曲で面白かった。（52分）

（52分）9月25日・花傳の会特別公演パートII